短歌私鈔

藤茂吉著

短歌私鈔

齋藤茂吉著

短歌私鈔

東京都立中央図書館

KANDA TOKYO
TAIHINDO

齋藤茂吉著

アララギ叢書第五編

短歌私鈔

東京

白日社藏版

齋藤茂吉著

アララギ叢書第五編

短歌私鈔

東京　白日社藏版

卷首小言

○

歌作ることを割合に好む予は、古人の作を讀むことも割合に好んでゐる。古人の作を讀むのは、特別な研究目的があつて讀むのではなく、讀んでゐるといゝ氣持になるからである。それでも讀むとなれば解釋が必要になつて來る。そこで字書を引く。また讀んでゐるうちに相當の意見も出てくる。さうすると其れを發表したい氣持になる時がある。それ等の事と雜誌アララギの原稿を作る事とが結合して成つたのは、この「短歌私鈔」の本(もと)である。このたび前田夕暮君が、「私鈔」を一冊の書物にして呉れるといふので、もと書棄てた「私鈔」を一纏めにして讀んで見ると、いかにも不滿の點が多い。そこで其れを訂正增補した。おもふに古歌を評釋するのは難業の一つである。それを果すには、根本の學問といろい

ろな豫備知識が要る。しかるに予は予の學問を顧みていかにも貧しい事を殘念に思ふ。それでもどうにか、予の尊敬する、源實朝、僧良寛、僧愚庵の歌を鈔することを得た。それを心から感謝しなければならない。予の言説は傳統から云へば、正岡子規、伊藤左千夫の系統を引いてゐる。師承の偏癖はあつても、予の言にいゝ處のあるのは此が爲めである。さうして予の言のいゝ處は、現世來世の歌を好む少年少女人の心に働き掛けるに相違ない。さうしたら予の心は多幸である。

○

「私鈔」は、本來は予自身の爲めに書いたのであるが、公刊するとなると豫想のなかに讀者が這入つてくる。そして讀者に對する微かな願望の心が湧いてくる。予が如何なる歌を選んだかを見ることその一つである。その歌の一つ一つに奈何の價を打つてゐるかを見ることその二つである。縱ひ言は淺くとも概論に止めなかつた事を見ることその三つである。私鈔の言も忽然として湧いたものでなく、それ相當の由來と、御蔭

を蒙つたものとがある。それも書留めなければならない。

○

金槐集私鈔。明治三十一年の夏休みに、淺草區東三筋町に住んでゐて、佐佐木信綱氏の「歌の栞」を買つて來て讀むと、西行法師の偉れた歌人である事が書いてある。そこで、「日本歌學全書」第八編を買つて來た。この書物には、「山家集」のほかに「金槐集」をも收めてゐる。これが「金槐集」を見たはじめである。當時の予は未だ少年であつて、歌書などを買つたのは覺束ない知識欲に驅られての所爲に過ぎなかつたのである。それでも一度は讀んだものと見え、ところどころに標點などを打つてゐる。それから五六年間さういふ書物を殆ど顧みずに經た。明治三十八年、「竹の里歌」が機緣となつて、和歌を作つて見ようといふ氣になり、竹の里人のものを集めたり、「心の花」の第四卷第五卷を集めたり、伊藤左千夫先生に師事するやうになつたりしてゐる間に、二たび「金槐集」を讀むやうになつたのである。それからは度々(たびたび)讀み、度々好きな歌には標點を打つた。當

時予は高等學校の第三部三年生で、神田區和泉町に住んでゐた。それから間もなく青山に轉住したのである。明治四十二年ごろ、古泉千樫君と二人で『金槐集』の鈔を作らうとした事があるが、それは果されなかつた。明治四十三年の暮に卒業試驗がをはつて、吳教授の精神病學教室に入れてもらふやうになつてから間もなく、雜誌アララギの編輯を擔當するやうになつた。その原稿として書いたのは、『金槐集私鈔』のはじまりである。私鈔は明治四十四年五月からはじめて、一時中止し、明治四十五年七月二十八日にをはつてゐる。本になつた書物は、日本歌學全書第八編收の『金槐集』である。最初のうちは氣乘がして少しく精しく書いたが、だんだん粗笨になつて行つてゐる。大正四年の夏に、纏めて一應、古泉千樫君の校閲を經、採るべき歌も增補してもらつた。大正四年十二月二十六日からはじめて佐佐木博士校訂の貞享本『鎌倉右大臣家集』に據つて增補し、大正五年一月六日に終つた。その後、太上天皇に奉つた三首、二所下向後の歌に就き、佐佐木(信綱)博士の教示をあふぎ、まだ不安の點がありながら、

一先づ『私鈔』の稿を了へたのである。ここに佐佐木博士及び古泉千樫君に感謝の念を捧げる。はじめは勝手に好きな歌から鈔したのであつたが、今回それを、四季、戀、旅、賀、雜といふやうに大體分類したのである。

○

良寛和歌集私鈔。　正岡子規先生が良寛の歌に就いて一寸言つたのを何かで讀んだやうに記憶してゐた。いま檢べて見ると、それは雜誌ホトトギス第四卷第三號(明治三十三年十二月)所載の、『病牀讀書日記』中にある。「歌は書に劣れども萬葉を學んで俗氣なし」とか「いはゆる歌人に勝ること萬々」などと云つてゐる。其の後伊藤左千夫先生が良寛の歌について稍精しく論じた(明治四十年日本新聞所載、宗武の歌と良寛の歌參看)。兩先生の讀まれた良寛の家集は、村上半牧氏が編輯し越後新潟の書肆小林二郎氏が出版した『僧良寛歌集』(明治十二年三月)である。そのうち大宮季貞氏が編輯して東京の書肆警醒社から、『沙門良寛和歌集』が出版された。(明治四十一年三月)この書は一番歌の數も多く編輯の爲方も親

切であると思ひ、此書より予の好きな歌を鈔して見ようと思ひ立つたのは大正二年春のころである。それより先に、先づ良寛の生涯一般を知らねばならぬと思つて參考書を集めて居たが、なかなか思ふ樣にならず、中村憲吉君の盡力により、小林存氏の「彌彦神社。附、國上と良寛。大正二年四月、越後新潟萬松屋出版」と中村隆治君の盡力により「僧良寛詩集。附、文學士山崎良平述、大愚良寛。明治四十四年、越後新潟精華堂出版」の二書を得たに過ぎなかつた。此二書と大宮氏の「沙門良寛和歌集」卷頭所載の良寛小傳とを參照して、大體、良寛の一生涯を伺ひ得たけれども、未だ疑問の點も多かつた。それでも歌に獨斷の解釋を附けながら「良寛和歌集私鈔」と題して、雜誌アララギ四ヶ月分の原稿を作つたのは、大正三年五月のことである。併し詞書(ことばがき)のあるべき筈の歌でありながら詞書が書いてないのが多い。さういふのは予には眞の解釋が出來ない。ただ疑問のうちに想像を以て補充してゐたに過ぎなかつた。そのうち島木赤彦君が上京した。島木君は良寛に關する非常に良い參考書を持つて居た。それ

は、西郡久吾氏の「沙門良寛全傳」(東京及長岡の目黑書店藏版、大正三年一月)である。此書を讀んで良寛の生活を始めて明かにしたと同時に、良寛の歌を釋く上に是非知らねばならぬ眞心や定珍などいふ人の略傳をも知り得、又本書後半の大分を占めてゐる「倭歌並評釋」を讀んで、詞書も知ることが出來、予の私鈔の言の誤謬も分つて來たのである。そこで予は本書によつて、「私鈔」を訂正增補し得たのである。「良寛上人雜記」中の略傳等は、全く本書の鈔錄である。ここに明記して感謝の意を表する。「私鈔」をへたのは大正三年十月十六日のゆふべであつて、それを二たび少しく訂正增補したのは、大正五年一月十六日である。其の時、「杉のしづく」の句に就いて、大須賀乙字氏の教示をあふいだ事を感謝する。

○

愚庵和尙の歌。愚庵和尙を知つたのは、「竹の里歌」卷頭の三首に緣つてである。其の生涯を知り歌全體を知つたのは、「愚庵遺稿」に據つてである。私鈔は大正三年十二月に書いて、大正四年一月のアララギに載つ

たものである。歌の訓方(よみかた)に就いては自分の頭だけで爲たのである。

○

「私鈔」の言中には誤謬も多いことと思ふ。何卒教示せられん事を懇願す。さうして幾分でも予の言の非を改めたいのである。又腑に落ちない點があつたら議論せられむ事を希望する。予の言非ならばあやまらねばならぬ。なほ此「私鈔」のほかに「山家集私鈔」「平賀元義の歌」「宗武、眞淵、魚彦、曙覽らの歌に就いて考覈したいと思ひ、稿半ば成つたのもある。それらは、「短歌私鈔」第二編に收めたき考である。大正五年一月十六日夜、東京青山にて、齋藤茂吉記。

短歌私鈔目次

○巻首小言……（首一）
○金槐集私鈔……（一）
○源實朝雜記……（一三五）
○良寛和歌集私鈔……（一五五）
○良寛上人雜記……（二四七）
○愚庵和尚の歌……（二六七）
○巻末小言……（二九四）

金槐集私鈔

金槐集私鈔

○

(二)今朝みれば山も霞みてひさかたの天の原より春は來にけり

正月一日に詠んだ歌である。四角張つた形式的な歌になり易い處を作者の息(いき)をふきかけて活かしてゐる。この歌の結句は『來にけり』と斷定して『來ぬらし』とか『來ぬらむ』とか云つてゐない。この場合の『けり』は感歎の助動詞であるが、感歎のうちに斷定の意がある。思ひ切つて大きく平氣で云つて居るのがよいのである。そしてゐて『今朝みれば山も霞みて』とちやんと急所はのがさない。換

言すれば實際の感じを重んじて居る。實感に順じてゐる。讀者の側からいへば『天の原より春は來にけり』だけでは一寸困るのであるが『今朝見れば』云々といはれると初めて感じに乘つて來る樣に思はれる。

參考として立春の歌を掲げるならば、『久方の天の香具山このゆふべ霞たなびく春立つらしも』（萬葉卷十人麿歌集）は秀歌であつて極めて大きく自然に歌はれてゐる。『久方のあまの原より生れきたる神のみこと・・・』（萬葉卷三、大伴坂上郎女長歌）は句法の類似のために書いて置く。『春立つといふばかりにやみ吉野の山も霞みて今朝は見ゆらん』（拾遺集壬生忠岑）や『春霞たてるを見ればあら玉の年は山より越ゆるなりけり』（拾遺集紀文幹）など類想の歌はきはめて多い。

○

（三）打靡き春さり來れば楸生ふる片やま陰にうぐひすの鳴く

『春』の枕詞としては『打靡く』といふのが普通である。萬葉集では必ず『打なびく春』というてゐるが、此時代には多く『打なびき春』と用ゐた。金葉集、新古今集、續後撰集、風雅集など多くさう用ゐてゐる。『靡く』に『打延へて』『おしなべて』などの意味を有たせて副詞のやうにしたのだかも知れない。言語變遷の一つの例である。

この歌には一寸した心持はある。『鶯の鳴く』などの陳腐な句で結んでゐながら、『打靡き春さり來れば』などの陳腐な句法を用ゐてゐながら、兎も角も一種の心持を起させるのは、全く『楸生ふる片山陰』の中心句にあるのである。この句は從前の論法から云へば動搖する句であらうが、『動く動かぬ』の論は從來の樣に形式的でなく、もつと深く論ずべき性質のものと思ふ。その第一歩として從來の淺薄な『配合論』からして打破してかゝらねばならぬ。要はたゞ張つてゐる作者の心である。而して其心は外象と關聯してゐる・・・此歌の樣な場合では

……其外象に淺薄な人爲的拘束は短歌には不必要であるが爲めである。此點に於て『想化』などいふ事も漫りには云ひたく無い。次に此歌の感じは平凡であり陳腐であるが、かういふ感じ方は誰にでもあるものと見え昔も今もかういふ感じの歌は絶えない樣である。低級の作者は此樣な感じを惡く誇張していはゆる歌人の感じであると嬉しがつてゐる。

此歌は佐佐木氏の日本歌學全書に從つたのであるが、貞享刊行本（佐佐木博士校訂）には結句、『うぐひすぞなく』とある。なほ參考歌として、『ぬばたまの夜のふけ行けばひさぎ生ふる清き河原に千鳥しばなく』（萬葉卷六山部赤人）『打なびく春さりくれば笹のうれに尾羽うちふれて鶯なくも』（萬葉卷十）の二つを書いておく。

○

（三）松の葉の白きを見れば春日山このめもはるの雪ぞふりける

『屏風の繪に春日の山に雪降たる處をよめる』といふ詞書がある。『このめもはるの』は『このめ春雨かきくらしつゝ』などと同樣の句法で木の芽も張ると春とに言ひ掛けたのである。繪に題した歌であるが、可哀らしい氣持のよい歌である。『松の葉の白きを見れば』などの無邪氣な句はどうして詠めるもので無いかういふ無雜作で味ひある歌を詠むものは、當時の歌壇では實朝一人であらうと思ふ。實朝は雄大な歌、强い歌、眞率な歌を詠むが爲めに賞められたけれども、他の一面に稚い純な處のあるのを世の人は餘り注意して居ない。實朝が當時にあつて只一人萬葉の歌人と相契合せしはおのづから彼の內性命が然らしめたのである。繪に向つてこの樣に簡單で而して題歌として面白い歌を平氣で詠んでゐるのはどう考へて見てもえらい處がある。

【附記】拾遺集に、やはり屏風に題した歌で『見わたせば松の葉白き吉野山幾世つもれる雪にかあるらむ』（拾遺兼盛）といふのがある。また、『霞たちこのめも春

の雪ふれば花なき里も花ぞちりける』（古今貫之）といふ歌もある。實朝は此等の歌の影響をうけたのかも知れない。さうして此等の歌よりもいゝ歌を詠んでゐる。賀茂眞淵この歌を評して、『このめもはる』の處の言掛が實朝の心に似ない、恐らく初期の歌であらうと言つて居る。

○

（四）春風は吹けどふかねど梅の花咲けるあたりはしるくぞありける

『しるく』は『いちじるく』の意である。春風（梅の香を誘ひ來て梅のありかを知らせる）が吹いても吹かなくても、梅の花の香の高きが故に、その咲けるところが著しく知られるといふ意である。この歌の表はし方はなかなか氣が利いてゐる。而して上品である。實朝は三十前で死んだのだから幾ら勉強しても全然前人の模倣を免れる域迄には達してゐなかつた。この事は實朝の缺點であ

る。併し今の歌人でも、地を洗はれたら困るものが多いであらう。この歌は恐らく、『梅の花にほふ春べはくらぶ山やみに越ゆれどしるくぞありける』（古今貫之）『山かぜは吹けど吹かねど白波の寄する岩根は久しかりけり』（後拾遺伊勢）などの影響があるらしい。そして恐らくは初期の作であるらしい。

○

（五）このねぬる朝けの風にかをるなり軒端の梅の春のはつはな

『ねぬる』は寢ぬるである。『このねぬる朝』は『此寢たる朝』であつて、朝寢起の心持を現はしたのである。組織から云つて注意すべき詞である。後には實感から離れて、ただ『朝』の枕詞として輕く用ゐるやうになつたのである。『秋立ちて幾日もあらねばこのねぬる朝けの風は袂さむしも』（萬葉卷八安貴王）といふ歌がある。有名な程によい歌では無いが、豐かな上品な歌である。沈痛とか悲痛と

か遣る瀬ないとか、さういふ心の發し以外に、かういふゆつたりした心が吾等の一面にある。この歌の棄てがたき所以も其處にある。この歌には當時一般の歌風のにほひがあるが、一首の調べが重厚で弛みの無いところが異つて居る。なほ實朝作、梅の歌に、『我宿の八重の紅梅咲きにけり知るも知らぬもなべて訪はなん』『梅の花いろはそれともわかぬまで風にみだれて雪はふりつゝ』などがある。

○

(六)水たまる池の坡のさしやなぎこのはるさめにもえいでにけり

『水たまる』は古事記に『みづたまるよさみのいけ』云々とある處から池の枕詞になつたのであるが、枕詞も亂用するのは注意せねばならぬ。この歌の場合は一寸可哀らしく響く(餘り氣がきかないゆゑ)といふのみで餘り感心出來ない用

法である。ただ、意味なき枕詞と見ないで意味を持たせると、相當の心持は出てくる。『この春雨』の『この』は『この一枝をあはれと言はむ』(後出)の歌の樣な指定代名詞よりももつとぼんやりして居る。『今現在降りつゝいて居る』ほどの意味である。この樣に同一の代名詞でも幾通の色合があるから面白いのであつて言語の使用に注意を拂ふ所以もこゝにある。この歌さほど優れては居ないが實感の歌であるから當時の歌壇に一頭地をぬいて居ると思つて採錄して置く。

○

(七)さ蕨のもえいづる春に成りぬれば野邊の霞もたなびきにけり

惡く表せば理窟か洒落に墮するのであるが、かういふ工合に無邪氣に表されると可哀らしくどうも吾等が及びがたいと感ずるのである。それが態と稚がるのではなく無雜作に出てゐるのであるから好い。宗武の『ひむがしの山のもみ

ぢ葉夕日にはいよいよ赤くいつくしきかも』（天降言）も稚い歌であるが實朝の此歌に比べれば餘程氣が利いて居る。矢張り宗武の『二つなき富士の高ねのあやしかも甲斐にありとふ駿河にもありとふ』（天降言）は稍稚く興がり過ぎてゐるといふ憾がないでも無い。要するに自分の感じを尊敬して作つた歌には何處かに味がある樣であるし、作者自身にとつても嬉しいに相違ない。自分さへ嬉しければよい。其以上望むと困るかも知れない。參考歌として、志貴皇子の『いはばしる垂水の上のさわらびの萠えいづる春になりにけるかも』（萬葉卷八）を書いておく。

○

（八）櫻ばな散らまくをしみうち日さす宮路のひとぞまとゐせりける

萬葉の影響を受けた歌で、これぞといふほどのものでは無い。ただ句法の自

然と、俗氣の無い厭味の無い處がよいのである。『うち日さす』は『宮』へかゝる枕詞、『まとゐ』は圓居で車座にゐることから、會合する意味に用ゐる。『散らまく惜しみ』などは萬葉の常套語であつて、いはゆる歌人が歌を樂に作る爲めには便利な句法だ。『宮路』は宮に通ふ路、みやこの路の意味である。『宮路のひと』は宮中の人といふほどに解すべきものかと思ふ。一本に結句が、『とのゐせりける』とある。要するにかういふ作は、題詠であるから或光景をおもひ浮べていろいろと作り試みたのであらう。それで、『宿直せりける』も誤寫ではなくて矢張り同一の人の手になつたものらしい。『まとゐせりける』の方が平凡だが自然に行つてゐる。

○

（九）かつらぎや高間の櫻ながむれば夕ゐる雲に春雨ぞふる

この歌の特殊な點は『夕ゐる雲に春雨ぞふる』にあると思ふが、夕ゐる雲とは、高間の山の夕ぐれの櫻の花が雲の樣になつて咲いて居る光景をいふのではあるまいか。『櫻ながむれば夕ゐる雲に』と續いて居る處からこの樣な解釋になるのだが、この解釋を正當だと許すなら此歌は甚だ面白い佳い歌の樣に感じられる。佳い所以も主として第四、第五の句に存すると思ふ。

【附記】 いま味はつてみると、さう佳い歌ではない。それは『雲』といふのが目ざはりになるが爲めである。この歌は『かつらぎや高間の櫻さきにけり立田のおくにかかる白雲』(新古今寂蓮)などの歌を頭にもつてゐて題を置いて詠んだのであらう。櫻を雲に見たてたのが目ざはりになるが、第四、五句の言ひざまの斷定的なのが氣持よく響くのかも知れない。

○

(10)ながめつゝおもふも悲し歸る雁ゆくらむ

かたの夕ぐれの空

『ささらぎの廿日あまりの程にや有けん北むきのえんに立出て夕暮の空をながめて一人をるに雁のなくを聞てよめる』といふ詞書と相待ちてしみじみとした心を味ふ事が出來る。これは名詞止めの歌である。さうして、『夕ぐれの空』などと止めて、新古今張りではあるが、一首に浮華なところ、作爲の痕、衒氣、さういふものが少しも認められない。初句から結句まで、心の動くがまゝに極めて自然に言ひくだしてゐる。さうして『歸る雁ゆくらむ方の夕ぐれの空』と飽くまで結象的にあらはして居る。實朝は、うちに悲痛の心を藏して、しかも自然の本質をながめ得た人であつたらう。一方には極めて巧妙な手腕を感ぜしめる歌であつて、西行、定家の佳作に迫らんとしてゐる。

○

(11)玉藻かる井手のしがらみ春かけて咲くや

川瀬の山ぶきの花

かういふ作でも何となしよい處がある。『玉藻かる』は『井手』の枕詞である。『井手』の本來の意味は、『玉藻かる井堤のしがらみうすみかも戀のよどめる我が心かも』(萬葉集卷十一)とある如く、田に水を沃せん爲めに河水を堰き留めたところをいふのである。併し此歌の『井手』は山城國井手の川を指したので特定の場處になつてゐる。此の川は山吹の名所になつてゐて、『蛙なく井出の山吹散りにけり花の盛に逢はましものを』(古今)や『春ふかみ井手の河波たちかへり見てこそゆかめ山吹の花』(拾遺)などの歌もあり、實朝の歌にも『玉藻かる井手の河風ふきにけりみなわにうかぶ山吹の花』といふのがある。『しがらみ』は柵などを打ちそれに柴竹などを搦めつけて水を堰めるためにこしらへたものをいふ。

『春かけて』は『春になつて』といふ程のつもりで用ゐたのであらうが、此は古今集の『梅が枝に來ゐる鶯春かけて鳴けどもいまだ雪はふりつゝ』の『春かけて』が『冬から春へかけて』の意であるのを當時の人が『春になつて』の意に誤り釋いてゐたのに依つた罪であらう。賀茂眞淵もさう言つてゐる。しかるに近藤芳樹の寄居歌談に此『春かけて』を論じて、『山吹のおのがさかりのころをかけての意にて春かけてとよみ給へるなり。よみ誤りなりといへるはかへりてわろし』と云つてゐる。古泉千樫氏は、『春かけて』は『春ふけて』の誤寫ではあるまいかと談つた。いづれにしても『春かけて』は適切ではないと思ふ。

○

(三)我こころいかにせよとか山吹のうつろふ花のあらしたつみん

此歌は日本歌學全書にはなく、貞享本にあるものである。此歌には『山吹に風の吹くをみて』といふ題がある。『我心いかにせよとか』と云つて、散る山吹の無常相に對して、遣瀬なき切ない心を吐露して、さうして、『嵐立つ見ん』と云

つて、ひらめく意志の發動を能働的にあらはしてゐる。かういふ内に徹した切實な歌は當時にあつてはめづらしいと思ふ。かかる優秀な歌にむかつて、實朝の歌を讃美した眞淵ですら、『結句のあらしいかが』くらゐで濟まさうとしてゐる。我等が此歌を發見して賞してゐるのは嬉しい事である。此歌もし『山吹のうつろふ花に嵐たつらむ』といへば言語が順直になるが、そのかはり重さ厚さ鋭さが減つてくる。つまり此歌を解するためには、『山吹のうつろふ』を上下二方にかけて味ふのである。『我心いかにせよとか山吹の花のうつろふ。山吹のうつろふ花の嵐立つ見む』とするのである。さうすると遣瀬なき心に堪へて無常相を諦觀しようとする心が分かるやうに思ふ。實朝は實際はそんなに考へて作つたのではあるまいが、現在の予が此歌を味はふとなると、こんな工合におのづからなるのである。

參照歌。『わが宿の尾花おしなべ置く露に手觸れ我妹子ちらまくも見む』（萬葉卷十）

『夕やみは道たづたづし月まちていませ我が背子そのまにも見む』（萬葉卷四）『くるるまも待つべき世かは仇し野の末葉の露に嵐たつなり』（新古今、式子内親王）『我心いかにせよとてほととぎす雲間の月のかげに啼くらむ』（新古今、後成）『藤ばかま嵐たちぬる色よりもくだけて物はわれぞかなしき』（續拾遺、後成）などの歌を書いておく。實朝が此等の歌から盡く影響を受けたといふ意味ではなく、實朝の歌を味はふのに便利であるといふ意味で書きつけ置くのである。

○

（一三）散のこる岸のやまぶき春深み此ひとえだ
をあはれといはん

『山吹の花折て人のもとへつかはすとて』といふ詞書のある歌である。山吹の花のあはれ深い姿と作者がいかにも接近して居る。言を換へていへば作者がほんとうに感じて作つた歌である事が少し注意すれば分る。この歌の特徴は其處

に存するのだと思ふ。『散のこる岸のやまぶき』は眼前の光景である。そこで一寸心の休止がある。『春深み』で、作者の心が動いて詠歎の色調を帶びて居る。二たび僅かの心の休止がある。この邊の關係は味ひのある處である。『此一えだをあはれといはむ』は連續の心であつて作者の思が力づよく、一ぱいになつて外へ出たのである。此一枝の『この』の如き表はし方に就ては予は屢々論じ自らも表現し同人も時々この樣な表現法をとつてゐるから、今更贅言はせぬ。だ『あはれといはむ』といふ如き幾度誦しても味ひの籠る言葉と、『この』が如何によく相響くかを味ひ度いと思ふ。かの有名な三夕歌の一つの『ながむれば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋のゆふぐれ』(定家)は光景が遠く大きいのだから此樣な歌になるのが或程度までは自然であらうが、それでも矢張り上の空の調子がある。實朝のこの歌などと比較する事がかんじんである。實朝の歌を賞揚した眞淵も、この歌には特別の注意を拂はなかつたらうし、現代の歌學者も

この樣なる歌は注意しまいと思ふ。餘り勉強家でない予は矢張り今夜までこの歌のある事を知らずに居た。古い歌集などから一寸でも氣持のよい作を見出すのは嬉しいものである。

【附記】 結句の『あはれと言はん』は貞享本には『あはれと言はなん』になつてゐる。人に贈つた歌だから『言はなむ』と願望の意を表したのであらう。

參考歌。『たぐひなき御法のために折る花はこの一枝も匂はざらめや』(玉葉、二條天皇大后宮攝津)『折らずとも散らでもはてじ櫻花この一枝は家包にせむ』(風雅、後惠法師)『いたづらにこの一枝はなりぬなり殘りの花を風にまかすな』(後拾遺、和泉式部)などに『この一枝』の句がある。

なほ此歌と一處に出來た歌は、『おのづからあはれとも見よ春ふかみ散り殘る岸の山吹の花』といふのである。前の歌と二つ竝べて讀むと一層味ひがふかいと思ふ。

○

(一四)春ふかみあらしもいたく吹く宿はちり殘るべき花もなきかな

『春のくれをよめる』といふ詞書がある。『暮春』の氣持を概括的に說明したやうに聞える歌である。併し『散り殘るべき花もなきかな』の句は矢張り眼前落花の景に見入つて言つたつもりに解釋しなくてはなるまい。さうすれば一首をとほして一種の哀韻を感受することが出來る。初句に『春ふかみ』と云つたから、『それに加ふるに』といふ意味で『あらしも』の『も』と云つたのであらうが、どうも理に墮ちてゐる。『あらしの』といふべきところである。『宿は』の『は』も此歌を說明的にし概括的にした所以であつて、注意するに足るところである。『あらし』はこゝは本來の意味を失つて、後來の意味の嵐字に相當するのである。支那の嵐字は印度語から來たので、毗藍婆といふのが面倒ゆゑ毗藍といひ、山風

を合して嵐字を作つた。初めは迅猛風を意味したので、翠嵐煙嵐などの用法と幾分違ふ。

○

(一五)春過ぎて幾日もあらねど我やどの池の藤なみうつろひにけり

小氣の利いた歌を作つて得意でゐるともがらは、この歌を平凡と言ふであらうが、この歌の作者は上の空で歌を作つてゐない。それゆゑ、天然の活々とした再現とともにそれと同化し盡した作者のおもかげが彷彿として現はれて來るを味はふことが出來る。第二句の『あらねど』と字餘りにした處、結句の『うつろひにけり』で結んだ處がいゝ。この『あらねど』は、『秋立ちて幾日もあらねばこのねぬる朝けの風はたもとさむしも』(萬葉卷八)などにあるやうに『あらねば』と詠んだのを後世の人が誤り傳へたのであらうと眞淵が云つてゐる。萬葉の『あら

ねば』は『あらねど』『あらぬに』の意である。結句の『けり』は詠歎の助動詞である。この歌一方から言へば、『けり止め』の結句を有する短歌の一つの標本と言つてよい。一首五句盡く連續的である點、特に初句の表はし方、第三句から四句への連續が『の』である點、五句共いはゆる『句割れ』の無き點等に注意すべき價がある。句割れは、句割れでなければどうしても表はし得ない場合に限る。かういふ事を割れは、句割れでなければどうしても表はし得ない場合に限る。かういふ事を多くの歌に就て分類研究するのは面白い爲事であると思ふ。歌の分解的研究は歌をして型を作らしめるといふが如きは未だ至らぬ心配である。最後にこの歌を味ふ時、歌のよしあしは決して材料の問題でないといふ事が分るであらう。

○

(一六)五月雨に水まさるらし菖蒲草うれ葉かくれてかる人ぞなき

『うれ葉』は梢の葉の事をいふのが普通だが菖蒲の葉の事などにも用ゐると見える。『かくれて』は『葉がくれに』といふ意味であらう。菖蒲の葉が水の爲めに見えなくなつたといふ意味とすれば『水まさるらし』は一寸變である。矢張り葉がくれに人がゐて菖蒲をかる意味であらう。感じのよい歌で繪手本でも見る樣な氣持がする。この歌は恐らく題詠であらう。菖蒲といふ題があるが、昔の人もなかなか微細な感じ方をする。

【後記】この歌は矢張り、五月雨が降つて、田の水が增し、菖蒲が見えなくなつた意に解すべきものである。まへに一寸變に思つた、『水まさるらし』の句は、實際は增水した風景を目に見て居ても、かういふ言方をしたのである。かういふ言方は萬葉集には間々あるから、作者はそれを踏襲したのである。なほ此歌は日本歌學全書に據つたのであるが、貞享刊行本には、『五月雨に水まさるらんあやめ草うれ葉かくれて刈る人もなし』となつて居る。それから、此歌を

『繪手本でも見るやう』と前言したが、此歌はそんなに印象明瞭（子規の用ゐた意味にて）の歌ではない。むしろ一首の調を好むのである。

○

（一七）ほとゝぎすきけども飽かず立花のはなちる里の五月雨の頃

平淡な作であるが誦するに足る作である。杜鵑と橘と五月雨との調和した心持である。『花ちる里』は氣持のよい句である。『きけども飽かず』とか『見れど飽かぬかも』とか『見とも飽かめや』などの句は古來の歌に甚だ多いが、現代口語の『飽きない』と云つて仕舞へば面白味が無いに拘らず、歌言葉として一種の味のあるのは、親しみの心持を表はす場合に用ゐる此言葉は單に現代語の『飽きない』よりは稍別殊の色合を以てゐる點と、甚だ無器用な無邪氣な句である點と、從つて稍漠然とした意味になる點とに因るものであらうと思ふ。

橘と杜鵑などは、その配合がちやんと型にはまつてゐて、その範圍内で腕くらべをしてゐるのである。そして眞淵の『橘のかをれる宿のゆふぐれに二こゑ啼きてゆく杜鵑』（家集）の『二こゑ』が妙であるなどと言ひ立てるやうになつたのである。しかしさういふ事も矢張り面白いのであつて、世の相は必ず一度はさういふところを通過するのである。

○

（一八）五月雨の雲のかかれるまきもくの檜原が峰に啼くほとゝぎす

巻向は地名、檜原は檜の林のある意。作者と光景との關係は稍不明な歌である。距離が遠い樣にも思ふが又左程で無い樣にも思はれる歌である。これは實景に觸れて詠んだのでなく題詠であるからであらう。杜鵑の歌には必ず傳習的な感じ方が纏つてゐる。それも或程度迄は面白いと思ふが、杜鵑の聲を實際聞

くことが現代の吾等には何より急務であるかも知れぬ。

なほ杜鵑の歌には、『在明の月は入ぬる木の間より山ほとゝぎすなきていづなり』『さつきやみおぼつかなきに郭公ふかき峰より鳴きていづなり』『五月雨に夜の更けゆけばほとゝぎすひとり山邊を鳴きてすぐ也』などが金槐集中でも採れる歌であつて、『ふかき峰より』の歌など、流石に實朝の本領を思はしめる。なほ杜鵑の歌に『玉くしげ箱根の山の郭鳥むかふの里に朝な朝な啼く』といふのがある。此は實景であつて題詠ではないやうである。

○

(一九)ふく風の涼しくもあるかおのづから山の蟬鳴きて秋は來にけり

『寒蟬鳴く』といふ題がある。『涼しくもあるか』は『涼しくあるかな』の意。『苦しくも降り來る雨かみ輪の崎佐野のわたりに家もあらなくに』(萬葉卷三、長忌寸奥麻呂)

など參考になる。ただ萬葉の此の歌には、苦痛に堪へがたい響きがあるが、實朝のこの歌の場合はもつとゆつたりしてゐる。これは『苦しくも』と『涼しくも』との意味及び音調の差違による事が勿論であるが、一方は『降り來る雨か』といつて『か』といふ強き詠歎の助辭を直ぐ雨に續ける居る。一方は『あるか』と續けて居る。差點は此處にも存することを知らねばならぬ。一首として味ふべきは無論であるが、又分解的に微細な點に吟味するのは短歌研究者には缺くべからざるやうに思はれる。『おのづから』は自然にの意味であるが、莊重の響きある言葉であつて日本語として特種の味を持つた言葉と思ふ。この歌の場合にあつては遺憾なくその特色を發揮したものであつて古今獨歩であると思ふ。

次ぎに書く參考歌の樣な場合では未だその特色が發揮されて居ない事を注意しようと思ふ。『山の蟬』は山に鳴いてゐる蟬で、里よりも山ではおそく鳴くから斯樣に言つたものであるが、簡單で力あり新味のある言葉ある。一首中にあつ

て、この語は輕々に看過される傾きあると思ふがこの語を見逃す樣では未だしき鑑賞家である。又研究者としては吾等は斯ういふ言葉の價値に向つて飽くまで味はねばならぬ。一首の調べの莊重にしてかゝる光景の表現に適當せる而して主としてそれと融化した作者の心持の染々と味はれるこの歌は、佳といはんよりは尊である。

側から見て他人の作の句を踏襲した樣な形跡がありありと見えて居ながらなほ創作として力を失はざる所以は、彼はそれ等の句を意識せずに知らず識らず用ゐたものであらうし、然らずば眞實に感じて作したからであらう。この點に就て後世の吾等は餘程注意して研究する價値があると思ふ。歌を透して見る實朝は餘程敏感な作者の樣に思はれる。この歌でも『大海の』歌でも餘程敏感である。自然に融化することの出來た彼は抒情詩人として偉なる所以である。

參考歌としては、『おのづから涼しくもあるか夏ごろも日も夕暮の雨のなごりに』（新古今清輔）『山里は蟬のもろこゑ秋かけて外面のきりの下葉おつなり』（風雅定家）『おのづから秋は來にけり山里の葛はひかゝる槇の伏屋に』（金葉經信）『川風の涼しくもあるか打寄する浪と共にや秋は立つらん』（古今貫之）『庭草に村雨降りて日ぐらしの啼くこゑきけば秋は來にけり』（拾遺人麿）などを書いて置く。

一爲事をなさうとして居た當時の香川景樹が實朝の歌を讀んで『ことごとく古調をかすめ』と感じたのも彼にしては自然な感じであつたらう。ただ實朝は年も未だ若し、萬葉あたりの言葉や句法がまだ珍らしい年頃であり、加ふるに歌が好きな處から種々他人の歌なども讀んで諳記もしたらうし又餘程勉强家であつたらしい。そこで作歌の際知らず識らず類似の句なども出たものらしい。かういふ事は現在の吾等がみづから反省すべき性質のものであつて、優秀な實朝の歌に向つて何等のかゝはる處がないかも知れぬ。ただ實朝をして、もう十年の生を保持せしめたかつたと思ふ。歌人として彼はひとりで歩まうとした。

○

(三〇)小篠はら夜半に(の)露ふく秋風をやゝ寒し
とや蟲のわぶらむ

夜更けて小篠の生ひてゐる原の道を歩んで居る。露がもう一ぱいに落ちてゐる。秋風の過ぎゆくなかに蟲が鳴いて居る。この様な境地ではなからうか。『やゝ寒しとや』は此歌の特殊な點である。一方この歌は室内にゐて詠んだ歌の樣にも感ぜられる。それは第三句までの表はし方のどこかに缺陷がある爲めでは無からうか。『やゝ寒しとや蟲のわぶらん』などは寧ろ西行流である。實朝はこの『やゝ』に一種の滿足をおぼえたのであらうし、又そこを他人から影響うけたものと思はれるが、此等は餘り器用すぎた感じ方の句である。それでゐて一首全體が何となし讀んで氣持がいゝ。誰にでもかういふ、やさしい、つゝましい心に同感する心があつて、反感を起すに至らない程度に止まつてゐるからであらう。

○

(三一)玉だれのをすのひまもる秋風は妹戀しらに身にぞ染みける
(三二)雁なきて秋風さむくなりにけりひとりやねなむ夜の衣うすし

第一の歌。『玉だれ』は、玉を緒に貫き垂れて裝飾にするところより、『を』の枕詞に用ゐられてゐる。『をす』は『小簾』である。『妹戀しらに』は『親しい女のことが何となくしのばれるやうになつてくる』ぐらゐの意であらう。『あたら夜を伊勢の濱荻をりしきて妹戀しらに見つる月かな』(千載 基俊)など參考になる。小簾の間を漏れて秋風が吹いてくると、女の事がいろいろと思ひ出されて來て、しみじみと身に染みるといふのである。この歌は、『たまだれのをすのまとほり

ひとりゐて見る驗なき夕づく夜かも』（萬葉卷七）と少し似てゐる。

第二の歌。意味は明瞭である。ただ現代の我等は、結句の『夜の衣』を『よるのころも』『よのころも』『よるのきぬ』『よのきぬ』と四とほりに讀みうるのであるが、これは『よるのころも』と訓む方がいゝと思ふ。一首が順直で、然かも張つてゐていゝ歌である。集中の『秋風はやゝ肌ざむくなりにけり獨や寢なむ長きこの夜を』と比べると興味がある。

なほ初秋の歌の中で、『夕されば衣手さむし高まとのをのへの宮の秋のはつ風』や『天の川みなわさかまきゆく水のはやくも秋の立ちにけるかも』などは採れる歌である。

○

（三三）暮れかゝるゆふべの空をながむればこだかき山に秋風ぞふく

『だんだんと暮れてゆく西空の有樣を眺めて居ると、向うの木の繁つて居る山に風の吹き渡るのが見える。もう秋が來たのである。』といふほどの歌であらう。何の奇もない歌であるが、大まかで、心の儘に歌つてゐて、さうして自然の相がおのづから表はれてゐる。『眺むれば木高き』と續けたところが旨い。一首の張つてゐる點もこゝに原因して居る。『こだかく』は『木高く』の意で、『妹として二人つくりし我やど（我しま）は木高く繁くなりにけるかも』（萬葉卷三）『春日山木高き峰の藤の花……』（新後撰）『……木高き峰の松の白雪』（新千載）などの歌が參考になる。なほ實朝の歌にも、『五月山木高き峰のほととぎすたそがれどきの空に鳴くなり』といふのがある。

○

（三四）天の原ふりさけ見れば月清み秋の夜いたくふけにけるかな

(三五)ぬば玉の夜はふけぬらし雁がねの聞ゆる
空に月かたぶきぬ

二首ともに平凡の樣な歌である。平凡な樣でゐながら一首の連續の工合に微細なよいところがある。そこを見のがしてはならぬ。かういふ歌を作る時は、自然につくづくと眺め入つて、それを『寫生』するといふよりも、もう大體の心持があつて、その心持の中には大體の景象が出來てゐて、それに萬葉集の『天の原ふりさけ見れば大君の』あたりの句が働きかけて、比較的樂々と出來るものらしい。それで居てさう器械的に思はれないのは、作歌する時に本心の緊張が伴ふからである。古歌の句を踏襲してゐても、その古歌に對する尊敬の念が切實であるために、借物のにほひが目だつて來ないのである。

なほ集中には『あまの原ふりさけ見ればます鏡さよき月夜に雁なき渡る』『秋風に夜のふけゆけば久方の天の川原に月かたぶきぬ』『しほがまの浦ふく風に秋たけて離が島に月かたぶきぬ』などがある。

○

(三六)雁のゐる門田の稻葉打そよぎたそがれ時に秋かぜぞふく

ある景色なり、心持なりを、出來るだけ行儀よく竝べようとするのが、此當時の歌風であつたらしい。それゆゑに一首が工合よく纏まりがついてゐても、直截に讀者の胸に響いて來ないのが多い。この歌にも幾分さういふ氣味がある。題詠で一首を纏めようとしたからであらう。『雁のゐる門田の稻葉打そよぎ』から『たそがれ時に秋風ぞふく』のつゞきが、どうも有機的でないやうに思はれる。『たそがれどきに』の句の置き場處が邪魔をしてゐるのかも知れない。されば云つて、『雁のゐる』と『たそがれ時に』の二つは、此一首中にあつて大切な句である。さうして此一首は、歌として相當にいゝ歌である。

なほ集中には『ひさかたの空とぶ雁の涙かもおほあらき野の笹の上の露』『夕されば稲葉のなびく秋風に空とぶ雁のこゑもかなしや』などの歌がある。

○

(三七)かりなきて寒きあさけの露霜にやのの神山いろづきにけり

この邊の作は特別に參考となるわけでも無いが、鈔する場合となれば棄て難い歌である。作者からいつても題詠の作で別に骨も折らずに易々として詠み棄てたものであらう。露霜は『ツユジモ』と讀み秋の末になつて霜近きころの露をいふ。『あさけ』は朝明である。矢野の神山は、伊豫、出雲、備後、播磨などにある。『妻ごもる矢野の神山つゆじもににほひそめたり散らまく惜しも』(萬葉卷十)『長月の時雨の雨に濡れとほり春日の山は色づきにけり』(萬葉卷十)などの歌を心中に有つてゐて、歌會などの席上で題詠として作つたものであるらしく思はれる。

かういふ古調の歌になると、大どかに、のびのびとしてゐて、何となく嚴かな氣が流れてゐる。先人のいはゆる『調べ高き歌』である。棄てがたき所以はそこにある。

○

(三八)道のべの小野のゆふぎり立かへり見てこそ行かめ秋萩のはな

まことに巧妙な歌である。『立かへり』の處までは序歌である。序歌であつても單に言葉の上の綾に過ぎないのならばこの歌の場合は面白くないと思ふ。矢張り夕霧がかゝつて居るところにし度い。少なくも作者は、さういふところまで想をはせて詠んだものと解すべきである。『見てこそ行かめ』などの句は、よくあつた句であるが、これを後世の淺い風流心に過ぎないやうに解釋するのは少しく物足りない。もつと本心から出た親しみの情であらねばならない。萬葉

時代には確かにさうであつたに相違ない。

なほ集中には『朝ぼらけ萩のうへ吹く秋風に下葉おしなみ露ぞこぼるる』『夕されば野路のかるかや打ち靡き亂れてのみぞ露もおきける』といふ露の歌や、『秋風はいたくな吹きそ我宿のもとあらの小萩ちらまくも惜し』『たそがれに物思ひ居れば我宿の萩の葉そよぎ秋風ぞ吹く』などいふ萬葉集模倣の可哀らしいのもある。

○

(二九)萩の花くれぐれまでもありつるが月いでて見るに無きがはかなさ

『庭の萩わづかにのこれるを月さしいでてのち見るにちりにたるにや花の見えざりしかば』といふ端書がある。『くれぐれ』は『暮れ方』といふ程の意である。言振りが餘程稚く出來てゐる。題詠の納まり勝ちのところが少ない。『月出でて

見るに』のあたり、讀んで何となしいゝ氣持に落著いて來る。作者の果敢ないうら寂しい心に同感するからであらう。さういふ一種の力を此歌は持つてゐる。それは一首全體としてであるが、『までも』の『も』『ありつるが』の『が』『見るに』の『に』の續けざまが如何にも働いてゐる。作る時にはおのづから斯く作るのであるが、吟味する段になると矢張りかういふ細かい點まで注意する方がよい。

○

(三〇)妻こふる鹿ぞなくなる小倉山やまのゆふぎり立ちにけんかも

第一二句は實際である。其以下は思ひやりである。牡鹿がひいっと鳴く。その鹿の聲を聞いて直ちに『山のゆふ霧立ちにけんかも』だけでは何だか馬鹿らしい樣な氣がする事が無いでも無いが、そこが稚い純なところで予の好きで好

きで堪らぬところである。その間に無理にいろいろな理窟上の關聯をつけるのは暇のある學者のすることである。作者は決してそんな理窟からこの句を得たのではなく、たゞひよいとさう感じたのであらうから尊いのである。ひよいと浮ぶ感じをも吾々は尊重し度い。崗本天皇の『ゆふされば小倉の山に鳴く鹿のこよひは鳴かずいねにけらしも』(萬葉卷八)は予にとつて嬉しくて堪らぬ歌であるが、實朝も恐らくこの歌を味つて居たのであらう。

なほそのほかに、『夕されば霧たちくらし小倉山やまのとかげに鹿ぞ鳴くなる』『雲のゐる梢はるかに霧こめてたかしの山に鹿ぞなくなる』などの類想の歌もあり、又『月をのみあはれと思ふにさ夜ふけて深山がくれに鹿ぞなくなる』などの西行でも詠みさうな歌もある。

○

(三)秋はいぬ風に木の葉は散りはてて山寂し

かる冬は來にけり

(三)木の葉ちり秋も暮れにし片岡のさびしき杜に冬は來にけり

これらの歌はみな題詠であるらしい。題詠の場合にはいろいろ光景を心に浮べ、心を働かして作るのである場合が多いから、一首が整つてゐても納まり勝で、『理づめの歌』になり易く、流動潑剌の氣に乏しいものになり易い。此等の歌にもさういふ傾がある。ただ『山寂しかる』『さびしき杜』のところで一首の心が集注されてゐるのを注意してゐる。それから此等の歌は、事柄を餘計入れようとして、小きざみになり過ぎ、その間の結合が緊張してゐないために、たるんでゐる。結合の緊張してゐない樣に聞えるのは、に、は、て、の、等が多すぎるからである。おほどかで歌柄が大きく、さうして弛緩しないやうに作るには、精神の集注を要する。

○

(三)ぬは玉の妹がくろかみ打なびき冬ふかき
夜に霜ぞおきける

『深き夜の霜』といふ題がある。冬すでに深き、しんしんと更けた夜に霜はうち延へて降つた。といふ程の意であらう。『打靡きといひて打はへたる事とするは後世也、萬葉に打なびく打なびきといふ二つあれど共に打はへたる事にあらず』と賀茂翁が云つたと日本歌學全書の註にあるが、兎も角かういふ用法が當時に普通あつたとせばそれでよい訣である。實朝は恐らく『ありつゝも君をし待たむ打なびく吾黒髪に霜のおくまでに』(萬葉)といふ歌から知らず識らずこんな技巧を用ゐたのであらう。第一第二句は餘り感心し難いが併しそれがほんの序であつて意味の關係があるにしても大して厭味を感ずる程でも無い。部分々々は以上述べた如くであるが、この歌は實際印象の歌ではなくて題詠であらうと

思ふ。即ち全く心持の歌である樣に思はれる。面白い點もそこにあるのであつて、今でいつたら象徴詩のにほひがあるとでも云つて見度い樣な歌である。『ぬば玉の妹が黒髪』といつたり『冬ふかき夜に霜ぞおきける』などはこれで或心持を起させるのではあるまいか。

○

(三四)夜をさむみ河瀬にうかぶ水の泡の消えあへぬほどに氷しにけり

これも無論題詠的表現であるが、『水の泡の消えあへぬほどに』あたりは一種の心持を起させる。寂しい靜かな心持を起させる棄て難い歌である。ただ作者はどういふ場合にこの歌を詠む氣になつたかが一首を通してほのかながらも予の心に通じて呉れゝばよい、詞書でもあつて呉れゝばよいと思ふのである。併し其は無理な註文であつて、鑑賞者は隨意に補充して味ふ性質のものであるか

も知れぬ。その邊のことはまだよく予には分つて居ない。第二句から結句までの調べが誠によく作者の心を表はしてゐるやうにおもふ。（附言）『氷しにけり』といへば實景のやうな表し方である。さうすると『水の泡の消えあへぬほどに』は水の泡も一處になつて氷つて流れずにゐるところである。忽ち消え果つべき性質の水の泡の消えないうちの意である。ここが主觀的の句で、一種の心持をおこさせるのである。この歌、題詠であつても、作者の心の中に結象した景情と見ればよいのである。

○

（三五）音羽山やまおろし吹きてあふ坂の關の小河に氷しにけり

單に『山おろし吹きて』といつて『吹きて』から直ぐ『逢坂の關の小河に氷しにけり』といつた處が誠に工合がよい。稚げなよい心持を起させる。如何にも無雜作に詠んでゐながら時々こんな工合のよい歌を詠むから羨しくて爲方が無い。この『山おろし』といふ語は、萬葉に嵐を山下と書いた例がある（衣手に山下の吹て寒き夜を君來まさずて獨りかも寐む）のを誤つて『山おろし』と詠んでそれからこの語が出來たのであるから正當では無いと賀茂翁が云つた樣子であるが、それはそれとして、山おろしといふ語は矢張り特殊の趣ある面白い語であると思ふ。

○

（三六）風寒み夜のふけゆけばいもが島かたみの浦に千どり鳴なり

（三七）月清みさ夜ふけゆけば伊勢島やいちしの浦の（に）千鳥なくなり

こんな工合に型が出來て居る。席上の題詠の歌などはこの位な程度で我慢せ

ずばなるまい。これ位な歌を易々と詠み得るならば先づ先づ作者も嬉しいに相違ない。又眞劍な歌の傍にかういふ一種心の裝飾的な歌があつたとて別に邪魔にもならない訣である。予はこの心を持して矢張り古歌に讀みふけつて居る。

【附記】 かういふ歌を作る場合には、千鳥といふ題が出ると、實地經驗に乏しいところから、古人の作つた歌を通(とほ)して、心のなかに或る景情が具象せられて來る。それを本(もと)として、手法(しゅはふ)までも古人に似せて詠むのであるが、こんな動機から出來る歌でも、出來あがつた歌が相當に面白ければ、絶待に棄つべきものではない。ただ現代の吾々がかかる作歌動機を取つて範としないだけである。

○

(三八)武士の矢なみつくろふてての上に霰たばしる那須のしの原

『矢並つくろふ』は胡籙の矢ならびを正す事だ相である。小手(こて)は腕につける武

具である。この歌は甚だ有名な歌であるが、予は左程秀でた歌とも思はないで居た。それは何となし此歌は題詠的であつて、作者は如何なる場合に詠んだのかも分らないし、那須のしの原と云つて居ながら矢張り空想の歌だと感じて來たからである。第二に、『武士』も一人の武士の樣に感ぜられた爲めに、何となし役者か人形でもあるらしく思つたからである。その後參考書を見たりひとりで考へたりして居た。賀茂眞淵は『軍に立ちて負ふ征矢の亂れを直すとて肩の上にやりたる其小手を霰の打たばしらむさま人麿のよめらむ勢也』と評して居る。軍に立ちては軍勢の心持である。解釋としては無論軍勢と解するのは正當であるが、何となし一人の武士らしく感じたのは予の僻んだ感じであるかも知れない。かういふ場合には詞書と相待つて那須の篠原といふ固有名詞が活きるのであるが、さも無いと眞淵の『信濃なる菅の荒野』と同じ樣に死んだ地名に過ぎ無いものとなる。もつとも那須は賴朝が嘗て獵をした地といふ事であれば、

實朝は那須を實地に見たか或は話などで聞いて比較的親しい土地であつたかも知れぬ。そこで同じく題詠でも同じく空想の歌でも幾分眞實のところがある訣である。この樣にいろいろと補充して味ふとこの歌も相當に佳作であるやうに思ふ。それにしても世間で賞する程には賞しがたい。結句の如きも名詞止めにしたのはこの歌の場合感心しがたい。那須などは詞書に含めて『霰たばしる』で結びたかつたのである。第三句は『ウヘニ』と讀まずに『ヘニ』と讀みたい。なほ此歌に就きては先輩及び友人に聽かざるべからず。

○

(三九)笹の葉に霰さやぎてみ山べの嶺の木がら
しきりて吹きぬ

『しきりて』は『しきりに』ぐらゐの意である。『しきりて吹きぬ』は四三調で當時にあつては珍らしいのである。當時の歌人ならば、『しきりてぞ吹く』ぐら

ゐが氣持よく響くと思つてゐたに相違ない。一首の意は、山のべの笹原には霰が音たてて降る。そして山嶺から吹きおろしてくる風が、その笹原をしきり無く吹き通るといふのである。寒い鋭い歌である。實際は題詠かも知れないが、少しも題詠的臭味がなく、どこまでも自然を見た歌である。この歌には少しも露骨な主觀的句が無い。生悟、思はせぶり、そんなものはない。どこまでも寒く鋭く行つてゐる。この作者が若いに似あはず、内に徹してゐる證據だ。

○

(四〇)さゝの葉のみ山もそよに霰ふり寒き霜夜
をひとりかもねむ

『笹の葉のみ山』は笹の生へて居る山といふ程の意で、この『の』は我國語では多樣の意味を有つてゐる。この場合は動詞を省略したと看做すべき場合である。さうして稍々枕詞に近い句法である。『そよに』は『そよと』と同樣の副詞

であつて、笹の葉などのそよぐ音の事をいふ。この歌、霰が今降つて居るので第一第二句は霰ふるの序か（その場合は作者はみ山に居ないで詠んだと見る）とも見えるが、それよりも山の一夜に獨り寂しく詠んだ樣に解するのはおだやかであらう。無論作者の實際生活を眼中に置かないでこの一首だけに就ての見方である。『ひとりかも寢む』この句は古來から幾多の歌人によつて幾たび繰り返されたか知れない。最初は兎に角誰か一人が歌に用ゐたものと見える（當時普通の口語であつたとしても）處がこの句の比較的簡で且つ心持がよく表はれ、七音であるから和歌の結句などに適當だといふので、誰彼となく知らず識らず模倣したものと見える。從而甚だしく陳腐になつてしまつて居る。予思ふに三十一音の短歌では五音七音位な句になれば既に部分では無い程な重大な役目をもつて居る。二三音の差で非常な差を來す場合もある。そこで、平凡な普通な歌言葉ならば兎に角、或作者が自己の感じを表はす爲めに苦心に苦心を重ねて

新に結合した特殊な句を、第二第三の作者が其句を其儘平氣で用ゐる事は如何かと思ふ。

○

（四）夕さればしほ風さむし波間より見ゆる小島に雪はふりつゝ

ゆふ方になると潮風がことに身に染みて、寒く吹いて來る。窓の向うの冬の海に波が立つてゐる。波間から見える小島（作者と距離は大分あるがさう遙かな島では無い）にはもう雪が白く降つて居るといふのである。印象の鮮かな誠に心持のよい歌である。『波間より見ゆる小島に雪はふりつゝ』といふ印象的な表し方は作者の感覺の敏さ鮮かさを示すものであつて、一讀凡の樣であつて決して凡で無い。子規子の『鏡なすガラス張窓影すきて上野の森に雪つもる見ゆ』や『雪ふるよ障子の穴を見てあれば』なども同じ樣な心持で味ふ事が出來る。次

に、『降りつゝ』は『降りける』などと稍々詞の感じに相異があつて、現在の感じが勝つて居る樣に思ふ。そこで、よく歌學者などが敎ふる樣に結句から第一句第二句と折返して解釋などする必要は毛頭この歌には無い。只平氣で第一句から結句まで順繰りに讀んでゆけばよい。この歌を海濱を散歩でもしながら詠んだと解するよりも矢張り室内で詠んだと解する方が感じに乘る樣である。同じく實朝の作で『みさごゐる磯邊に立てるむろの木の枝もとをゝに雪ぞ積れる』といふのは集中にあつては採れる歌であるが小島の雪の歌に比して一段劣つてゐる。

○

(四二)久かたのあま雲あへりかつらぎや高間の山はみ雪ふるらし

此歌も實地にのぞんで歌つたのではない。そして葛城の高間の山が遠くにでも見えてゐるところかと思ふとそれもぼんやりしてゐる。『あへり』は重り合ふの意で、『あま雲あへり』は灰色の雲が空一面に廣がつてゐる意かとも思ふ。さうすれば高間の山が見えてゐなくも、想ひやつて詠んだやうに解することが出來る。若し『あま雲あへり』を天雲と山嶺が合つた意、卽ち高間の山の嶺が雪雲に蔽はれて見える、そこに雲が固まつてゐるところと解せば、高間の山が現に遠くに見えてゐるところで、歌の全體が極めて自然になつて來るし、景情ともに活躍して來る。作者のつもりも多分さうであらうと思はれる。然しかう解するには『あま雲あへりかつらぎや』と一息に讀下さないと工合が惡い。かう解すると『天雲合へり』といふ句は誠に働いた句である。

○

(四三)まきもくの檜原のあらしさえさえて弓槻が嶽に雪ふりにけり

『まきくも』は卷向で、弓槻が嶽と共に大和にある。卷向の方は近くにあつて、弓槻が嶽は遠くにある趣である。卷向山の檜林を吹いて來る嵐は、寒く鋭く冴え切つて吹いて來る。もう向うの弓槻が嶽の頂には雪が白く降つたといふほどの意である。調べ高き歌であつて、かういふ直線的な一氣呵成の歌は、心が緊張し切つてゐないと出來ない。第三句の『て』は少しく全體をたるませた。『て』は連續句法であるが、矢張り一寸そこで休まるからであらう。

卷向とか高間とか弓槻とか、かういふ固有名詞を入れて歌つてゐる。昔の歌は一々かういふ固有名詞と必然的な關係を有つてゐたのであるが、後世になると其等の歌を通して、だんだん一般化し、『名所』となつてしまつて、意味の徹底しない普通名詞のやうになるのである。そこでかういふ歌を味ふには、一々固有名詞の地理的、歷史的關係を知らないでも濟むのである。

○

(四)まきの戸をあさけの雲の衣手に雪を吹き
まく山おろしの風

『まきの戸』は槇の板戸である。『あさけ』は朝明であるが、ここは戸を開けるに言掛けてゐる。『雲の衣手』は朝來の冬雲の流れる樣と、槇の戸を開ける自分の衣手と兩方に意味を持たせてゐる。一首の意味を大體いへば、山家の槇の戸を曉に開けると、空一めんに雲が亂れ飛び、山おろしが雪を吹き卷いて身邊に迫つてくるといふほどの歌である。なかなか技巧のすぐれた歌である。佳い歌であつて、大きく强いが、一首の色調はどうしても新古今あたりの匂ひがあつて、一種純な可哀らしいところが少い。この歌は實朝に似あはず骨折つてゐる樣におもふ。骨折つたものは何となく讀んで氣持がよい。この歌の言掛けを別に解剖などしなくとも一種の意味が大體として分かるのであるが、作者自身は矢張り言掛けたつもりであらう。

○

(四五)おのづから寂しくもあるか山深み苔のいほりの雪のゆふぐれ

秋の夕ぐれ、雪の夕ぐれ、秋の夜の月などの結句は新古今前後から最も流行した體である。この歌は句法に於て萬葉集の影響があるが、心に於ては當時の、寂しい、ものゝ哀を感ずる、幽玄に通ずる一種の心である。かういふ心は當時の有力な歌人の作を中心として餘程ふかい處まで達してゐる。芭蕉の句に流れてゐる一種の心もこのへんにその淵源を發してゐるのである。實朝はさういふ空氣の中に浸つてゐても、なほ萬葉調を好んだ爲めに、徒らに纖巧に墮し、徒らに涙もろくなるといふ事は少ない。この歌はそのへんの呼吸を證明してゐる。

○

(四六)冬ごもりそれとも見えず三輪の山杉の葉

白く雪の降れれば

『屏風に三輪の山に雪のふれる所』といふ詞書がある。つまり繪を見てそれに題したのである。題したといつても後世の畫賛などと幾分ちがふ樣である。畫賛であれば畫の說明にならない樣に、機智を働かし、氣を配つてなかなか巧みなものである。竹林をかいてその向うに薄墨いろの一軒家があつて、その賛に『筍や橋本の美人ありやなし』といふ蕪村の自畫自賛のやうなのが卽ちそれである。それらに較べると此歌などは餘程愚直に出來てゐる。それでも『冬ごもりそれとも見えず』と云つて心を馳せてゐる。このへんのところが繪と歌との相違點でもある。一首の意は『三輪山の杉の木立に眞白に雪が降つてゐる、冬ごもりしてゐる人の庵もあらうに、それがさだかには見えない』といふのであらう。

○

(四七)かつらぎや山を木高み雪しろしあはれと
ぞおもふ年の暮れぬる

第一句の『や』は歎詞であつて、『山』に連續するの句法で、俳句の切字とちがふ。『山を木高み』の言方も注意してゐる。『雪白し』より直ぐ『あはれとぞおもふ』に續けたところに、休止があつて平凡な直接な聯想の爲方を標準とせば、承知が出來ないやうであるが、そこが予に誠に感じよく響くやうにおもふ。『あはれとぞおもふ』は當時多く用ゐられた句であるが、この歌の場合には適確に働いて響く。歳暮の歌でこれ程の歌を見つけたのは嬉しい。西行法師が陸奥の歳暮に詠んだ歌に『常よりも心ぼそくぞおもほゆる旅の空にて歳の暮れぬる』(山家集)といふのがあり、芭蕉の句に『年くれぬ笠きて草鞋はきながら』といふのがあるが、いづれも、實地にのぞんでの吟であつて、あはれ深くきこえる。

○

(四八)降る雪をいかに哀れとながむらむ心は思ふとも足たたずして

『足にわづらふ事ありて入こもりし人の許に雪ふりし日よみてつかはす』といふ詞書がある。實地にのぞんで歌つてゐるのがよいのである。いかに心が急いても足が思ふやうにならない君は、けふ白妙に降つた雪を見るにつけても一種哀れにおもふであらうといふのである。雪見をすることが出來ないで殘念であらうなどの簡單な心持ではないのを注意せねばならぬ。同じく足の立たなかつた正岡子規先生は此歌を見つけた時、『我足なへとなりてよりここに四年、曾て「足たたば」といふ歌を詠みて自ら慰めなどせしも、はや昔となりぬ。たまたま足なへの古歌の目にとまりたるは……足なへなどを材料にして歌よみ得る者萬葉金槐二集の作者を措いて他にあるべしとも思はれず』と述べてゐる(子規隨筆續篇)なほ宗武の歌に『酒のみて見ればこそあれこのゆふべ雪ふみわけてゆ

きかふ人は』(天降言)といふのがある。

○

(四九)苔ふかき石間をつたふ山水のおとこそたてね年を經にけり

『戀の心をよめる』といふ題がある。かういふ種類の歌、すなはち客觀的光景をかりて作者の心をのべるといふ戀の歌は古來から群をなしてゐる。而して露骨を避ける爲めにかういふ表現法をとつたのだといひ、解釋に際しては寓意などいふ事を稱へ、歌を二通りなどに解してゐる。予思ふに、かういふ種類の歌は、作者が戀心に堪へがたくて居た時、實際かくの如き光景に對して居て詠歎したものから初まつたものであるらしい。從つてその歌通りに解釋すればよい。それで居ておのづから作者の心持を彷彿として味ふ事が出來るのである。實朝時代では、心持を寓する一種の手段として斯ういふ光景を借用して詠んで居る

のであるから致し方がなく、作者もその積りだらうと思ふけれど、予だけはさういふ厭な事はしたくない。從而この歌をも單純に文字通りに解し、かゝる光景の再現とそれに伴ふ作者の心持とを感じて居るのである。一首全體と結句の『けり』との關係。結句の單純に『年を經にけり』といつて居る處言ひがたい味がある。特に『たてね』から直ぐ續けた處がよい。第一第二第三句あたりの音調の自然なる敬服に堪へぬ。この歌でも『大海の』の歌(後出)でもその他の作でも實朝は吾等が現在考へてゐる歌調といふ事に就てすでに實行して居るのを嬉しく思ふ。

○

(五〇)おく山の岩垣沼に木の葉落ちてしづめる心ひと知るらめや

(五一)かくれ沼の下はふ蘆の水ごもりに我ぞ物

思ふ行方知らねば

沼に寄て忍ぶ戀などの題もある歌である。この二つは序歌の例であるが、序歌に對する積極的な自己の考は未だ持つて居ないし、精細に研究した事も無いが、初句に形容詞的に用ゐた場合や、枕詞のやうな使ひ方をしたもの以外は一般に序歌といふものは嫌ひである。掛詞は無論嫌ひであるし、一般から見て枕詞も嫌ひである。大袈裟な譬喩歌も嫌ひである。併し、流行的動機からなつた序歌の技巧はさし措いて、最初の、おのづから序歌となつた場合を想像するならば、矢張り作者が一種の心持に領せられて居り、それが特殊な自然現象に對するに及んで強められ深められ、やがてそれが序歌となつたものゝ樣に思はれる。又眞實の序歌ならばかくあらねばならぬのが自然の約束であらうと思ふ。

第一の歌は『しづめる』で兩方に言ひ掛け、木の葉が水底に沈む現象と、自分の心が沈んで居るのに言掛けたもので、自分の『しづめる心人知るらめや』

と言はむがための序であると解して居り、作者も無論その積りであらうが、予は矢張り一首全體をば自然光景に解し、作者は一種の思ひに堪へがたくて直接この光景に對して詠んだ樣に解し、『しづめる心』も木の葉の沈める心持、沈める趣と樣に解し度いのである。この樣に作者と自然の光景とを密接に關係せしむれば序歌でも左程厭なものでは無い。無理な解釋であらうけれども、少なくも予の作歌態度は是非斯くあり度いと思つて居る。斯くの如く解して實朝の岩垣沼の歌を佳い歌だと思つて居る。岩垣沼は沼の周圍を岩が垣の樣にかき圍みたる意にて面白い言葉である。萬葉歌人の造語である。『人知るらめや』は反語で『知らぬ』の強い語である。一首の微細な妙味は幾度も幾度も吟誦すれば分るから言はぬが、萬葉の語をとり來つて『木の葉落ちて』を奥ごもりの力强く詠んだのは偉い。參照歌『鴨鳥の浮ぶこの池に木の葉落ちて浮べる心わが思はなくに』(萬葉卷四)『津の國の難波の蘆のめもはるに繁きわが戀人知るらめや』(貫之)『青

山の石垣沼の水ごもりに戀ひやわたらむ會ふよしをなみ』（萬葉卷十一）

第二の歌の『みごもりに』の處も言掛けの序歌であるが、前の歌に比して一層序歌らしくなつて居る。何故に戀歌に序歌が多いかに就いては凡そ三通りばかりの原因があるらしい。參照歌、『みさごゐる沖つありそに寄る波の行方も知らずわが戀ふらくは』（萬葉卷十一）『行方なみこもれる池の下思にわれぞ物思ふこのごろのまは』（萬葉卷十二）

○

（三二）須磨の浦に蜑のともせる漁火のほのかに人を見るよしもがな

（三三）物おもはぬ野べの草木の葉にだにも秋のゆふべは露ぞおきける

二つとも戀の歌である。當時の戀歌は一般に製造歌になつてしまつて居た。

この歌も無論題詠であらうけれども眞面目に歌つてゐるだけ稍人を動かす力がある樣である。實朝は眞實から戀歌を詠むやうな境遇に居なかつたのだかも知れ無い。若しあつたとしても相手は平凡な歌などの分らぬ女だとすればつまらぬ訣である。この樣な關係から戀歌は形式歌に墮したのだかも知れない。秀でた女さへ多かつたならば當時の戀歌にもつと眞實の籠つたものがあつたに相違ない。萬葉時代に優れた戀歌の多いのも秀でたる女人が多くあつたからであらう。

【後記】 製造歌であつても、この二つは棄てがたい歌である。古來から戀歌に直截の歌の少ない理を考ふるに、戀歌は多くは相手に示したものとせば、餘り露骨に言へば、すさまじきものになつて仕舞ふ。獨詠の場合でも、あとで讀んで氣持が惡い。あまり直截では物足りない。そこで出來るだけ奥ふかい樣に作つたものと思はれるのが一つ。いろいろの技巧を用ゐるのは自他ともに快感

をおぼえたのであるらしいこと、恰も Liebessung の快感の如きものであるらしいのが二つ。互に識り合つてゐて物言ふのであれば、謎のやうな事を言つても、それが却つて快よく思はれる事があるのが三つ。先づざつとこんな理窟があるのかも知れない。

○

(五四)まつ宵の更けゆくだにもあるものを月さへあやなかたぶきにけり

(五五)今來んとたのめし人は見えなくに秋風さむみ雁は來にけり

待つ人がなかなか來ない程苦しいものはない。戀人を待つて、逢はれなかつた時には癪に觸つて殺してゞもしまひたい樣な事があるに相違ない。さもあるべき事と思ふが、古來からの待戀の歌はいかにも呑氣なものの多いのはどういふわけか。時代が然らしめたのだかも知れない。さうでなくて、寂しく諦めようと觀念するやうな時にはじめて歌心の湧いてくるのかも知れない。萬葉集卷十三の『吾背子は待てど來まさず、天の原ふりさけ見れば、ぬば玉の夜も更けにけり、さ夜ふけて嵐の吹けば、立ち待つに我が衣手に、降る雪は氷りわたりぬ、今更に君來まさめや、さなかづら後も會はんと、慰むる心をもちて、み袖もち床うちはらひ、現には君にはあはず、夢にだに會ふと見えこそ、天の足り夜に』といふやうな、虔しき諦めの心の時に、歌心が湧くのかも知れない。第一の歌の『あやな』は『わけも無く』の意。『たのめし』は麻行下二段活用の動詞で『當てにさせる』とか『頼みに思はせる』意味である。

○

(五六)消えかへりあるかなきかに物ぞ思ふつろふ秋の花の上の霜

菊に寄する戀の歌である。『消えかへり』は消える間際に、消えも果てず漂ふ意から、消え入らんばかりに思ふ意となる。この歌は新古今の『消えかへりあるかなきかの我身かな恨みてかへる道芝の露』から影響を受けてゐる。かういふ歌になると、細々と幽かに奥ふかい心の表はれであつて、一寸解釋などに苦しむのもある。幽玄體の一種である。象徴詩のにほひがあると云つてもよい。技巧の勝つてゐる點も特徴の一つである。

なほ集中には戀歌で佳い作がある。

なでしこの花に置きゐる朝露のたまさかにだに心へだつな
待つ人は來ぬものゆゑに花薄ほに出てれだき戀もするかな
風を待ついまはた同じみやぎ野のもとあらの萩の花の上の露
久方のあま飛ぶ雲の風をいたみ我はしか思ふ妹にし會はねば
かもめゐる荒磯のすさき潮みちてかくろひゆけばまさるわが戀
いそのかみふるのたか橋ふりぬともとつ人には戀やわたらむ
來ぬ人を必ず待つとなけれども曉がたになりやしぬらむ

山しげみ木の下がくれゆく水の音ききしより我や忘るる

○

(五七)玉ぼこの道は遠くもあらなくに旅とし思へばわびしかりけり

旅に對する傳習的な感じが纏はつてゐながら、『道は遠くもあらなくに』とほんたうの處を捕へてゐる。當時はさう遠くないところに旅するにも何となく億劫に思はれたに相違ない。それを餘り誇張しないで率直に言ひ下したところがよいのである。

なほ旅の心を詠んだ歌に、『東路のさやの中山越えていなばいとど都や遠ざかりなむ』といふのがある。これは京都にゐる心で詠んだ歌で、當時京都の歌人どものよく作つた歌に似てゐる。題詠であらうがさういふ事を念頭におかないで讀み味へると、矢張り相當の歌である。

○

(五八)やらの崎月かげ寒しおきつ鳥かもといふ
鳥うき寝すらしも

此歌も題詠であらう。併し將軍家實朝が、やらの崎に行つて詠んだ歌だとしても少しも差支はない歌である。能因流のことをしても分らないほどである。さうなると歌を眼目として味ひ、詞書とか題とかを眼中に置かないでもよい。歌の鑑賞にはさういふ場合も必要であることを知らねばならぬ。この歌には旅泊といふ題がある。『やらの崎』は筑前にある。平淡にして何となしよいところのある歌である。さうして、萬葉集の『沖つとり鴨ちふ舟の歸りこばやらの崎守はやく告げこそ』に大變よく似て居る。この歌の詞から、よい影響をうけてゐる。『おきつ鳥かもといふ鳥』と續けたところも實朝にとつては、必然に響いたのであらう。何となく素樸で可哀らしい句である。

○

(五九)夕月夜さすや川瀬のみなれ棹なれてもうとき波の音かな

『相模川といふ川あり、月さし出でて後、船にのりて渡るとてよめる』といふ詞書がある。『みなれ棹』は『水馴棹』で面白い詞である。最初は誰か一人が言ひ初めた詞であらうが、さういふ人の事をおもふと何だか尊いやうな氣がする。『みなれ棹なれても』と同音を重ねて調子をとつてゐる。『うとき』は親しくないの意である。この歌には何となく戀歌のやうなところがある。馴れても疎いといふ一種の物足なさ、うら寂しさの情緒である。新後撰和歌集（實朝の歿後）の如願法師の作、『都いでて百夜（もゝよ）の波の舵枕なれてもうときものにぞありける』なども、此歌を味ふ參考になるとおもふ。

○

(六〇)箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の
小島に波の寄る見ゆ

これも有名な歌である。續後撰集には『箱根にまうづとて』とある。家集には『箱根の山を打いで見れば浪のよる小島あり供のものに此海の名は知るやと尋ねしかば伊豆の海となん申すと答へ侍りしを聞て』といふ詞書がある。『伊豆の海や沖の』と、ここは連續して息を切らずに讀む方がよい。『小島に波の寄る見ゆ』は、波が磯に寄せて、白く見える光景である。『寄る』といふ運動をあらはす詞は甚だ利いてゐる。さうして白い波といふ色彩が必然に纒はつてゐるのである。『伊豆の海や』と先づ廣く云つて、『沖の小島に』と限局せしめたところなど、おのづからに行つて居る。この歌は矢張り金槐集中の佳作の一つである。萬葉の逢坂の歌と比較して本歌取の樣に論ずるのを常として居るが、決して本歌取では無い。賀茂眞淵は『かくまではいかでよみたまふらむと常にめでらるめり。萬葉の逢坂をわがこえくれば近江の海白ゆふ花に浪たちわたるとあるをもてよみ給ひけむそれよりもまされり』と賞して居る。いづれが優れて居るかは別種の景色であるからさう容易には云はれ無い。

【後記】 左千夫先生は此歌を難じて、第一にこの歌は萬葉の『逢坂を』の歌と趣向が全く同じで、逢坂を箱根に換へ近江の海を伊豆の海に換へたまでである。第二に此歌の詞は萬葉の口眞似に過ぎない。然も下手な口眞似である。第三に『見ゆ』がまづい。『來れば……見ゆ』がまづい。『見えて來た』といふ場合でなければ『見ゆ』は適切でない云々と云はれた。予も『逢坂を』の歌の方が此歌より稍すぐれてゐると思ふが、此歌が逢坂をの歌の口眞似だとは思はない。詞も下手ではない。『見ゆ』も難じ難い。先生の說は少しく言ひ過ぎてゐると思ふ。

○

(六一)春雨はいたくな降りそ旅人の道ゆきごろ

も濡れもこそすれ

(六三)はるさめにうちそぼちつゝ足引の山路ゆ

くらむ山人やたれ

『二所へ詣でし下向に春雨いたく降りしかば』といふ詞書がある。二所は、伊豆權現（伊豆熱海の字、伊豆山にある。一に走湯權現ともいふ）。箱根權現（相摸元箱根村にある）の二所である。この二ヶ所の權現は賴朝が深く信仰し尋いで鎌倉の將軍、執權だちもみな尊崇あつかつたところで、將軍が時々參詣したことが吾妻鏡にのつてゐる。鎌倉から往復の日數大抵は六日間を要したが、極早い時は三日間で往復したとある。第一の歌の『旅人』は稍ひろい意味で自分も入つて居り、そのほか供のもの、一般の旅人も含まつてゐるのであらう。第二の歌は、山人（杣など）の行くところを見て、かう云つたのであらう。萬葉の『足引の山に行きけん山人の心も知らず山人やたれ』といふ歌參考になる。

二つとも平淡で厭味なき歌である。

なほ、『二所詣下向に濱邊の宿のまへに前川といふ川あり、ながら雨ふりて水まさりしかば日暮れて渡り侍りし時よめる』といふ詞書で『濱べなる前の川瀨をゆく水のはやくも今日のくれにけるかな』といふ歌もある。

○

(六四)山遠み雲井に雁の越えていなば我のみひとりねにや鳴きなん

『近うめしつかふ女房遠き國へまからむといとま申し侍りしかば』といふ詞書がある。實際の歌である。『山遠み雲井に』は遠く遠くと言ふほどの意で『遠み』の『み』も『さに』の意と少しくちがふ樣に用ゐてゐる。自分をも矢張り雁に譬へたので、居殘つた雁は孤獨に寂しく鳴いてゐようといふほどの歌である。『鳴きなむ』は『鳴きたい』といふ自分に對する願ひの意味が含まつてゐる。この歌の

心を所謂歌人の感じで誇張したと思ふ人があるかも知れない。併し予はさうは思はない。他にもかういふやさしい心の歌が澤山あるからである。作者にはやさしい小供の樣なうぶな處があつたのである。ことにこの女房は忠實でよく實朝に親んで居たのであらう。それならばなほ氣持がよい。大將軍がこんな初々しい歌を詠んでゐる。どうしても奥ゆかしい。

○

(四)ゆひそめてなれしたぶさの濃紫思はず今にあさかりきとは

『忍びていひわたる人ありき遙なる方へゆかむといひ侍りしかば』といふ詞書(ことばがき)がある。結ひ初めてから馴れて親しい髪の濃紫、云はゞその樣な心持である。長い間忍びつゝ親んだ女がゐる。かたみの心も深いながら、今遠くへ離れてしまふと思へば悲しい心もと無いことであるといふのである。濃紫と淺かりきと

相對照してゐる。やさしい心の歌である。表はし方は譬喩的であるが、詞書と相待ちて一首の心がよく分る。戀の心になると思ひ切つて云ひ惡い點があると見え、若しくは露骨になるなどいふ點から、擬人のやうな譬喩のやうな技巧や序歌のある戀歌が群をなして居る。戀の心はそんな工合に表はさなければ表はれない樣な氣がした點もあらう。つまり廣い意味での象徴的技巧である。萬葉集では人麿が最も多くこの種の歌を詠んだ。後世になると漸々それが手の先きの技巧に墮してしまつて居る。實朝のこの歌は實際の歌である。其點が吾等に深く味はせる點である。實朝の心の一面にはやさしい、はかない處があると嘗ていつたがこの歌もそれを表はして居る。『思はず』と現在にいつたのも力强く響くやうである。

後記。貞享刊行本には、第四句の中の『今に』は『今も』となつてゐる。これは筆寫の誤でなく、兩方に作者が書いたのかも知れない。『今に』の方がよい。

○

(六五)世の中は常にもがもな渚こぐあまの小船の綱手かなしも

『船』といふ題がある。新勅撰集にも小倉百人一首中にもあつて有名な歌である。『常にもがもな』は萬葉集の『常にもがもな常少女にて』(巻一)『我命も常にあらぬか』(巻三)などと同じく、世は無常であるが願はくは常住無變であれと願ふ意である。賀茂眞淵は『かなはぬ事をねがふは極めてふかく思ふ時の情にて古歌には此意を常とす』(初學)と云つてゐる。『綱手』は船をひく繩の事。『かなし』は愛しである。上代は愛しも嬉しも悲しもあはれも、總じて心に染みて感じ動く狀を『かなし』と表はしたのである。『かなしき子』は愛しき子である如きは其一例である。古歌を味ふに際してはこの用意が必要であるが、『かなし』といふ語は以上の樣に種々の意味があるところからして、此語の含む心持は決し

て單調では無い。單に愛らしいとか、悲しいとか面白いとかでは無い。特に現代にあつては主として悲哀の意味に用ゐるのであるが、なほ其の他に時と場合とによつて複雜な感じの色調があると思ふ。その色調を感得するだけの用意と敏感とを欲するのである。實朝のこの歌の場合でも決して單に面白い好景を賞し讃へて詠んだ(從來の解釋)といふのでは無い。一首の奥そこには一種悲哀の心が流れてゐる。從來の歌學者も現代の歌學者も、此邊迄は感じ及ばない程鈍である。それは一首の調べと、『世の中は常にもがもな』を身にしめて味はないからである。『渚こぐ』は海邊近くの海を多くの海人が綱手引きつゝゆくさまをいふのであらう。一首の調べの緊張した、重厚にして、深く世を觀じた感無量の歌である。

類似の句法を有する歌としては萬葉集の『世の中は常なきものと今ぞ知る奈良の都のうつろふ見れば』や古今集の『みちのくのいづくはあれど鹽釜のうら

こぐ船のつなで悲しも』などである

○

(六六)たびをゆく跡の宿守をれをれに私あれや
今朝いまだ來ぬ

『二所下向後、朝にさぶらひども見えざりしかば』といふ詞書がある。この歌予には未だ委しくは分らぬ。機を得て先輩に聞くべし。二所下向は箱根、伊豆山の二所詣である。第三句の『をれをれ』は一本には『おのおのに』とある相である。銘々の義かともおもふ。そこで此歌は實朝が二所下向して歸つて來て見ると留守の侍どもは未だ出勤して居ない處ではなからうか。それにしても大將軍が往つたり來たりするのには供の者も澤山居ようし歸館位は前ぶれがあり相なものである。そこが予の腑に落ちない處であるが、公の行列でない時は實朝は無雜作に出てゐるいたかも知れない。さうして無雜作に歸館したかも知れな

い。かく解すれば歌の心持も分るし甚だ面白い樣に思はれる。『私あれや』とは何ともいへぬ味ある言葉である。この樣に實際の世相に觸れて平氣で詠む歌人は當時にあつては實朝一人である。その他の歌人は當時の習慣が支配した淺薄な歌らしい歌しか詠めなかつたのである。別に小言もいはないで、この樣に圓熟した、いさゝかも斧鑿の痕の見えない技巧で如何にも樂に詠んでゐる。それが未だ三十にもならない將軍であると思へば、世にもあり難き心である。

【後記】 この歌には、『二所下向』などの事は詠み込んでゐない。さうして詞書の方にそれを入れてゐる。そして歌の方には、單に『旅をゆく』と云つてゐる。予等が苦心して研究したやうな事を遠のむかしに平氣で實朝は實行してゐる。平氣でやつてゐて、おのづから行くところに行つてゐる。なほ、貞享刊行本には、『旅を行きし跡のやどもりおれおれに私あれや今朝はまだ來ぬ』とある。この方がよいやうであるが、未だ予には解しかねる。

【再附記】『おれおれに』の解に就いて、佐佐木(信綱)博士の教示をあふいだ。博士云『源氏物語の「おれたる」「おれおれし」「おれまどひ」「おれて」「おれ者」などに同じく、愚の轉語と見る方然るべし。卽ち、おれおれしの轉にて、愚かに、おろそかにして、など解したし。』これにてやうやく解釋がついた。實朝は、宿守の留守を見て一寸不愉快になつたのであらうが、瞋恚ではない。

○

(六七)今つくる三輪のはふりがすぎ社過ぎにし
事はとはずともよし

『すぎ社』は杉をもつて造つた社の事である。『はふり』は祝部のこと。第三句までは『過ぎにし』といはむための序である。この歌は三輪の社を詠んだものである。何だか不得要領の歌で技巧もまづいと思ふが、どことなし棄てがたい樣な氣がしてこゝに採錄した。恐らく三輪の社の新築いはひの時にでも詠んだもの

であらうか、そこで『今つくる』といつたものか、精しい事は分らぬ。なほ、

(六八)葵草かつらにかけてちはやぶる賀茂の祭
をねるは誰が子ぞ

といふ歌もある。平氣で『奈良の都を練るは誰が子ぞ』の技巧をそのまゝ用ゐて居る。一方からいへば泥棒であるが、かう明らさまの泥棒ならば氣持がよい。加茂祭歌といふ題がある。

○

(六九)かみつけの勢多の赤城の神社やまとにい
かで跡をたれけむ

『いかで跡をたれけむ』がこの歌の主眼である。この心持は甚だぼんやりして居る。併し何だか意味がありさうでもある。かういふ句は神祇の歌などには適切である。莊重に響いて且つ厭味に陷らないからである。この樣な句は平凡の

様であるが、言語に對して餘程敏感でなければ出ない句である。『跡を垂れけむ』は垂跡の直譯である。吾等の祖先は巧妙に漢熟語を日本語に直してゐる。無常を『常無し』といひ、夜光璧を『夜ひかる玉』といひ、七賢を『ななの賢き人』といつてゐる。竹の里人は寒暖計を『寒さ計り』といひ廣長舌を『ヒロナガシタ』といつて居る。予は古事記に『八尺入日命』といふのがある處から思ひついて『八尺入日』と詠んでゐる。三井甲之氏も『八尺の入日』と使つて居る。この樣な苦心は馬鹿げて居る樣であるが、この樣にして言語が豐富になるのである。『細りづま』や『をさな妻』の樣な詞は吾等の造語である。著しい詞は纒めて書き留めて置きたい。

○

(七)わたつ海の中に向ひていづる湯のいづのお山とうべもいひけり

(七)伊豆の國山のみなみにいづる湯のはやきは神のしるしなりけり

走湯山(伊豆權現)に參詣の時の歌である。『いづのお山』は伊豆の御山で第三句までは序の樣な表はし方である。『はやき』は神の效驗のはやきと走湯のはやきとに持せたのである。無論大した歌では無く、言ひ掛や序などのある所より、古くさい感じを讀者は持つであらうが、實際に作者の側に立つていろいろ考へると『わたつみの中に向ひて』といひ『山の南にいづる湯』といひたる、決して凡で無い事が分る。雜然としてゐる天然からこれだけの特徴を浮び出だせる手腕はえらいのである。吾人は秀でたる古歌人の作を讀んで暗指を受ける場合が多い。この歌もその一つである。それを感謝せねばならぬ。今では『うべも云ひけり』とか『神のしるしなりけり』などは陳腐として一顧の値もないのであるが、かういふ歌も間々あつてもよい。現代人の吾等でも時には上下を著た

り、汗を流しながらフロックを著たりする事がある。

もつとも、此二つの歌は作者にとつては決して形式的に作つたのではなく、信心深かかつた作者の、敬虔な心から歌はれたものである。日本歌學全書には『いづのを山』となつてゐる。貞享本によつて改めた。

○

荒磯に波のよるを見てよめる

(七三)大海の磯もとゞろに寄する波われて砕けてさけて散るかも

謂ゆる敍景歌は天然顯象が作歌衝動に働掛けるのであるが、天然顯象の空間的開展竝びに時間的流動と、吾人の內的節奏(リズム)が相共鳴し相抱化融合する時、茲に詩は生れんとするのである。換言すれば天然無常が吾等內心のジンボールたる時、茲に詩は生まるゝのである。强烈なる主觀はこの意味に於て力を得來る。

予は實朝のこの歌を讀んで常々斯く思うて止まぬ。從來の修辭學者或は短歌批評家はこの歌を擬聲法の最も巧みな歌、寫生の最も巧みな歌と稱して居る。けれども單にそれだけでは、表面的過程に止まらずして天然無常の本質に突入したこの歌の如きを解明する事が出來ない。達者な腕前、練達した技巧、單にそれだけでどうしてこの樣な歌が作れるものでは無い。直ちに天然を學べといひ、親しめといひ、歸命せよと云ひ、虛心なれと云ふも如上の言に他ならぬのではあるまいか。

かくして始めていはゆる敍景歌に生命あり。かくして始めて天然の本質に接するを得。想化と云ひ純化と云ひ印象的といふも皆この態度であるべき筈である。(論は短歌論なる事を記憶して居て頂き度い)それにも拘らず吾等は天然顯象に對して謂ゆる敍景歌を咏む時、いろいろな邪路に陷り易いのは悲しいと思ふ。(イ)眞の自己の詞でない表面的な流行的句法に左右せらるゝことがある。

『雲居より轟きおつる瀧つ瀬はたゞ白絲の絶えぬなりけり』（榮華物語）この樣な歌は白絲瀧といふ概念に拘束されて、少しも天然に接觸しては居ない。眞に感じない、同化しないからである。（ロ）『胸とゞろく』とか『生けるが如し』とか何か强さうな事を言はなければ力なく詩人でない樣に思ふ輩（ともがら）がある。かゝるともがらはその實、天然と抱化してゐるのでは無く作歌の動因たる天然などは、そつち除けにて上の空で强がつて居るのである。この樣な事は予等は注意せねばならぬ。

かくして嚴肅な表現にうつるのである。實朝は比較的表現法の無雜作な歌人であつた。平氣で（表現法が）作つて居る作が多いが、この作の如きは骨折つて表はして居る。それはおのづから然るのだからよい。この歌は自然顯象が內包的に單純にさながらに表現され、それと同化し高潮に達した作者內心の運動が、彷彿として表はれてゐる點に於て偉大な力を有して居るのである。

一首の調が初句から起つて段々强烈になつてゆき、終に『かも』で止めて居る。一首を通ずる事勿論であるが、この『かも』に於て作者內心の運動が表はれ終るのである。この場合如何なる言語を以てもこの『かも』に代用する事が出來ない。それが必然にして緊密であるからである。今の進步した歌壇に於ても、『かも』は死語なり用ゐるべからずなどいふ淺薄概見に住する者がありと稱されて居る。一本に第三句の『寄する波』は『寄る波の』となつて居る。いづれも善いが、『とどろに』から連續するのであるから、『寄する波』の方が自然である。『寄る波の』と言へば『とどろに』との聯關が不緊密になり、調子が弱く、弛緩する。『よする波』といへば第三句にて切れるから惡いといふ論者があるが、實は第三句で切れないで連續句なので、『の』又は『が』『は』が省略されて居る我國の一つの語法である。斯る論者は連續と、切れるといふ事をよく研究して居ないのだ。『われ』よりも『くだけ』は强く『さけ』はなほ强い。これは全く音の配列によるので、

日本語を有效に適所に用ゐるといふのは斯る事をいふのであるが、此處は技巧の力といふよりも深い同化力に待たなければならぬ。『て』といふ助辭が三つ續いて『かも』で止めたあたり予は常に感歎して止まぬ處である。

正岡先生はこの歌を評して實朝獨自の句法で萬葉にもないといふ樣な意味の事を云はれた（子規隨筆續篇）と覺ゆるが、例によつて萬葉にはこの歌と類似の句を有する歌がある。例へば、

伊勢の海の磯もとどろに寄する波かしこき人に戀ひ渡るかも

聞きしより物を思へばわが胸はわれて摧けて鋭心もなし

大海のいそもとゆすり立つ波のよらむ（むよせ）と思へる濱のさやけく

の如きである。當時も流行した本歌取の陋習に幾分墮して居る氣味があると云へば云はれるが、當時只一人ぽつりと萬葉振りの歌を詠んで居るのであるから、彼の性情がおのづから萬葉の歌人と相契合して類似の歌を生んだのだと解すの

は正當であらう。

この歌初句が阿行麻行奈行の音から始まり、左行多行良行の音が加はり、結句に近づくに從つて加行多行左行の音が多くなつて居る。天然顯象と我生命と相融合すといふ事は無論個人によつて場合が違ふ、又同一人でも時と場合によつて差がある。だから天然顯象に單純な意味を附して、『かういふ感じしか無い』など極めてしまふのは不用意である。

○

（七三）玉くしげ箱根のみうみけゝれあれやふた國かけて中にたゆたふ

『又の年二所へ參りたりし時箱根の水海を見てよみ侍る歌』とある。『みうみ』は水海（みづうみ）の略だといふ說と『み』は添語だといふ說とあるが、いづれでもよい。一本には『うみは』とある相である。『けゝれ』は『心』の事、あづま言葉である。こ

の歌にある意味を散文にでもしたなら甚だつまらないものである。それにも拘らず此歌は太古の神樣でも云はれた樣な響ある歌である。宗武の『二つなき富士の高ねのあやしかも甲斐にありとふ駿河にもありとふ』といふ富士山の歌はこの歌から暗指を得たものであらうが、眞に感じたのでないだけこの歌に比して一段下等である。かういふ歌は現代の予等には到底よめなくなつて居る。たゞ簡樸高古で、莊嚴の氣の漲つてゐるこの歌調のなかに心を浸したとて、別に不名譽ではあるまい。ただし靑ざめた近代人などの近よるのを許さないものであるかも知れない。『中にたゆたふ』といふ結句はすばらしいものである。貞享刊行本には『何かたゆたふ』となつてゐるが、予は取らない。

○

濱へ出たりしに海士の藻鹽火を見て

(七四)いつもかく寂しきものか蘆の屋にたきす

さびたる蜑の藻しほ火

『藻しほ火』は藻鹽をとる爲めに焚く火の事であらうと思ふ。藻鹽といふは海藻に幾度も汐水をそゝぎかけそれを煮て得たる鹽の事であると字書に見えてゐる。『たきすさびたる』の『すさぶ』は、荒涼たる趣で、ここでは、捨つ、荒るなどの意が籠つてゐる。『心ある海士の藻汐木たきすてて』『たきすさむ煙やのこる』『たきすさむ我が下もえの煙こそ』などの『すさむ』『すて』と共通の意であらう。かすかに一所などで見ゆる藻鹽火でなく諸所で焚く火が夜暗に赤く、然かも物すさまじく、そして寂しく見ゆる光景であらうと思はれる。春の夜の山火事でも、都會の夜の火事でも遠くから眺めると美しいが矢張り一種のさびしい心が湧くものである事を經驗する場合が多い。實朝の時代の一般の歌人などの見方感じ方に一種の流が漂うてゐた。それが寂しい感じであつたかとも思はれる歌が多い。この歌にはその流行の感じ方の臭氣が少しも無い。『いつもかく寂

しきものか』が兎も角も讀者に同感をおのづからせしめる程の強い力を有つてゐる。第一句から『いつもかく』と云つてゐるが、詞書と相まつてよく作者の心持を解する事の出來るのは興味ある事である。例によつて決して上の空で居ないからである。

○

(七五)あづさ弓磯邊に立てるひとつ松あなつれづれげ友なしにして

『物まうでし侍りし時磯のほとりに松一本有しを見てよめる』といふ詞書がある。この歌の心持を單に輕く興じた樣に解するのは足り無い樣に思はれる。西行の歌に『　松はひとりにならむとすらむ』といふのがあるが、これも單純な卽興では無い。當時にあつてはかういふ心持は新らしみのあるものであつたかも知れぬが、さればと云つて現代の吾等の胸にしつくり來るとも云ひ難い。

たゞし天然に對して深く思ひ入る時、かういふ心持になる事は現時の吾等にもあり得る事であり、その心持を表現する時一種の滿足を感ずる稚い心にもなり得るのである。從つてこの歌が出來た當時の作者の氣分なり境遇なりを味ふ事は、この歌を鑑賞するに就いて決して障礙となるものではない。初句の『あづさ弓』は枕詞で、『射る』の『い』に掛けるところから『磯』の『い』に掛けたのである。『あづさ弓いそべの小松たが代にか萬代かけて種子を蒔きけん』(古今集、讀人不知)など參考になる。

○

(七六)くれなゐの千入のまふり山の端に日の入るときの空にぞありける

『千入』は幾度も幾度も染めることである。『いろ深き袖のなみだにならふらし千入八千入そむるもみぢば』などの歌が參考になる。『まふり』は眞振で、袖な

どを振る樣に用ゐる詞であらう。『くれなゐのやしほのをかの岩つつじこや山姫のまふりでのそで』などが參考になる。ここでは、雲の形容に用ゐたらしい。

落日の光景を歌つたのであるが、太陽そのものを歌はないで、入日空の光景を歌つてゐる。さうして主として赤い夕燒雲を歌つてゐる。歌ふのに『くれなゐの千入のまふり』と云つて歌つてゐる。あまり突飛でなくて、形容としては適切であるやうに思はれる。それに『くれなゐの千入のまふり』といふ句は實に洗練された句である。一首が浮つ調子にならない所以である。それから雲を『千入のまふり』と形容するに、『如くに』などを用ゐずに『にぞありける』と言ひ切つてゐる。

○

慈悲の心を

(七)ものいはぬ四方のけだものすらだにもあ

はれなるかなや親の子をおもふ

この歌の想（便利のために假にかく約束する）はやゝともすると、現代の吾等には平凡陳腐と感じられがちである。それは特殊な內的動搖に際しての外、吾等は獸がその子を愛するのを見てゐるとき、唯ほんのりと快感を覺ゆるのみで、決してかうした心持にはなれなくなつてゐる。それにも拘らず歌でも作らうとする場合には、何か大袈裟な事を言はなければ力がない樣な氣がして、如何にも深く感じた樣に表はさうとする爲めに、益々表面的な力のないものとなつてしまふのである。實際この樣な想を內容とする作物が古來から折々あると思ふが、さういふ關係から、眞實の氣の乏しいのが多いやうである。そこでこの歌の想のやうなものまでがどうかすると我等に平凡陳腐と感じられるやうになつたのである。ところが意外にも實朝のこの歌は讀者の胸を飽くまで動搖させずには置かぬ程力强いものである。動搖止むなき悲痛に生きた當時の作者が、

かゝる境に對した時、すでに堪へがたくなつて、瞑目しながら『ものいはぬよものけだもの』と詠歎したのであらうと思はれる。つぶつた彼の兩眼よりは涙がはふり落ちたであらうと思はれる。この歌が慈悲の心をなどと題を置き、『もの言はぬ四方(よも)の獸』などと一般的な事を言つて居ながら、作者が少しも浮き離れて居ないのは、全く作者の眞實心から出た歌であるからである。吾等は此處を嚙みしめて味はねばならぬ。歌を味ふ際に些々たる字句を云々する前に、如何にして作者はその歌を作らうとするに至りたるかを先づ味はねばならぬと思ふ。予は、短歌は決して作者と離すべきものではない、從て歌を味ふ際は同時に作歌當時の作者をも併せ味ふべきものだと思つて居る。讀人不知の場合であつても同樣である。なほ書くならば、

2 3 } 5　3 4 } 7　2 3 } 5　3 5 } 8　3 5 } 8

かくの如き音の連續。初句第三句の三音の柔かくゆつたりとして居ること。

第二句の四音第三句と漸々堅く強くなつて行つた工合、第三句の末音が『も』であつて、一時心が其處で堪へがたくなつて容易くは發聲も出來難き姿であること。つゞく八音の悲痛であつて全作者がこの八音となり化した如き、結句の八音に於てなげき極まりしづまり行いた趣、味うても無駄では無い。すでに明白であるべき短歌の概論をば上(うは)の空で喋々し、これ等の歌をも味ふ能力なき香川景樹は『鎌倉の右府の歌は志氣ある人決して見るべきものにあらず』などと言つて得々として死んで行つた。余は彼をあはれむ。さうして、吾等は思はざるべからず。吾等は一首たりとも虚僞にして歌は作りうるものでない。一本には第四句『あはれなるかな』とある。

【後記】『予は短歌は決して作者と離すべきものではない』云々と斷わつてゐるのは、今日になつて見れば當然すぎる程當然な事のやうであるが、書いた當時にあつては、決して當然と思はれてゐなかつた周圍の歌壇の狀態を暗指してゐ

ると思ふ。

○

(七八)いとほしや見るに涙もとゞまらず親もなき子の母を尋ぬる

『道のほとりに幼き童の母を尋ねていたく泣を其あたりの人に尋ねしかば父母なん身まかりにしと答へ侍りしを聞てよめる』とある。『いとほし』は可愛ゆし、氣の毒なりと註にあるが、此言葉にも從屬的ないろいろの色合がある。『見るに涙もとゞまらず』は、見ると一人の童がしきりに泣いて居るといふ事であらう。作者が可哀想になつて泣くのではあるまい。(後記。文法上からいふと、『見るに吾れさへ涙もとゞまらず』で、作者の涙のとゞまらない事になる。實はこの方の解釋が正しいやうである。) 予はその樣に解して『見るに』などいふ一寸した句でも作者の面目躍如たるのを感ずるものである。この歌にて注意すべきは助

辭の連續の工合が甚だ自然である事、結句の動詞は連體言であるが少しも耳障りがしない事である。『ものいはぬよものけだもの』の歌の處でも一寸いつて置いたが、かういふやさしい感じは實朝の一面であつたに相違無い。この感じは歌人としての急拵へのものでは無いに相違無い。第一句の『いとほしや』の『や』は歎詞である。そこで一寸休むのであるが、その休止が極めて小さいことを知らねばならない。また、箱根路の歌の『伊豆の海や』の『や』は萬葉などで第一句の終りに用ゐてあるのと同樣の用法で一寸切れるのであるが、俳句や新詩社の同人などの用法とは違ふ。切れるにしてもその休止が甚だ小で、殆ど連續の句法である。『の』に通ふ程のものである。上代の例のかゝる句法は、殆ど地名に限られてゐたかの觀がある。

○

(七九)とにかくに有れば有りける世にしあれば

無しとてもなき世をも經るかも

『わび人の世に立めぐるを見てよめる』といふ詞書がある。『わび人』はこゝでは、世棄て人、幽居の人といふ意味でなく、貧困で苦しみ漂浪してゐる人の事をいふのではあるまいか。兎に角に有ると思へば有の世界である。これまでの過去の事も有とおもへば有であつた。無と觀ずれば無の世界である。さう觀じてこの世界に生きて立ちめぐつてゐるのか。こんな氣持で漂浪の人に同情して詠んだ歌であらう。同時に作者の世相觀をあらはして居る。さうして其のわび人の境を羨んだのであるかも知れない。戰亂の世に生れて小さい時からしぢゆう無常迅速の實際を見來り、佛敎に歸依してそのことわりを知つてゐる作者にとつては此等の歌は皆その本心の聲であつたのである。一本に第二句が『われは有ける』とある。なほかういふ種類の作數首を錄して作者の本心を伺ひたいとおもふ。

世の中は鏡にうつるかげにあれやあるにもあらずなきにもあらず
現とも夢とも知らぬ世にしあれば有りとて有りと賴むべき身か
聞きてしも驚くべきにあられどもはかなき夢の世にこそありけれ
世の中にかしこき事もはかなきも思ひしとけば夢にぞありける
とにかくにあなさだめなの世の中や喜ぶ者あれば佗ぶる者あり

概念的な表はし方であるが、よく味ふと、みな折にふれて染々と感じて作つた歌であることが分る。實朝の一生を知るうへに於ても見のがしてはならぬ歌である。

○

(八〇)塔をくみ堂をつくるも人なげき懺悔にまさる功德やはある
(八一)ほのぼのと虛空にみてる阿鼻地獄ゆくへもなしといふもはかなし

第一の歌には懺悔といふ題がある。かういふ歌になると、やゝともすると心の滲み徹つてゐない乾ききつた歌に聞えがちである。この歌では、『人なげき』の句に注意しなければならぬ。この句で全體が流動してくるやうな氣がする。字音で讀ませるところが四つもあつてそれでゐて乾き切らない點も注意してよいと思つてゐる。第二の歌の初句一本には、『炎のみ』とある。阿鼻地獄は八大地獄の一つで、猛炎のうちに無間の苦惱をうけるところである。『ゆくへもなし』といふ句はそこから來てゐる。思罪業歌といふ題がある。經典の直譯から脱して、これだけに活々してゐる歌はなかなか作れないとおもふ。

○

(六二)歎きわび世をそむくべき方知らず吉野の奥も住み憂しといへり

(六三)いづくにて世をば盡さむ菅原や伏見の里も荒れぬといふものを

第一の歌は、この世の果敢なきを歎き、遁世してしづかに命をはぐくみたいと思ふが、もう吉野の奥も塵だつてゐるといふことである。世を遁るべきところがないといふのである。無論題詠であらうけれども、時として染々とかういふ氣持になつたのだかも知れない。第二の歌は、我が餘生を何處で送らうか、伏見の里ももう荒れたといふ事である、といふのである。二つとも歸趣安住に苦しむ心の切なさを表はしてゐる。なぜ伏見の里と云つたかといふに、これは、『いざこゝに我が世は經なむ菅原や伏見の里の荒れまくも惜し』(古今集、讀人不知)や『戀しきを慰めかねて菅原や伏見に來てもねられざりけり』(拾遺集、重之)などに見えるやうに、しづかな氣持よいところとして、名所の一つになつてゐたのである。實朝はその名所の傳習的な心持に從つたのである。

○

(八四)鶴のゐる長良のはまの濱かぜに萬代かけて波ぞ寄すなる

(八五)玉だれの小瓶にさせる梅の花萬代ふべきかざしなりけり

第一の歌には『祝の心』といふ題がある。慶賀の歌などになると、謹んでさしさはりの無いやうに、大きくゆつたりと嚴かに詠むのであるが、どうしても流動性の乏しいものになりがちである。この歌などはその上乘なものであらうか。調べがいかにも音樂的に出來てゐる。『ながらのはまのはまかぜに』には開口音が多く、大きく心が開いてくるのである。『波ぞ寄すなる』と結んだのも常凡な慶賀歌とちがふ點である。第二の歌には『梅の花をかめにさせるを見てよめる』といふ詞書がある。平淡な作であるが、何となく氣持のよい品のある作である。玉だれを『こがめ』の枕詞の格に使つてゐる。『玉だれの小簾』と使ふの

が常例だから、『をがめ』と訓むのがよいのであるが、それが變化して『こがめ』と言つてゐたものと見える。萬葉卷五の『梅の花今さかりなりおもふどち挿にしてな今さかりなり』の歌參考となる。なほ實朝はいろいろ祝賀の歌を詠んでゐる。

ひめ島の小松がくれにゐる鶴の千とせふれども年おいずけり
なよ竹のななのももそぢ老いぬれど八十の千節は色もかはらず
なよ竹のちぢのさ枝のはは枝のそのふしぶしに代々はこもれり

○

(八六)いにしへを忍ぶとなしに石の上ふりにし里に我は來にけり

故郷の心を詠める歌である。特別に懷古の情にふけらうといふつもりではないが、おのづから我は故郷の地に來た。故郷の地に來てみると、いろいろと忍ばれる事が多いといふこころが含まつてゐる。あまり小癪なことを言はないで

調子で心持をあらはしてゐる。『石の上』といふ枕詞も、おのづからにひびく、第三句にある枕詞の例で、『わが背子はいづく行くらん沖津藻の名張の山を』と云つたやうに有效な枕詞の例である。矢張り實朝の作で、後拾遺集所載の歌に、『いにしへを忍ぶとなしに古郷のゆふべの雨に匂ふたちばな』といふのがある。第一第二句が同じだから參考になる。此の參考歌は、非情の橘が雨のなかに咲きにほうてゐる。故郷を忍ぶつもりではあるまいが、それを見るといろいろと故郷のことが忍ばれるといふ意味の歌であらうとおもはれる。

○

(八七)おのづから我を尋ぬる人もあらば野中の松よみきと語るな

(八八)かち人の渡ればゆるぐかつしかの眞間の繼橋くちやしぬらむ

二つとも繪に題したのである。第一の歌には『屏風の繪に野中に松三本おひたる所を衣かつげる女一人とほりたる(り)』といふ詞書がある。繪の說明をしないで作者の心持を出してゐる。衣かづいて通る一人の女が三本生へてゐる松に物言ふ趣である。ゆくりなくこゝに來て私のことを尋ねる人があつても私を見たといつてはいけないといふのである。『みき』は『見き』と『三木』と兩方にかけてゐる。この三木を見きにかけるのは當時流行したと見えて西行の歌にもある。『おのづから』といふ語は當時の歌人も多く使つてゐる。實朝は其等の歌人から影響を受けたのであらうが、他の歌人よりも適切に使つて居る。第二の歌には『かち人の橋わたる所』といふ題がある。『朽ちやしぬらむ』とは現代の吾等でも一寸いひ得ない微細な心持である。竹の里人の感じ方に流れてゐる一種の特殊性は、恐らくかういふ句から悟入したのではなからうか。『かち人』は徒步する人の意で、こゝは『道行く人』といふほどの意である。

○

建暦元年七月洪水漫天土民愁嘆せむことを思ひて一人奉向本尊聊致祈念

(八九)時によりすぐれば民のなげきなり八大龍王雨やめたまへ

『時により』は『時によつては』の意である。『すぐれば』は『過ぐれば』である。『民』は詞書にある如く土民(どみん)の意であらう。或は自分をも含めて『民』と云つたのかも知れない。『たみ』は『民安かれと』の如く天皇が吾等民衆を呼び給ふ時、『みたみわれいける驗(しるし)あり』の如く吾等自ら稱する時などが普通であるが、自ら將軍であつた當時の實朝が庶衆を『民』といつたのかとも思ふ。『八大龍王』は『はちだいりゆうわう』と字音に讀む。風雨に關する天象を支配する龍王であらう。佛敎の語であつて、難陀、跋難陀、婆加羅陀以下八大の龍王を指すのである。

八大といふは八大菩薩(文殊、觀世音、藥王等)の八大と同樣の言ひ方である。『七少女』『八少女』『八十宵』『八百重』などの日本語と手心(てごころ)が似て居る。龍王が風雨に關係ある事は吾妻鏡十に『文治六年五月十五日戊辰甚雨大風雷鳴終日不休止大倉山震動樹木多顚倒岩石頽落其跡俄爲細流是龍降云々』などあることや、源平盛衰記文覺淸水狀天神金事の條に『四大海水の八大龍王』や、『八大龍王とて法華經の同間衆有八龍王』などあるにて分る。(龍に關する我國の古事古事類苑動物部參照)この歌は大山(相摸國中郡、近世の雨降山(あめふりやま))の阿夫利(あふり)神社に祈念したのである。阿夫利神社に就ては神祇志料に今大山の坂本(大山町の舊名)に八大龍王社あり之を地主神といふ卽ち阿夫利の舊社ならむと論じて居る(大日本地名辭書參照)。

實朝は佛敎の深い信仰者である。同情深い、やさしい人である。眞摯な人である。鎌倉幕府の征夷大將軍である。賴朝と政子の子である。この歌はまことに如上の實朝の生んだ歌である。實朝は當時たゞひとり萬葉ぶりの歌を詠んだ。

而して平氣で古句を踏襲した。然かも佳作に至つては古今を獨歩してゐる。さうしてこの歌ほど眞摯深甚の氣の籠つてゐる力ある歌は金槐集にも餘計はない。この歌の第一句から第三句までは如何にも不器用に訥々として居る。

彼はこの歌を作るに際して一心を籠めたのは言ふまでもない。祈念をこめて吟詠するなるが故に訥々不器用となるのは自然である。さうして訥々の中に深甚の響きのあるのも自然である。巧妙ではないが莊重にして大きい響きあるのはこれが爲めである。この事は大切な事で最負目のためとか態々佳い歌にせむ爲のこじつけなどいふ淺薄なものではない事を注意せねばならぬ。

この歌は三句切の歌であるが、第三句の『なり』の處は作者のやさしい憐みの深い處があらはれて居る、作者が眞に感じて作るから斯ういふ微細な處まで作者が現はれるのである。こんな事いへば牽强の說と云ふかも知れぬが、『四方の獸ずらだにも』『海はあせなむ世なりとも』などを併せ味ひ得たならば、牽强の

言でない事が分ると思ふと同時に、『爭はれぬものだ』との深い感に打たれるであらう。同時に謂ゆる技巧歌が滿天下を風靡して居た際に歌壇の隱れたる一隅に於て伊藤左千夫氏が『歌は人格である』と唱へたのを尊く思はねばならぬ。

第四句結句に就て正岡子規氏は『八大龍王と八字の漢語を用ゐたる雨止め給へと四三の調を用ゐたる處皆この歌の勢を强めたる所に候』（子規隨筆續篇參照）と云つて居る。八大龍王の如き言葉は當時にあつてはどうして思ひ切つて用ゐたかと思はれる程であつて（萬葉でも、又新古今時代にも漢語を用ゐた歌は可なりあるが）傳敎大師の『阿耨多羅三藐三菩提のほとけ達わがたつ杣に冥加あらせ給へ』（新古今和歌集釋敎の部）と双絕と唱すべきである。四三調の結句は强き調子を表はし得る（茂吉述。短歌に於ける四三調の結句。アラヽギ第一卷二號參照）のであつて、井上通泰氏の如く、結句は必ず三四なるべしなどいふ如き淺見に住すべきではない。『たまへ』といふ結句は小町の『天の戸川の樋口あけ給へ』から皆この類であるが、最も適切な言葉であるから

であらう。

吾等は一生を通じてこの樣に一心を籠める事がおぼつかないのを悲しく思ふによつて益々この歌をあり難く思はねばならぬ。近代人にかういふ歌の詠めないのはほんたうである。只かういふ歌を單に古典歌として取扱ふほどの鈍感な鑑賞家ならば、それは實は最も甚だしい古典的な人なのである。

【參照】『民』といふ字のある歌の例を少し書いておく。『月にうつ民の衣も宿毎に國さかえたる御代ぞきこゆる』(定家)『世を救ふ心のうちのなほざりに民の愁へをなすぞ悲しき』(伏見院)『今も猶民のかまどの煙までまもりやすらむ我國のため』(後宇多院)『身にかへて思ふとだにも知らせばや民の心の治め難さを』(後醍醐院)『あらを田に任する水もゆたかなる民の心は濁らずもがな』(惟繼)『遲くとき民の早苗に貢物たえぬ日つぎのほどぞ知らるゝ』『高き屋に登りて見れば煙たつ民のかまどは賑ひにけり』『よそにのみ思ひぞやりし思ひきや民のかまど

を斯て見むとは』(後醍醐院)その他、『民のかまど』『民安かれと』『民のわら屋』『民の草葉』『民のけむり』等あるがうるさければ省く。

○

(九)大君の勅をかしこみ父母に心はわくとも
人にいはめやも

『太上天皇御書下影時歌』といふ詞書がある。三首連作中のはじめの歌である。太上天皇は後鳥羽上皇を申し奉る。上皇と實朝との關係に就いては歷史家のみならず普く人の知るところである。參考書も多いのであるから今更贅言しない。一首の意は、大君の御詞を謹んで身に體し、縱ひ父母の心に反くとも、決して人に他言はしない。といふのである。

此歌の本當の解釋はまだ予には出來なかつた。それは『わく』が分からなかつたからである。明治四十五年の解釋には『わくともは、別くともで、そむく程

の意味であらう』と云つて置いたが、なほ考へて見ると『縦ひ父母の心に知れるとも』と解してもいゝ樣に思はれて來た。それは『分く』を現今口語の『分かる』と同じ樣に使つた古歌があつたからである。例へば、『何事もわかぬ心にさしもなど身の憂きばかり思知りけむ』（續後拾遺、安嘉門院四條）（何事も分別の付かない心に）『めぐり逢ひて見しやそれともわかぬまに雲がくれにし夜半の月影』（新古今、紫式部）『いづことも春の光はわかなくにまだ三吉野の山は雪ふる』（後撰、躬恒）『夢や夢うつゝや夢とわかぬかないかなる世にか覺めんとすらん』（新古今、赤染衞門）などである。かういふ歌を見て予の心が迷つたのである。そこで佐佐木（信綱）博士の敎をあふいだ。そして博士から、『こころわくともは、心をば分けるともの意にて、この場合そむくと同意に落ちつく』といふ解答を得た。予の心が定まつて此歌の解釋が出來るやうになつたのである。

なほ考へてみるに、『わく』は『分く』で、加行四段活用の動詞である。原意は

『分離する』意であつて、それが分離し區別して黑白（こくびやく）を定めるといふ事から、『分明になる』といふ意に轉じたものらしい。現代口語の『分かる』は卽ちそれである。『白露と秋の萩とは戀ひみだれ分くることかたきわが心かも』（萬葉卷十）『冬夏と分くこともなく白妙に雪はふりおき』（萬葉卷十七長歌）（區別するの意）『春秋におもひみだれてわきかねつ時につけつゝうつる心は』（拾遺、貫之）『いつはとも心に時は分かなくに遠の柳のはるになるいろ』（風雅、伏見院）『花の色を見ても知らなむ初霜の心分きてはおかじとぞおもふ』（此歌は、大和物語所載のもので、おなじ枝を分きて霜おく秋なれば光もつらくおもほゆるかな日光の加減で霜の淺き深きあつて公平でないといふ意）といふ歌の返歌であつて、心分きては心を區別して分離しての意である）などの歌を見ると參考になる。實朝の歌の場合は、分離の意に解すべきこと佐佐木博士の言のとほりである。

一首の措辭が何となく粗（あら）く、どこか下手なところがあるやうであるが、眞率

の氣の漲つた、緊張しきつた歌である。『勅』などもこの場合少しも輕薄に響かない。結句が特に力ある。讀者の心に迫つてくるこの力は、作者の心の猾くない純と謙遜と本氣とに因るのである。

○

(九)ひむがしの國に我をれば朝日さす波姑射の山のかげとなりにき

前の歌の續きである。『ひむがしの國』は自分が關東にゐるからさういつたのである。『波姑射の山』は仙洞すなはち院御所のことであつて、こゝでは後鳥羽上皇を申奉るのである。一首の意をつゞめて云へば、『つゝしみて勅を奉ず』といふことになるのであるが、かういふ言方をしたのである。『山』と云つたから『かげとなりにき』と云ひ、『朝日さす』と云つたのは日光に光つて居るさかんな莊嚴の相を示したのであつて、『東の國に我居れば』を主に眼中に置いて辻褄が

合はないなどと評するのは惡い。

此歌のいゝのは、句々をたどつて分かる意味よりも、太く強く一氣に押していつた調べにあるのである。作者が此歌を作るに際しては意味の點、言振の點に於て相當に骨折つて居ることが分かる。併しさういふ事に對する興味よりも、其れを統一し了せた意志の力が、一首の調べとなつて表はれてゐるのに感動するのである。

○

(十)山は裂け海はあせなむ世なりとも君に二心われあらめやも

『あせなむ』は乾涸せむの意である。『あせなむ世なりとも』のところで、ゆらゆらと調が搖いで急進しないのは、感涙の滲み出でんとする刹那に似た、深い心の相を暗指してゐる。それを此處で調子が弛んだなどと評するのは恐らくは

淺はかな形式論者であらうと思はれる。一たんそこでよどんだ運動が、『君に二心われあらめやも』とひた押しに押し行いて居る。此歌は天皇に對する我國民思想の權化だといつて賞められてゐる。予も確かにさう思ふが、此歌は特殊の場合で、『君』にも定冠詞がつくのであるから力があるのである。これが宣長の『敷島の大和心を』などの概念歌とちがふ點であつて、或る特殊の場合に、せまり極まつた作者の内性命から迸り出た歌である事を忘れてはならぬ。

明治四十五年に予は以上の三首を評した時、『莊嚴渾厚なる風調が當時動亂の背景を得て、讀む者の紅血をして逆流せしむる程の勢を有つてゐる。短歌のやうな小文藝中にこれだけの作のあるのは予の喜ぶところである』と言つた。少しく賞め過ぎたかとも思ふが、なほ考へて見ると新古今流の歌の教育を受けて來た實朝が其れを打破り、月雪花乃至幽玄の型から目醒め出でてかういふ實地に觸れての作を自由に放奔に爲し遂げ、それが未だ二十八歳の青年であつたか

と思ふと、單にそれだけでも賞め過ぎては居ない氣がするのである。

○

これで金槐集私鈔は完結したのである。はじめはいろいろ參考書も檢べ、もつと批評も精細にし、少しは氣の利いたものにする積りであつたのであるが、急に思ふ事があつて無理に完結せしめたのである。顧ると如何にも蕪雜な見すぼらしいものになつて仕舞つた。なほ集中にあつて採るべき作を見免したのもあらうし、誤つた事を云つたのも多いだらうと思ふ。金槐集の評釋書はまだ一冊も出來てゐない。先蹤が折に觸れて金槐集を論じたけれども、一首一首に就てのは數首に止まり、他は全般の批評である。この點に於て予の私鈔は稍纒まつたものだと信ずる。古歌を鈔するのは難業の一つである。特に金槐集には解釋上の參照書が乏しいから特に困難であつた。予は前後六回ほど通讀し、その度毎に紅鉛筆で標點をつけ其中から選んだのである。選ぶに就ては全然自分獨

りの考で選んだのである。明治四十四年五月から始め、一時中止し、明治四十五年七月二十八日午後三時に終る。天皇御惱の號外の音に心ふるひつゝこの稿を終る。

○

金槐集の歌數は日本歌學全書收のものには、六百四十五首。貞享刊行本には七百十九首ある。假りに十四歳から歌を詠んだとして二十八歳の正月に死んだのだからその間を十四年と見做せば平均一年に五十首ばかりになるが、金槐集の歌は二十歳の時から詠んだとしても一年ざつと九十首である。決して多作では無い。併し定家式の歌を詠んだのは論じない方が便利である。萬葉集を初めて見たのは二十二歳の十一月だから、それから勉强するのに二年かゝると假定して、ほんたうに萬葉の歌を理解し始めてから死ぬまで僅か三年である、歌人としての實朝がほんの初途で死んで仕舞つたといふ事はこれを見ても分る。眞

淵が金槐集の歌に書込んだ文句のうちに、『此公、古へを好みたまへども猶さることまでは、えおぼし分き給はざりし。されどこれらはまた、はじめのほどの歌ゆゑか。よりてこゝの歌どもは皆後の垢に染みたり』とあるなど、一面の眞を傳へてゐる。常凡の予の經驗を語るのは失敬だが予は二十三四歳で初めて萬葉を讀みはじめ三年間位は萬葉の詞を模倣する事さへ出來なかつた。一個の歌人として特に過去の歌人として論ずるから爲方も無いのであるが、實朝を淺薄な模倣歌人や、獨創なき歌人と評し去るのを聞くと何となく殘念な樣な氣がしてならない。もつとも現代には二十八歳位で歌の大家が幾らもゐる。併し周圍が違ふし時代が違ふし十年餘りも歌に苦勞して來たものばかりである。決して同日の論が出來ない。西行は七十三歳まで生き歌數千七百餘首、定家は八十歳迄生きて歌數三千五六百首、一生懸命で死ぬまで詠歌を止めなかつた。それでも今予が鈔するとしたなら、各二百首ぐらゐに止まると思ふ。予は金槐集の七

百十九首から主歌として九十二首、從屬歌として五十四首ばかりを拔いた。正岡子規氏は大に實朝を賞したが拔ける歌は二三十首位なものだと云つて居る。それから見れば予の採錄した歌數は大分多い。特別に佳作でないものも交つてゐるからである。併し一人の家集から歌を鈔する場合などには、これ位の標準にした方がほんたうにその人の特徴を伺ふ事が出來ると思ふ。古人の家集には思ひ切つてつまらない作迄を皆載せて居るが、これは大によい事である。後世の人はそれを勝手に取捨して鑑賞することが出來る訣である。

源實朝雜記

○

金槐集中で予の好きな歌は大概『私鈔』中に鈔錄した。その際一首一首の終に簡單に予の考を述べたから、歌人としての實朝に對する予の考は大凡『私鈔』中に盡きてゐると思ふ。この『雜記』は予の覺え帳に過ぎない。從つて人に示すべきものでは無いが『私鈔』が完結した序に一二の人に見せようと思うて公にするのである。

○

實朝は賴朝と政子の子である事は確である。賴朝は建久九年馬から落ち疾をえて、翌正治元年五十三歳で死んだ。實朝は建久三年八月九日に生れた（東鑑

に天晴風靜早旦以後御臺所御產氣……巳尅男子御產也なりとある）のだから頼朝四十六歳、政子三十六歳の時にお腹に宿つたのである。頼朝はあのやうな男であり政子はあのやうな女である（頼朝を知る參考書は、吾妻鏡以下の予のまだ讀まない古文書、專門史家の書いた日本歴史、日本時代史のいろいろのもののほかに、山路愛山や幸田露伴の頼朝傳など、政子論では、三浦博士が婦人世界で論じたもの、其他、中央公論で山路愛山が論じたもの、人生と表現で松本金鷄城が論じたものなど參考になる。くはしい事は、その道の先達に聽かなければ分からない。）而して頼朝の事業も七分迄は思ふ通りに行つた頃である。（愛山の頼朝傳）細胞合體のあつたのは陰暦十月であるから、霜が白く身のしまる頃である。生れたのは八月であるから白露天より落ちて蟲しげきころである。これは事實で理窟ではない。

○

鎌倉幕府は關東武士の手になつたものだから文學などは何にも分らない樣に一寸思ふが實際はなかなかさうでは無かつたらしい。名僧や學者を招いで講義もしてもらつたらうし、書物なども京都からとり寄せたらしい。熱心な歌よみが多かつた時代だけに武士にも歌などに手をつけるものがぽつぽつあつた。新古今集に頼朝の作が載つてゐる。頼朝は詩人たるべき素質が確にあつたと思ふ。實朝は歌が非常に好きで樂んで歌を勉强した事は境遇よりも先天の素質が重きをなして居ると解したい。

○

藤原定家は、歌に關しては骨の折れる爲事をして居る。歌人としてもそれ相應の歌人であつて、わが同人が考へてゐる程つまらぬ歌人では無い、歌人としての實朝を見るには、是非定家を見のがしてはならぬ。歌人としての實朝を育て上げた功は少なくも沒する訣にはいかぬ。實朝は建仁三年征夷大將軍に補せ

られ、同年元服して名を實朝と改めた。（幼名千幡）（東鑑に幕下大將軍二男若君爲關東長者七日被下從五位下位記竝征夷大將軍宣旨とある）その時定家は四十二歳であつた。元久二年實朝十四歳で初めて歌を詠む。（東鑑に將軍家令詠十二首和歌給とある）その年新古今和歌集が出來た。そして一部實朝の處へ（藤兵衞朝親が）持つて來た。東鑑にその時の事を記して『而將軍家令好和語給之上故右大將軍御詠被撰入之由就聞食頻雖有御覽之志云々』とあるなどは面白い。このあたりからよく歌を詠んで居る。東鑑に有和歌御會とか將軍家御詠吟及兩三反などあるにて分る。

○

承元三年實朝十八歳の時の七月五日の條（東鑑）に『內藤右馬允知親爲御使以此次去建永元年御初學後御歌撰三十首爲合點被遣定家朝臣也』とある。これが定家に歌を見て貰つた初めである。知親はかねてより定家の門人であつたのである。

同年八月十三日の條に『知親自京都歸參所被遣于京極中將定家朝臣之御歌加合點返進又獻詠歌口傳一卷是六義風體事內々依被尋仰也』とある。この詠歌口傳といふのは近代秀歌一名定家卿和歌式又一名承元和歌式であつて、實朝はこれによつて勉强したのである。『詞は古きを慕ひ心は新らしきを求め及ばぬまでも高き姿を願ひて寬平以往の歌にならはゞおのづからよろしきこともなどか侍らざらむ』といつてゐる處を實朝は後になつて善用したのである。善用といふ意味は、定家の『古きを慕ひ』とは古今集ぐらゐの程度のものであつたらしい。定家が貫之を評して『心たくみに丈及びがたく詞强く姿おもしろき』などと云つてゐるので分る。實朝の『古きを慕ふ』のは、そんなところは一躍に飛び越して、萬葉の眞の力に突入したのである。善用とはそれをいふのである。後來定家の言として傳へらるゝ『和歌無師匠只以舊歌爲師染心於古風習詞於先達者誰人不詠之哉』の心をよく應用したのである。そこが實朝の鑑賞家としても作

者としても偉大な點である。けれども萬葉を見ない前は定家流の綺麗な歌ばかり詠んで居た。模倣の時代である。それでも巧みな技巧の棄てがたい歌が含んで居る。

○

建保元年實朝二十二歳の時に定家が萬葉集一部を送つた。東鑑に『京極從三位獻相傳私本萬葉集一部於將軍家』とあるのはそれだ。その時定家は五十二歳である。實朝は承久元年二十八歳で死んだ。その時定家は五十八歳である。定家は八十歳まで生きた。實朝が萬葉を讀み初めてから死ぬまで滿五年ぐらゐであらう。さうしてあの樣な秀歌をのこして居る。歌が好きで非常な勉强家であつた事が分る。實朝は自分勝手に萬葉調の歌を詠む樣になつたのであるが、それも以上述べた樣に定家の功の存する事を見のがしてはならぬ。實朝が萬葉集を讀み萬葉歌人に私淑するに至つたのは先天の偉い處であるか、自分の師で先

輩である定家が實朝を賞めたのは實朝が秀歌を詠むに至つた一つの好刺戟と云はねばならぬ。定家は勉强家で勢力强く負けぎらひで歌の相手などは自分の歌風に合はないとびしびしとやつつけたものと見える。功名心强く嫉妬心の强い男であつたらしい。(佐佐木博士述。藤原定家參看)若し實朝が普通の門人でもあつて萬葉調の歌など詠んだら矢張り攻擊したに相違ない。然るに定家は實朝を賞めて『鎌倉右府はたけたる歌人と覺え侍る。古人の詠作に竝べたりとも すべて劣るべからず。實にたぐひ無事とぞ思ひ侍る』などといつてゐる處は彼の歌風から考へてどうしても幾分阿諛の分子がある。それは當時の人もさう思つて居たらしい。それは越部禪尼(俊成の女)が新勅撰を評したる消息に『新勅撰はかくれごと候はず候。中納言入道殿(定家)ならぬ人のして候はゞとりて見たくだにさふらはざりしものにて候。さばかりめでたく候御所たち(後鳥羽土御門順德)の一人もいらせおはしまさず云々』とあるにても分る。併し後代の

吾等の眼から見れば偶然に見える定家の賞め詞も有り難き賞めことばであつたのである。これは予のほんの私見である事をことわつて置く。

○

彼が萬葉調の歌を詠むに至つたのは、先天的に優れた素質があつたために萬葉の歌の心を理解し得たからである。京都は鎌倉より遠く、京都の文物が鎌倉にどしどし入らない爲めや、武士の政權に歸した當時の民族心理の關係だなどと說くのは幼稚な說である。鎌倉が僻遠の地だといつても交通は可なり開けて居た。特に實朝の妻は京都から來て居る。而して當時の代表歌集新古今集は萬葉集よりも早く讀んで居る。特に父の作物も載つて居る。普通の人ならばどう考へても萬葉よりも親しいに相違ない。特にそれが彼の最初の師である定家も撰んだのであつて見れば尙更のことである。

○

實朝の歌にはその句(部分的句)に古歌と類似のものが多い。その事は『私鈔』のうちに述べて置いたが、この事あるがゆゑに實朝は獨創のある歌人でないとは少しく違ふやうである。當時にあつては類句のある歌などは當り前である。試みに國歌大觀を見るならば萬葉以來その類句の多いのに驚くであらう。明治大正現代の歌壇に於ても類句だらけだ。けれども類句のある事は作者の側からいへば餘り自慢にはならぬが、金槐集の歌は詠んだ歌の殆ど盡くを載せたものらしいのであるから、批評する場合には取捨するだけの同情がなければならぬ。さうではあるまいか。

○

實朝は古語を踏襲する事は平氣でやつて居た。くよくよしない。そこが明治の正岡子規に似て居る。子規子は一方古語をその儘用ゐるのを泥棒と迄いつてゐながら、『萬葉を模する』『萬葉調の歌を詠む』と平氣で大きな聲でいつて居

た。當時の鐵幹子が小生の詩とか明治の歌だとか萬葉以來唯一の詩風だとかいつてゐたのとはよい對照であつた。實朝の歌にはその平氣さが表はれて居る。大まかで、定家あたりと比較すれば無器用であつて、餘り骨も折つてゐない。言葉も當時の俗語やら萬葉時代の言葉やら佛語漢語など思ふ通りに詠んで居る。

【附記】私鈔中にも證明してあるやうに實朝の歌の句のなかには萬葉集の歌からのみでなく、古今、拾遺、新古今あたりの歌から句を取つて歌つてゐるのがある。平氣でさういふ事をしたのはどういふ訣であるかを少し考へてみるのに、社會的に第一流の歌人で、また自らもかく任じてゐる者ならば、當時にあつても、さういふ事は努めて嚴しく、且つ神經過敏であつたに相違ない。模倣を難じ、『主ある詞』などの語を作つて戒しめてゐるのでも分かる。然るに實朝は自らは專門歌人などを以て任じてゐなかつた爲めに、そこまでは考へてゐなかつたのかも知れない。そこ迄の野心がなかつたとも取れるし、藝術に對する良心が未だ徹底してゐなかつたとも取れる。謂ゆる第一流の歌人などをのぞけば大凡そんな事には平氣な世の中であつたかも知れない。それゆゑに此點で實朝に獨創がないとは言はれない。獨創云々の問題は別なところにある。

○

金槐集の特徴のうち、一つ書いて置くことがある。それは一題數首の歌。題詠でない實際に觸れて詠んだ、吾等のいはゆる連作的の歌のある事である。

ある人の都の方へのぼり侍りしに、つけてよみて遣はす。

夜を寒み獨り寢覺の床さえて我衣手に露ぞおきける
かかる折もありけるものを手枕のひまもる風を何いとひけん
都べに夢にもゆかん使あらばうつの山風吹もつたへよ
都よりふきこむ風の君ならば忘るなとだに云はましものを
うつたへに思ふばかりはいはねども使につけてたづぬばかりぞ

岩ねふみいくへの峰を越えぬとも思ひも出でむこころへだつな

これ等の歌は、調子に新古今ばりの所があつて細やかに心持を傳へてゐて、なほ底力のあることも注意すべき點である。

相州の土屋といふ所に年九十にあまれるくち法師あり。おのづから來り昔語などせしついでに身の立居にたへずなん成ぬる事をなくなく申して出ぬ時に老といふ事を人々におほせてつかふうまつらせし序によみ侍りし

我いくそ見し世の事を思ひいでつ明る程なき夜のねざめに

思ひ出でて夜はすがらにねをぞなく有し昔のよゝのふるごと

中々に老は呆れても忘れなでなどか昔をいと忍ぶらん

道遠し腰は二重にかゞまれり杖にすがりてそこまでもくる

さりともと思ふ物から日をへてはしだひ〳〵に弱る悲しさ

この歌で注意すべきは詞書のある事。心の連續を五首にして詠んでゐる事である。而して俗語が多い事である。一題數首の歌は萬葉集中の數首やら西行と寂然の問答やらちよいちよい當時の歌集に見當る。それを歌學者が獨りも注意しなかつたのは腑甲斐ないことであつた。

○

藤原定家が實朝を賞揚したのに不純の分子が含んでゐるといつたが、それは聊か過言であるらしい。定家は新勅撰集に實朝の歌二十五首を採錄して居る。新勅撰集は文暦元年に勅を奉じて撰んだもので、定家はその時七十三歳であつた。實朝歿後十五年を經過して居る。翌年(七十四歳)小倉百人一首を書いた。その中に實朝の『世の中は常にもがもな』の歌を採つてゐる。新勅撰集の撰び方に就ては越部の禪師から攻擊を受けたけれども定家は左程の邪念があつて撰んだのではあるまい。新勅撰を撰ぶのに滿五年を費したと假定するも實朝死後十年を經て居る。縱し定家の撰んだ實朝の歌が吾等の標準と甚だしく相異する

事があつても、兎に角定家は實朝の歌を邪念なき心から賞めて居たと見るのが正當ではあるまいか。それならば歌人としての實朝の發達に定家の言が或程度の奬勵になつた事は否むべからざる事實であらうと思ふ。實朝は勝手に顧慮なくおのれの道を歩まうとしたのは云ふ迄も無いがそれを阻害もしないで奬勵したことは後代の吾等の感謝するところである。

○

定家の言は措き、言を極めて實朝を賞揚したのは賀茂眞淵である。（新學、初學、歌意考、金槐集附言、書翰）それでも初期の歌は賞めないで『くだれる世の垢づけるあり』（金槐集附言）とか『その始なるはいふに足らず』（新學）などと言つてゐる。後代の予等は眞淵の言を聞くと何となく嬉しい樣な氣がする。眞淵は餘り萬葉が好きな爲めに時に人から冷かされてゐる。冷かさないものは難詈してゐる。それがやがて彼の徹底したる萬葉尊重者であることを證してゐる。彼はその極

むしろ癡の境にまで行つてゐる。彼は實朝を賞め、同じく實朝を賞めた定家の言に贊同したのはよいが、『定家卿の記されつるものに、鎌倉の右府はたけたる歌よみとこそおぼゆれ。この歌を見る時は、歌は物うくなりぬとぞわなる。後の世々に狹き箱の中に有りて女歌よめる人は、天地の大籠の内にある男業を見てはうみぬべきことなり。さればこの卿こそさは記されたれ。然はあれどよはひ七十路に餘れれば、思へど得こそ自から改むるに日のなかりけめ』などと云つてゐる。幾ら定家が實朝をほめても、自ら『大海の磯もとどろに』などと、萬葉ぶりの歌を詠まうとはしなかつたに相違ない。賞めこそしたが、かの高慢な定家の眼には實朝などは、まだほんの初學者として映じてゐたであらう。賀茂眞淵はおもしろいことを言ふ人である。

明治になつてから、正岡子規は實朝の偉大なることを力を籠めて說いた。（子規隨筆續篇）さうして香川景樹の、『鎌倉の右府の歌は志氣ある人決して見るべきもの

にあらず……右府の如く盡く古調を踏襲ひ古言を割裂たらんには云々』（新學異見）の言に對して、『自己の歌が盡く古今以下を踏襲剽竊した事を棚へあげて、却て創意おほき實朝の歌を傷けんとは憎さも憎さ振舞かな。泥棒が人に對して泥棒よばりするさへ片腹痛きに、況して高潔清淨なる實朝の如きを泥棒に落さんとす。盗人たけだけしとは景樹が事なり』とさへ云つて居る。和歌革新の鋭鋒が機を得て景樹に向かつたのである。景樹の言はすでに不純な動機から出發してゐた。それに彼は當然たるべき歌論の總論をことごとしく云つてゐるだけで、一首一首の本質に至つては、視る目がなかつたのである。實朝の晩年の作の分からなかつたのは彼としては無理もないことである。

○

『彼はまた歌人として當代第一流なり』（佐佐木氏）といふ論斷を讀むと予は嬉しくなつてくる。當代に於ける熱心なる短歌作者たる定家をはじめ、後鳥羽、土御門、

順德の三上皇、良經、通具、有家、家隆、具親、雅經、隆信、秀能、慈圓、式子内親王、丹後、宮内卿、俊成女、越前らの歌に對する研究が未だ積んでゐない予にとつては、佐佐木博士の言を信ずるより途は無い。

○

『彼には秀歌をと覗つて詠んだやうな跡が無い。この一首に他の云ひ得ぬやうな深い趣を云はう、巧みな法を見せやうとするような當て氣は全く見えない。……彼には所謂匠氣なるものが無かつたと云へる』（窪田空穗氏）

この評言を讀んで、いかにも至當だと思ふ。この境は藝術家にとつての究竟點であつて、まさしく實朝の天品を示してゐる。ただ態度の純眞を以て、内心の無煩悶と混同してはならない。（後說）實朝の晩年の作は表はし方に於てなかなか骨折つてゐる。斧鑿の痕はさう目だたないが、いゝ加減で濟ますのとはちがふ。無匠氣といゝ加減で濟ます事とは兩立しない。窪田氏の論にはこの二つを混合

してゐる嫌ひが無いでもない。

○

『彼は獨創の多い歌人とは云ひ難い。我が多くの歌人のやうに、歴史といふ一つの型のなかに囚へられそれによつて歌つて居る。歌の爲めの歌、彼れ自らの爲めの歌では無い。さう思はれるものが全體の大部分を占めて居る。』『彼は生れながら歌人の素質を持つてゐたが、大いなる歌人としては餘りにも弱く脆かつた。我執の念が少なく、諦めが早く附き過ぎた。特色ある歌人とは云ひ得るが、大きな所のある歌人、大きくなるべき歌人とは思はれぬ所がある。』（窪田空穗氏）

この評言を讀むと予の意見と違ふ事が分かる。予の意見は『私鈔』で盡さてゐるが、ここでも少しく書く。なる程實朝の歌には、他人の作から影響を受けたのが多い。然し金槐集の特徴を論ずるには、手習時代の歌を除去する用意が必要である。さうすると晩年の歌が殘る（晩年と云つても二十五歳から二十七歳

一ぱいに過ぎない）晩年彼は一躍して萬葉の歌に肉迫してゐる。さうして存分に萬葉の影響も受けてゐる。そこがもう獨創の點を指示してゐる。いつの世でも流俗は偉大なる藝術の前には盲目である。觸れたやうな事を言つてはゐるが矢張り目が開いてゐないのである。ただ眞の意味の後繼者、模倣者の群が橋梁となつてだんだん目が開いてくる。それはずつと後の事である。かかる橋梁を待たずに直ちに萬葉に迫つた實朝を獨創者と云はずして何と云はう。當時にあつての實朝の實行は復古でなくつて創造の觀がある。偉大なる所以である。

『歴史といふ一の型』といふ。寧ろ輕蔑の心である。けれども何事と雖も由緣とほき發育史を有つてゐないものは無い。短歌の體もさうである。この意味で實朝の歌は歴史を有つてゐる。ただ當時の歌壇を眼下に睥睨せんとしてゐるのは、流行を追ふ凡俗とちがふ點である。實朝の歌は『彼れ自らの爲めの歌ではない』といふ。ところが彼の晩年の出來のいゝ歌は、句々盡く彼れ自らの爲めの歌で

ある。（私鈔を見よ）窪田氏の説は淺い。

『實朝は特色ある歌人とは云ひ得るが、大きな所のある歌人、大きくなるべき歌人とは思はれぬ所がある』といふ。これも違ふ。實朝は歌人として未だほんの初途で死んで仕舞つたと前言したが、それでも晩年には飽くまで發育し得べき證據を示して居る。その初途の曙光が實朝の生の連續に想到する我等の性命に働掛けて來る。我等が大正の時代になほ萬葉ぶりの歌を作り唱導する、決して偶然ではないのである。予の見によれば實朝は、特色のある歌人と謂はんよりも寧ろ大なる歌人、大なる歌人となるべき初途にあつたものである。大とは偉大を意味してゐる。

○

『彼の歌は、他人に對する感傷、自然に對する寫生、この二つに限られてゐて、殆ど自らを歌つた歌といふものが無い。……彼の歌の殆ど全部が外部から彼を

動かしたものに對して彼の感懷を衝動的に歌つたものばかりであつて、彼の內部からおのづから湧いて迸るやうに歌つた作の無いといふのは、たまたま彼が自らに對する要求自らに對して持たずには居られない問題といふべきものを、さまで際やかには持つて居なかつたのでは無いかと思はれる。』『彼には問題が無く疑惑がなく隨つて多くの煩悶も無かつた。それで何時も單純な安らかな明るい心持を保つて居られた。この心持がやがて歌人としての彼に、その眼の前に自らに開けて來る物に對し柔い神經を以て傷み、美しさを受け納れて其れを再現させるといふだけ——單純な優しい落ちついて品のいゝ歌を作らせて、それ以上には進まなかつたのであらうと思はれる』（窪田空穗氏）

かういふ評語に逢著する。この論者は既成の歌の材料（あるひは對象）の外邊のみを見て、既成の歌の本質を洞察し得ない形式論者である。歌の對象の山水にあるか、自己の行動にあるかに因つて、價値の高下を附するの間違であるの

は、『足引の山がはの瀬の鳴るなべにゆづきが嶽に雲たちわたる』(人麿)の歌の對象の山水にあるのゆゑを以て、『憶良らは今はまからむ子泣くらむその子の母も我れを待たむぞ』(憶良)の歌の對象の自己の動作にあるものより劣るといふ論の非なるを見ても分かるのである。また、實朝の『箱根路を』『大海の磯もとどろに』『世の中は常にもがもな』などの歌を自然に對する寫生であるといひ、それゆゑに自己に對する問題、煩悶が無く、歌が外部性で、內部迸發の歌でないなどといひ、それが寧ろ是等の歌の價値をして寧ろ小なりと斷ずる結論に達してゐる。予の意見は全然ちがふ。自然を歌ふのは性命を自然に投射するのである。Naturbeseelung である。自然を寫生(窪田氏等の用ゐる意味とちがふ)するのは、卽ち自己の生を寫すのである。『大海の磯もとどろに』の歌にいかに悲痛なる意力の響があるかを味ひ得ずして、實朝の歌を云々するのは不用意である。また、此の究竟點に於て內外等の差別を附するのは一切無用である。

實朝の晩年は、悲憤觀相と、諦念信順と、能働意力との三つ巴の動亂の生である。それが晩年の折に觸れての作に表はれてゐる。表はす技巧の平氣さを見て直ちに無煩悶、無問題、無疑惑などと斷ずるのは淺い。又、『ものいはぬよものけだもの』の歌等を、無煩悶な單純な優しい歌といひ、『この一枝を哀といはむ』『あらし立つみむ』『おのづから涼しくもあるか』などを單に品のいゝ歌に過ぎないといふならば、これらも予の意見とちがふところである。

一體窪田氏の『自らを歌ふ』といふのは自らの行爲、暮向を報ずる事であるかも知れん。或は主觀を露はに報ぜよといふ事であるかも知れん。併し必ずしも然かせずして所謂正體抒情詩であり得る事は前言した。さうでなく、『歌は自己の表現である』などいふ事であるかも知れん。しかし天然を詠じてもなほ鮮かに自己が表はれ得るのである。實朝の『大海の』の歌を見れば分かる。大體、作歌の際に、『自己を表現する』などいふ題目を、意識にはつきりと上せて作歌

するのは、もう不純の境である。實朝は決してそんな事はしなかつたやうである。そこが或人の目には無問題に映ずる點でもある。

○

實朝の歌は家集『金槐集』のほかに、新千載、續後撰、新勅撰、續拾遺、玉葉、風雅、新續古今、續古今、新後撰、新後拾遺、續後拾遺などの撰集のなかにえらばれてゐる。『金槐集』といふ命名のおこりは、佐佐木博士の、『槐は周禮秋官朝志の條に、面三槐三公位焉とあるによりしにて、中山大臣忠親の日記を山槐記と名づけしたぐひ。金は鎌倉の金偏をとりしにて、偏傍を省くは、扶桑集といふべきを、夫木集と名づけしと同例なり』（鎌倉右大臣家集緒言）といふ言によつて明らかである。

○

【增補】○賀茂眞淵全集を讀むと、『龍のきみへ問答』（龍のきみへは龍のきみえ卽ち公美のことであること佐佐木博士が考證して居る）のなかに、藤原定家の撰歌ぶりを評した一文があるから書いて置かうと思ふ。『新勅選に後鳥羽帝の歌をいれられざるは定家鎌倉におもねりての事とおもはるいかが』といふ公美の問に對して、眞淵は、『おもねりしなり、越部禪尼が書し物にさしもよくよみ給ひし土御門院の大御歌などをも入られずして爲家の歌をいとおほく入しは定家の撰ならずは取ても見るべからぬ物と樣に書しなり。此撰はそのへつらひのみかは、歌にも甚あやまり多きものなり。すがたも屈しきはまりたるは、王威かま倉へうつりて京家困窮の時ゆゑに、おのづから京人の心窮し邪意のみに成て、いよいよ古き此御國の學をもせねば、只さる時の心にてよめらん歌、さる心にて撰みなん事いかでよき樣の有べき』と答へてゐる。○實朝といふ名は天子から給はつた名ださうである。愚管抄に、『千萬御前、元服せさせて、實朝といふ名も京より給はりて、建仁三年十二月八日、やがて將軍宣下申くだして云々』とある事を、宣長の玉勝間によつて知つた。

（東鑑には建仁三年九月七日、將軍宣下。十月八日元服とある）○子規先生が實朝の生の連續を考へて、『あの人をして今十年も活かして置いたらどんなに名歌を澤山殘したかも知れ不申候』と云つて居る。かういふ言は何の役にも立たないものか、或は極めて有意義のものかを考へたいと思ふ。かういふ言は論者自身の子規先生にとつて極めて有意義であるのみでなく、矢張り實朝の研究にも大切であると思ふ。賀茂眞淵の晩年の作歌の一部は火事で失せたさうである。そして千蔭春海だち門人の蒐輯した眞淵の歌集には秀歌が極めて少ない。この場合に、眞淵は實際あれぐらゐな歌しか作れなかつたと論斷するのは淺薄である。予はこのごろ大分考へた末に此の結論に達した。○『東の國に我をれば朝日さす波姑射の山のかげとなりにき』を解釋する參考歌として、『寄邊なみ身をこそ遠く隱てつれ心は君が影となりにき。』（古今、戀歌、讀人不知）といふ歌を見つけた。古今集の此歌を先蹤は解して、『心は常住御前の側を離れはせぬ、影の樣に、とうから心はお前に添て居る』（遠鏡）『心は

君が身をはなれねば君にそふ影となりにけりとなり』（打聽）と云つてゐる。○實朝の戀歌の『かもめゐる荒磯のすさき潮みちて隱ろひ行けばまさる我戀』と似た歌で、『奥つ島荒磯の玉藻潮みちてい隱ろひなば思ほえむかも』（萬葉卷六、山部赤人）といふのがある。○『來ぬ人を必ず待つとなけれども曉がたになりやしぬらむ』の參考歌として、『桐の葉も踏分け難くなりにけり必ず人を待つとなけれど』（新古今、式子内親王）と、『わが背子がありかも知らで寢たる夜は曉がたの枕さびしも』（拾遺、讀人不知）との二つを書いておく。それから古今集の『夏の夜はまだ宵ながらあけぬるを……』の歌の詞書に『月の面白かりける夜あかつきがたによめる』とある。實朝の歌のなかの『曉方』が面白いと云つて、古泉千樫君が此等の參考歌をさがして呉れたのである。實朝は前人の作から好い影響を受けて惡い影響を受けてゐる事が少い。どうも偉いところがあると思ふ。

主なる參考文獻

(一)正岡子規。……『歌よみに與ふる書』『歌話』(子規隨筆續篇)
(二)伊藤左千夫。……『實朝の歌一首』(國歌第二十六號)
(三)佐佐木信綱。……『金槐集の後に』(歌學論叢)
(四)佐佐木信綱。……『源實朝年譜』(歌學論叢)
(五)佐佐木信綱。……『藤原定家及その時代』(日本歌學史)
(六)佐佐木信綱。……『藤原定家及年譜』(定家歌集)
(七)三井甲之。……『鎌倉時代の道德宗教藝術の表現』(人生と表現五ノ一)
(八)松本彥次郎。……『鎌倉時代思想動亂と新宗教』(人生と表現五ノ一)
(九)窪田空穗。……『金槐集の印象』(文章世界)
(十)山內素行。……『日本短歌史年表』(日本短歌史)
(十一)賀茂眞淵。……『新學。初學。金槐集附言。歌意考』(加茂眞淵全集)
(十二)香川景樹。……『新學異見』(日本歌學全書。和歌叢書)
(十三)佐佐木信綱。……『眞淵と公美』『眞淵と宣長』(和歌史の研究)

良寛和歌集私鈔

良寛和歌集私鈔

○

(二)この宮のみ阪に見れば藤なみの花のさかりになりにけるかも

『この宮』といふのは良寛が今立つてゐる所の社(やしろ)をいふのである。題なり詞書(ことばがき)なりに、『この』に相當する固有名詞が必要なところであるが、良寛は其を平氣で書かずにゐる。もつとも自ら歌集でも編輯したならば必ず其固有名詞を書いたらうとも思はれる。『この』といふ語のある歌にはなほ、

この宮の宮のみ阪にいで立てば白雪(しらゆき)ふりけりいつかしが上に(西蒲原郡渡部の社にて)

この宮の森の木下に子ども等と遊ぶ春日は暮れずともよし（和亭の畫の讃）

この岡の秋萩すすき手折りもて三世の佛にたてまつらばや（國上山おとみや）

などがある。以上の三つの例歌の中で、第一の場合と第三の場合はちやんと固有名詞が詞書のなかに書いてある。第二の場合に畫に讃したのであるから矢張り一定の場處を指示してゐる。面倒な固有名詞を歌のなかに詠み込まないで、『この』などの代名詞を使ひ、固有名詞は詞書の方に書くといふ事は、作歌に一苦勞した者でなければ出來ない事である。良寛の歌は一般に平氣な歌であるが、締まる處がきちんと締まつてゐるから偉い。

この歌は誠に平順な歌である。そして『花のさかりになりにけるかも』といふあたりは、大まかで力があり、何となく尊い氣のする歌である。句法が非常に單純であるから何でも無い樣に思ふが、かういふ句法を他人の模倣でなしに自らの苦惱裏から作り出さうとするには大抵の事では出來ない。昔から禪僧な

どは多くは奇態な生活を遂げてゐる。良寛も先づ先づさうである。然し大抵の禪僧のかいた書畫や作つた詩歌などを見ると、衒奇ぷんぷんたるものが多い。良寛の歌になると全然その境が違つてゐる。厭味が殆ど全然無いばかりでなく、氣韻漂渺たるものが多い。これは主として勉强の結果であると予は解釋してゐる。萬葉の歌の呼吸に觸れ一意修練を重ねた結果である。良寛自身は、歌人の歌、書家の書は厭であると言つてゐたといふ話であるが、其歌人書家といふのは中途半端な歌人書家を意味するのであらうから、良寛の言もさう力のあるものでは無い。良寛は歌の素人を以て處たやうであるが、その本質に於て最早素人の域を脱してゐる。素人黑人などは外的に區別されるべきものでは無い。それから良寛の歌は野呂間な樣でゐてなかなか敏なところがある。それは修練の結果である。野呂間と妙境とは程度が違ふ。良寛の歌は素人くさいから佳いのでなくて、妙境に入つてゐるから佳いのである。（大正三年四月二十六日）

○

(三)うき雲の身にしありせば郭公しば啼くこゑをいづこに待たむ

この歌は稍法師くさき歌である。つまり稍悟つた樣な歌である。然かも些少も故意らしい處、豫じめ結果を期して作つた樣な處が無いから偉い。これが西行法師あたりになると、まだまだひねつて歌ふのである。『いづこに待たむ』などは甚だ妙である。この歌は良寛も骨折つたと見えて、『うき雲の身にしありせば郭公しば啼くころはいづち行くらむ』といふ歌もある。後者は然し前者に比して平凡である。凡俗の詠歎にひとしい。同じやうな歌であるから、此二つを比べて考へると爲めになる。『いづこに待たむ』と『いづち行くらむ』を比べると作歌に苦しんだ心が尊くなる。(四月二十六日)

【附記】 貞心尼との問答歌で、貞心尼が、『いざさらばさきくてませよほとゝぎすしばなく頃は又も來て見む』といつたのに答へた歌に『うきぐもの身にしありせばほとゝぎすしばなく頃はいづこに待たむ』(一本曰結句いづち行くらむ)といふのがある。(貞心尼遺書蓮露に從ふ) この歌を標準とせば(二)の『しば啼くこゑを』は『しばなく頃は』の誤であるが、これは作者が自分で直したのであらうと思はれる。(二)の歌に『皐月すぐるまでほとゝぎすの鳴かざりければ』といふ詞書のついてゐる書(大宮氏本)もある。そこでつまりは、貞心尼と問答の歌で其れが少し變化して傳つたのは(二)の歌であらう。

○

(三)あを山の木の間たちぐき郭公なくこゑ聞けば春は過ぎけり

『たちくき』の『くき』は加行四段の動詞である。『たち』は語勢の上の添語である。木の間を潜り飛ぶ、木の間を飛びめぐるといふ程の意である。結句の『春

は過ぎけり』といふ句は、氣が利いてゐて一定の落著(たちつき)があり厭味の無い句である。幾たびも古人によつて言ひ古るされて居ながら矢張り味ひのある句である。郭公を詠ずるといふ樣な陳腐な題の歌を、生かして詠むといふ事は餘程の力が要る。良寛の郭公の歌を讀むと、皆平淡な當り前の歌ばかりであるが、平順淡淡の裏に何處となく犯すべからざる緊密の心を味ひ得る。これは萬葉調の歌である爲めだと思ふ。而して萬葉調と云つても萬葉調中の良寛調だから面白いのである。『むかし思ほゆ』といつても萬葉の歌人其儘では無い。『あはれなりける』といつても西行調とは違ふ。なほ郭公の歌數首左に錄する。

(四)あしびきの國上(くがみ)の山を今をかも啼きて越ゆらむ山ほととぎす

(五)ほととぎす汝が啼く聲をなつかしみ此の日暮らしつ其の山の邊に

(六)あひ連れて旅かしつらむ郭公ねぶの散る

まで聲のせざるは

(七)ひさかたの雨に濡れつつ郭公なく聲きけばむかし思ほゆ

(八)あしびきの國上の山を越え來れば山郭公をちこちに啼く

(九)あしびきの國上の山の郭公よそに聞くよりあはれなりける(り)

『あひ連れて旅かしつらむ』といふ樣な流俗の好む想像をしてゐる。さうかと思ふと『ねぶの散る迄』と云ふ清新な生々(いきく)とした句がある。

○

(一〇)秋萩の咲くを遠みと夏くさの露にぬれつ

つ訪ひし君はも

この歌も必ず詞書がある歌に相違ない。詞書が無いと何となく茫然して居る。友を偲んで詠んだものであらうとも受取れる。或は現に友と話しながら嬉しくなつて詠んだ歌だとも受取れる。多くの場合『君はも』といへば挽歌などに用ゐる句法であるが、さうばかりとも限らない。又、同じく良寛歌集の秋の歌の部に、『萩の花咲くらむ秋を遠みとて來ませる君がいくら嬉しき』といふのがあるが、是は夏の部に編入すべきものであらうと思ふ。この歌と前の歌は甚だよく類似して居る。この歌から類推して前の歌の意を考へると必ずしも挽歌では無いやうである。又挽歌といふことわり書がない以上は、この歌の如き句法の時は矢張り挽歌で無いやうに解釋すべきものであるかも知れない。此種の歌に逢著すると、作者としてなかなか有益を覺える。（四月二十七日夕）

【附記】（一〇）の歌は挽歌ではあるまいと云つて置いたが、此歌は貞心尼との

問答歌で、貞心尼の『秋はぎの花さくころを待ちとほみ夏草わけて又も來にけり』への返し歌であるが、第四句の『露にぬれつゝ』が『露をわけわけ』になつてゐる。（蓮の露に據る）又參考歌の『いくら嬉しき』は『こころ嬉しき』の誤寫であらう。良寛全傳には『こころ嬉しき』になつてゐる。なほ貞心尼の『立ちかへり又も訪ひ來む玉鉾の道のしば草たどりたどりに』の歌に答へた『又も來よしばの庵を厭はずば薄尾花の露を分け分け』といふのもある。『露を分け分け』が參考になる。（七月八日）

○

（一一）飯乞ふとわれ來にけらし此の園の萩のさかりに逢ひにけるかも

かういふ托鉢の心、風流靜寂の心などは多忙な我々にとつて興味ふかいものである。上の句と下の句との間に一寸とした理窟が挿まつてゐる。其は『けら

し』の處で分かる。然し其の理窟から來る一種の臭みが、下の句の太い一本調子の句法で消されてゐる。一首の調子は鈍く重い。『いひ乞ふ』などの句は漫然として出來たもので無く、矢張り相當に苦心した句のやうに思はれる。さうして良寛の詩にもある『十字街頭乞食了』などの『乞食』をくだいて『いひこふ』と用ゐたのであらうと思はれる。この歌の場合も『この園』と云つてゐる。斯る『この』等の特徴に就いて私は數年前の短歌雜論で論じ、自らも作歌の上で實行して居る。この歌と似た歌で、『飯乞ふとわれこのやどに過ぎしかば萩の盛に逢ひにけらしも』といふ良寛の歌もある。これは一つ歌と看做すべきものであらうと思はれる。

○

(三)玉ぼこの路まどふまで秋はぎは散りにけるかも往く人なしに

古來から幾らでも類想のある歌である。表はし方も之に類似の歌はなかなか多いと思ふ。それゆゑ作者にとつては左程名譽といふ歌には行かない。然し鑑賞者の側にゐて、從來の志賀の山路の落花の歌などが若し優れた歌だとすれば、矢張り此の歌も優れた歌だといはねばならぬといふのである。思ふに獨創とか何とか云ふ事に就いては良寛は殆ど考へずに平氣で勝手に作歌して居たであらう。其がやがて自づから獨創の歌を出すに至つたのであらうとも思はれる。而して又其處が予等の苦しみとは相違してゐる幸福な點でもある。(二十六日夜)

○

(三)秋の日に光りかゞやくすゝきの穂こゝの高屋にのぼりて見れば

此の歌はなかなか佳い歌である。どういふ訣かと前から考へて居た。第三句で一寸切れる句法である。而して第三句の終が名詞であつて、終音が『ほ』で

ある。それから第三句までは如何にも單純で直接で印象的表現法である。そして第三句で一寸切れたものである。それから第四句第五句でどんな大袈裟な事を言ふかと思へば單に、こゝの高屋にのぼりて見れば、といふのである。この辻褄の合はない樣な子供らしい言ひ振りが此の歌を偉大ならしめた所以である。特に一首に就て、

○○○○すゝきの穗○○○○のぼりて見れば

この具合がなかなか興味のある處である。同じ技巧家でも定家ぐらゐの程度の技巧家ならば、決して此樣な言ひ振りでは承知が出來ないに相違ない。良寛のは平氣でやつて居て定家などの以上に拔けてゐる。以上の理由を發見したのは予の得意とする所である。それから短歌の調子は、安定（スタビール）であるべしといふならば、此歌の場合は上（かみ）の句は強くて下（しも）の句が弱いやうである、尻切蜻蛉のやうな姿であるといふ理窟になるが、幾遍も幾遍も讀み返して見ると、少しも落著（おちつき）

の惡い事が無い。その根源は主として下の句の稚い鈍重な調子に存するのである。それゆゑ一見弱い樣で實は弱くないといふ事になる。それから上の句の言ひ方が如何にも鮮かで印象的で現在の我等の歌に見るやうな言ひ方であるのも珍とすべきである。この歌と非常に似た歌で『秋の日に光りかゞやく花すゝきこゝのおにはに立たして見れば』といふのがある。この歌が早く出來て（一三）の歌はそれを訂正したものゝやうにおもはれる。

○

（一四）秋かぜに靡く山路のすゝきの穗みつゝ來にけり君がいほりに（一本曰結句君が家べに）

『見つゝ來にけり』といふ樣な處を作者は何となく得意でゐるのだから興味がある。さうして其が如何にも生眞面目に出てゐるのだから猶更おもしろい。かういふのに比べれば西洋の詩特に象徴詩などのむづかしいのは尤もの事である。

さうして西洋人には鯱鉾立をしても斯ういふ事が言ひ得ないのであらうから猶更おもしろい。この歌に似た歌で次の様なのもある。

秋やまに咲きたる花をかぞへつゝこれのとぼそにたどり來にけり

この歌の方が作意が秀に立ち過ぎた爲め、普通の歌人の歌と同じ惡道に墮して仕舞つたのである。

○

(二五)わが庵の垣根にうゑし八千くさの花もこのごろ咲きそめにけり

朝はやく起きて清水をとくりと飲んだ樣な心持の歌である。無論卽興の歌には相違ないが、『わが』とか、『花も』などの事を眼中に置いて讀み味ふと、平凡のうちに飽くなき味ひが出て來る。竹の里人の晩年の歌には斯ういふ樣な平淡な歌がある。相當の技倆を持つ樣になれば自分の腕を振つて見たいといふ念が

先に立つから、かういふ平淡な歌では承知が出來ない。予等の現在は丁度その程度のものであるかも知れない。

○

(二六)ゆふぎりに遠の里べはうづもれぬ杉立つ宿にかへるさのみち

この歌も平凡な歌であるが棄て難い歌である。予の鈔する歌は一見どうも平凡な歌が多い樣である。實際良寛の歌集でも斯ういふ平凡な歌ばかりでは無い。なかなか姿態を作つたり理窟を言つたりして居るのがある。ところがさういふ種類の歌は予には斯る平凡な部類の歌に比べて猶更淺薄に響いてならない。良寛が姿態を作つたり理窟を言つたりする位の程度のものならば別に癪に觸るといふ程のものでは無い、畢竟淺薄に響いてつまらないから棄てるのである。此の歌が平凡であると云つても實際は一首の感じ方竝に技巧に蔑るべからざる所

がある。上乘の歌では無論ないが作歌當時の景色を腦裏に浮べて味ふと、表はし方が第一順直に行つてゐる。『をちの里べはうづもれぬ』でも『かへるさのみち』でもさうである。又『杉立つやど』の句法なども相當の苦心を經たものだと思ふ。

○

(一七)かぜは清し月はさやけしいざともにをど
り明かさむ老のなごりに

(一八)いざうたへわれ立ち舞はむぬば玉の今宵
の月に寢らるべしや

是等の歌は良寛の歌としては、珍らしい程元氣のよいものである。『やまかげの岩間を傳ふ苔みづの微かに我は住みわたるかも』といふ樣な靜寂心の歌を殘した良寛がどういふ機會に逢うて斯ういふ元氣のよい歌を詠んだかを想像する

と興味がある。そして集人會して酒を汲み、法師などいふ概念から全く遠離して赤裸々になつた所が面白い。然かも各一首の風調が萬葉の調べに加味するに漢詩の風韻を以てした。以上の事は是等の歌で最も興味ある點である。『月は清し』とか『われ立ち舞はむ』などの句調は、常の良寛の歌の場合にあつては何等の意味をなさない程果敢ないものであらうが、是等の歌の場合には、是等が一定の權威を以て緊密に活動してくるから尊い。特に尊いのは第二首の『いねらるべしや』といふ力强い四三調の結句である。要するに是等の二首は何の事は無い懸命で詠み全體が緊張してゐるからよいのである。【附記】「蓮の露」には、此等の歌に『ふみ月十五日の夜よみ給ひし』といふ詞書を添へてゐる。

○

(一九)月讀のひかりを待ちて歸りませ山路は栗
のいがの多きに

何とも云へないやさしい心の歌である。良寛は女人に向つても斯ういふやさしい心になれた人に相違ない。枯木寒巖とか妙な筆つきで達磨の繪を描くとか頓智の問答をやつて日を送るとか、さういふ種類の法師とは餘ほど違つてゐる。堪へられない程よい心の歌である。『月讀の光を待ちて』といふ句も味はつて見ると餘程趣ある句である。萬葉集の歌から影響を受けたものであるが、月讀の光を待ちてとは何でも無い樣で中々言へないと思ふ。『栗のいがの多きに』の句とても實感の句として見て、なほ我等の到底及ばない所がある、我等は現今作歌に就いて熱心に勉強して居ながら時々行きづまつて苦惱してゐる。我等が道の先蹤にかういふ歌があると思へば、額たれて心から敬禮しなければならぬ。

(三〇)月讀のひかりを待ちて歸りませ君が家路は遠からなくに

といふ歌は恐らく(元)と同時に出來たものと思ふ。一所にして味ふべき性質の

歌である。【後記】この歌は定珍老人との贈答歌であるから、前の歌もさうであらうと思はれる。前の歌の方が面白いやうに思ふ。

○

(三一)足びきの國上の山の松かげにあらはれ出づる月のさやけさ

國上の山の松陰といふのは、距離が大で作者は少しく目を上げて見るやうな境地だと想像される。予は故國の山を歩いてゐた少年の時分によく斯樣な景色に逢著したゆゑ、此歌の心持も分かる樣におもふ。此歌は良寛の他の歌の如く單純平淡である。第一句に『足引の』といふ印象の鮮明でない枕詞を用ゐ、第二句第三句第四句結句と段々重く強くなつて行つてゐるのはなかなか巧妙である。強ひて難を云へば、技巧が單純でゐながら一首の調べが少しく滑か過ぎた爲め、聊か俗人の歌のにほひが漂ひかけてゐる點である。藤原定家の歌はあれ

だけ技巧に骨を折つてゐて、出來たものは甚だ巧妙であるが矢張り一首の調が少し滑か過ぎる爲めに俗人の歌のにほひがある。すべすべした單に愛くるしい女人の油繪像のやうなものである。

○

(三)みどりなる一つ若葉と春は見し秋はいろいろにもみぢけるかも

淺薄な悟りの歌である。かういふ思想の歌は古來幾多の歌人、特に法師の歌人などによつて幾たび繰返されたか知れない。從つて陳腐極まる厭味なものになつて仕舞つてゐる。良寛の此歌を棄てないで選する所以は、さういふ陳腐極まる平凡な類似歌の中にあつて、比較的異彩を放つてゐるからである。それは主として音調の點、つまり萬葉調であるからである。良寛のこの歌は西行法師の、『さまざまに花咲きたりと見し野べの同じ色にも霜がれにけり』には及ばな

い。西行法師のは兎に角行脚してゐて實地にしみじみと感じた歌である。良寛のは實感の歌であつても未だそれほど捨身になつてはゐない。また、『春は見し』などの句も下手であるばかりで無く前人の句の模倣であるからなほ下等である。『いろいろにもみぢけるかも』の句は流石によい。

○

(三)秋やまを我が越え來れば玉ぼこの路も輝るまで紅葉しにけり

(三)夕ぐれに國上のやまを越えくれば衣手寒しもみぢ散りつつ

前人の歌主として萬葉歌人の歌の影響はあると謂つても、なかなか手に入つたものである。表はし方は實に洗練されたものである。(三)の第三句の『玉ぼこの』なども決して無意味では無く、『路も輝るまで』は此歌の場合決して動かす

べからざる尊い句である。(二四)のうちの、『衣手さむし』から直ちに『もみぢ散りつつ』と續けた具合なども、餘程うまい所がある。かういふ歌になると良寛の歌も宗武の秀歌に肉迫せんとする慨がある。宗武の歌は一般に歌柄が大きい。どういふ歌を詠んでもさうである。是は天品の致すところであらうと思ふ。『眞帆ひきて漕ぎくる舟に月照れり樂しくぞあらむその舟びとは』などの歌柄は實に大きい。徳川時代に前後して宗武良寛元義などの出たのは甚だ興味ある問題である。然かも三人共に互に流派の聯鎖がなく獨立して類似の歌を作つてゐるのが面白い。

○

(二五)秋の夜もやや肌ぎむくなりにけり獨りやさびしあかし兼ねつも

(二六)秋もやゝうらさびしくぞなりにける小笹に雨のそそぐを聞けば

かういふ寂の趣は、西行や寂然や芭蕉などの藝術にも發見されるが、矢張り我々にとつて、非常になつかしいものである。なほ棄て難い歌を書けば、

(二七)ひさかたの時雨の雨の間なく降れば峯の紅葉は散りすぎにけり

(二八)あしびきの山の紅葉は散りすぎてうら寂しくもなりにけるかも

(二九)秋の夜の月のひかりのさやけさにたどりつつ來し君がとぼそに

この樣な歌は平凡であるが、何となし、いゝ所があつて棄て難い。(四月二十七日記)

○

(三〇)飯乞ふと里にも出でずこのごろは時雨の

雨の間なくし降れば

(三)飯乞ふと里にも出でずなりにけり昨日も

今日も雪のふれれば

二首ともに一しほ現世遠離の心を表はして居る。作者の生活を背景に置いて是等の歌を味ふと言ひ知れず好い氣持になる。かういふ心の歌を誦し味へるといふ事は忙しい吾等の心にどれ位尊い事であるか分からぬ。我等が心の一面には動運の相、戰鬪の境を欲する處がある。一面には堪へがたく靜寂の境にあこがれてゐる。

(三〇)の第三句で『このごろは』と云つて結句で『まなくし降れば』と云つたのは下手である。然し其が却つて稚く厭味でなく響かせる。つまり平氣で俗な效果を豫期せずに自づからにして斯うなつたのだからいいのである。

(三一)の歌は第三句切であるが、その『なりにけり』が少しも厭では無いと予

はひそかに思つてゐる。(四月二十八日)

○

(三二)夜もすがら草のいほりに我をれば杉の葉

しぬぎ霰ふるなり

杉の樹立のなかに小さい庵のある所である。杉の葉に霰の降る音は度々聞いた事があるのである。夜もすがら草庵に居るといふことわかつたのは、終夜目ざめて居るといふ訣ではあるまい。終夜靜かに籠つて居るといふ程の意であらうと思ふ。靜かに未だ目覺めて居ると霰の降る音がする。杉の葉に降つてゐる音だなといふ事は直ぐ作者に分かるのである。それゆゑ現に杉の樹に霰の降る光景を見て居なくとも此歌は少しも不自然な表はし方では無い。『しぬぎ』は言海の解の如く、歴て行く、押し分けて通るの意である。『山里の槇の葉しのぎ降る雪の』『高山の菅の葉凌ぎ降る雪の』などと同し意である。

○

(三三)埋火もやや親しくぞなりにける遠の山べに雪や降るらむ

雪や降るらむといふ聯想が餘り緊密でない樣であるが、そこが稚くはかなく此歌を爲してゐる。此歌の下の句のやうな、想像の句は古來から大分多い。同じく良寛の、『このゆふべ岩間の瀧津音せぬは高根のみ雪つもるなるらし』といふ歌なども類想の歌である。此歌は定珍に與へた歌である。かういふ平淡な歌になると、どうも味ひが無いやうに讀者は思ひがちである。それが未だ幼稚なのである。予が新派の歌を讀んでゐたころは『らむ』などとあると、もう古くさい樣な氣がしてその歌を頭から棄てたものである。誰でもかういふ道は通つて來るものと見える。これは鑑賞ばかりでなく創作の方でも矢張りさうである。何か奇拔な事を言はないと新らしくないやうに思ふ時期はあるらしい。

○

(三四)足びきの山田の田居に啼く鴨のこゑ聞く時ぞ冬は來にける

小倉百人一首にもある猿丸太夫の『こゑ聞く時ぞ秋は悲しき』の歌から暗指を受けてゐる。良寛の歌の結句の『冬は來にける』は甚だよい。この歌の如き技巧はなかなか洗練されたもので、だんだん外邊の艶が拔けて一見平凡なやうでゐながら言ふべからざる妙味のある歌である。この妙味とか旨味などいふ事も單に技巧の點に止まるといふ樣には解釋したくない。妙境などと口にこそ言ふが、幾たびも幾たびも命を打ち込んで打ち込み拔いた末で無ければ到達し難い境地である。『足引の山田のくろに啼く鴨の聲きく時は秋は暮れける』といふ歌もあるが、同一の歌で一つは直したものと思ふ、良寛はいい天品を有つて居るが、名人が爲した程の苦勞は爲して居ない。そこが幾分の不滿點である。

○

(三五)山かげの草のいほりはいと寒し柴を焚きつつ夜を明かしてむ

何の理窟も言はずに、ひとり言のやうに寂しい心を漏らして居る。こんな夜などには、ただ茫然として居た訣でもあるまいから、種々な心が湧いて居たに相違ない。或は經典などでも勉強して居たかも知れない。良寛ぐらゐの法師が、こんな夜にどういふ事を爲して暮したかといふ事を知りたい。歌は至つて單純で何も言つて居ないが、何となく如上の希望を起させるほどの背景を持つ歌である。『山かげの』といつたのは獨ごとの性質から稍はづれてゐる。『小夜ふけて嵐いたう吹きたりければ』と詞書がある歌である。(四月二十九日)

○

(三六)たまさかに來ませる君をさ夜あらしいたくな吹きそ來ませる君に

第二句の『君』は定珍を指すのである。良寛は山に家居して寂しい生活をして居たのであるが、從て自分と氣の合つた友と會談する事を非常に嬉しがつた樣に思はれる。前出の歌『月讀の光を待ちて歸りませ』といひ、此歌といひ、親友に對する情が如何にも鮮かに表はれてゐる。雨に向つて『いたくな降りそ』といひ、風に向つて『いたくな吹きそ』と古來から言つた事が、大劫運の偉力の前に物言ふのであつて、其偉力を極力信じて居た古代の人の言葉として味ふと、甚だ力の强いものである事が分かる。『來ませる』などの甘たるい句が却つて親しく響くし、『來ませる君に』を二度繰り返したのも、親しい心の濃度を示してゐる。この歌のほかに、赤穗に旅寢して作つた歌に、『山おろしいたくな吹きそ墨染の衣かたしき旅寢せる夜は』といふのがある。共に同じ樣な氣持の歌ではあるが、前者の心は如何にも、きびきびと躍動してゐるのに、後者の場合

は未だせつぱつまつては居ない。云ふ意は未だいゝ加減な心の動きを基として歌にしてゐるといふのである。後者程の歌ならば幾らでもある。

○

(三)紀の國の高野のおくの古でらに杉のしづくを聞きあかしつつ

『たかぬのみ寺に宿りて』といふ詞書がある。高野山といふ固有名詞は詞書にあるばかりで無く歌にも詠み込んでゐる。然し少しも耳觸りがしない。つまり『たかぬ』といふのは有名な處であるに加へて音調の佳い名所である故であらうと思ふ。氣が附いて見ると此歌の季は意味の上から見て未だ明瞭では無い。そこで曾て高濱虛子氏と伊藤左千夫長塚節兩氏との間に問題になつた短歌と季といふ事に聯關せしめ得る歌である。予私かに思ふに、俳句の季といふ約束は非常に洗練された透徹した心裏から成立したものと思ふが、短歌の場合は未だ其

程までに作者も論者も考へては居なかつたのである。此事は一面に於ては短歌の不徹底を示すものであるが、一面に於ては自由と暢氣との中に自づから季を暗指するといふ特徴を示して居る。此歌に就いて云つて見れば春雨ごろの景か、露じも頃の晩秋から初冬にかけての景か、寒い時雨ごろの景か、單に『杉のしづく』だけでは意味の上から見て季が明瞭で無い。ところが一首の風調から味つて見ると、どうしても晩秋ごろの雨後の心持のやうである。このあたりは短歌の曖昧な點でもあり同時に面白い點でもある。この歌は良寛の歌としては初期のものであるらしいが、矢張り佳作である。

【追記】 此歌は良寛の父以南が高野山にて歿した年、即ち寛政十一年九月(西郡氏の考證に據る)より後れて同年に、高野山に行つて詠んだ歌であるから、秋か初冬かの作であらうと思はれる。この『杉のしづく』の季の感じに就いて大須賀乙字氏の教示をあふいだ。さうして、氏より『杉のしづく』の句を若し俳句として

考へても、寧ろ無季の部に入るべきものであるが、季節を味ふと露しげくなりゆく秋ごろの事象のやうに思はれるといふ解答を得た。西郡氏の考證と略合致するやうである。又良寛の作として初期の部に屬してゐるらしいといふ前言も略あたつてゐる。

○

(三八)あしびきの黑阪山の木の間より漏り來る
月を夜もすがら見む

『足引の』といふ枕詞を好んで良寛は用ゐる。それが極めて無雜作である。『よもすがら見む』といふ事から考へると、黑阪山の林間に作者が住んでゐるのである樣に思はれる。そして向うに大きい明い月が林間に見え出した處である。月は刻々に移りゆくものであるから、『夜もすがら見む』は不合理な樣であるが其處が良寛の間の抜けた可愛らしい處である。又『漏り來る月』は家を圍んでゐる樹立から漏れて來る月光の事の樣にも受取れるが、それでは矢張り一首としては面白くない。又この歌が、さう受られるやうに出來て居る事は一つの缺點である。

○

(三九)國上やま岩の苔みち踏みならし幾たび我
はまゐりけらしも

『くがみ山にのぼりて』といふ詞書がある。國上山は前出の歌にもある如く、越後國西蒲原郡の山である。山は孤圓の秀峰であつて、彌彦山の南にある。大體火山岩から成つて居る。山下に現今國上村といふ村がある。山上に國上寺がある。一名雲上寺と云つて眞言宗を奉じてゐる。なほ山阪に五合庵といふ庵がある。貞享の末年に僧萬元の隱栖したところである。文化元年、良寛四十八歳の時この庵に移住し、六十歳までゐたところである。

良寛と國上山との關係の中々深いことが分かる。いろいろの感慨を抒べるのに煩瑣なる理窟を言はずに、『幾たび我はまゐりけらしも』の一句で表はした處に感心する。（五月一日）

○

(四〇)往くさ來るさ見れども飽かぬ岩室の田中に立てるひとつ松の樹

岩室といふは越後國西蒲原郡の村落であると註にある。往つたり來たり幾度もして其度に見て居ると一本の松樹でも何となく親しくなつて來る。その心持を表はしたやさしい奥ゆかしい歌である。西行の歌に、『こゝをまたわれ住みうくて浮かれなば松はひとりにならむとすらむ』といふのがあるが、それに似通ふ心の歌である。西行のかういふ歌を釋くとき、これを擬人であるとか、松樹を生きものの如く思つて詠んだのだなどいふのは少しく言ひ過ぎてゐるやうに

思ふ。作者の側からいふと、さう瞭然と意識してゐるのではなく忽然としてさういふ言方をするのである。さうでないと作爲の伴ふ歌に墮して了ふのである。

【附言】この歌一本には、『ゆくさくさ見れども飽かず石瀬なる田中に立てる一つ松がえ』（良寛全傳）となつてゐる。又長歌の反歌として此歌を書き、結句が『一つ松あはれ』となつてゐるのもある。石瀬村から岩室村に行く途中の田中にある松樹である。それで一歌には『石瀬なる』とある。

○

(四一)ゆふぐれの岡の松の樹ひとならば昔の事も問はましものを

『夕暮の岡』は越後國西蒲原郡の地名である。昔萬元禪師がこの岡を通つた時、『忘れずば路ゆく人の手向をもこれを是とせよ夕暮の岡』と一首を詠んだ相である。良寛はその事を聞いて、ゆかしくなつて詠んだ一首は『昔の事も問は

ましものを』の歌である。この歌の方は前の歌よりも俗調である。『人ならば』などといふからである。原始の人が大樹を拜んだりしたのは、はじめは何となしさういふ氣がしたのであらう。すがる心、虔しき心、悔の心を投射したのであらう。それゆゑ、歌などで樹のことを人と云つたり神と云つたりするのは、その儘では面白くないのである。幾度も古人によつて繰り返された心の歌であるが、詞書と相俟つて興味を感じたから此處に採錄して置く。

○

(四二)この宮の森の木下に子ども等と遊ぶ春日
は暮れずともよし

和亭の畫に讃してといふ詞書がある。和亭の繪はどういふ繪であつたか分からない。然し畫讃の歌としないで獨立して味つて可い歌である。他の歌が示す如く良寛は子供が非常に好きで、一處になつて日の暮れるのも忘れて遊んで居

たやうである。『この宮』といふのは繪に描いてある社の事であらうと思ふ。子供の遊ぶのは純心である。自分だちの形成つた世界のなかに全性命を打こんで遊んでゐる。成人が眞劍な爲事などいふことを考へても、なほ『死』のことなどが時々頭のなかに浮んでくる。子供が遊んでゐて電車に引かれて了ふのは『遊び』に全魂を取られてゐるが爲めである。この境に良寛も飽く事なく住しゐたのだかも知れない。予らはもう到底さういふことは出來ない。

○

(四三)さすたけの君がみ爲めと久方の雨間に出
でて摘みし芹ぞも

『さすたけ』は枕詞である。芹を人に贈る時添へた一首であらうと思ふ。口上代りの歌である。ものなど贈る時一首の歌でも添へて贈るといふ事は氣持のいいものである。然し其を受取る者が矢張り歌ぐらゐ分かる者でなければ詰らな

い。さういふ相互の間柄であるから又此歌に意味があるので、誰にも彼にも斯んな事言つて歌など贈るとなると遊戯臭を帶びるに至る。此歌は良寛の他の歌の如く表はし方が極めて單純である。枕詞を二つも一首の中に用ゐてゐるから、意味の上から云へば單純過ぎる程である。つまり調子で持たせた歌である。それでも、『雨間に出でて摘みし芹ぞも』と云つて、急所を捉へて居る。良寛は一面に於て素人じみた處が非常に多いが一面驚くべき程雋敏である。（五月二日記）

【附記】この歌は、良寛の親しい友であつた大機和尚が、良寛を訪問した時良寛が芹料理の馳走をした。大機が食はんと欲して、難色あつた時、良寛は此歌を詠んだのである（良寛全傳）なほ結句の『つみし芹ぞも』は一歌に『つみし芹ぞこれ』となつてゐる。書寫の誤でなく、一方は自ら直したのであらう。（八月十五日）

○

（四四）あづさゆみ春になりなば草の庵を早く訪

ひてませ逢ひたきものを（第四句一本曰早く出て來ませ早く訪ひてまし）

友に贈つた歌であらう。良寛は法師であつて山の庵に獨り閑寂な生を送つてゐた事、托鉢などをしながら貧しい寒い衣食を遂げた事などを背景に持つて居て此歌を味ふと非常に興味がある。此歌は我等ならば戀しさに堪へ兼ねて戀しい女人にでも告ふべき心の歌である。急促し極まつた然も流動し止まざる純正不二の心のあらはれである。女人に對する戀歌と觀ても此歌は優秀なる歌である。そして此歌の對象は男の友であるらしい點が非常に面白いのである。『逢ひたきものを』といふ結句は古今獨歩である。予は古歌を味ふに際して常に結句に注意し、自ら作歌するに際しても一番結句に焦心して居る。而して此歌の結句ほど利いてゐる換言すれば一首に響きわたる結句は甚だ希有である事を發見してゐるゆゑに、此歌を誦する毎に此結句を涙を流して恭敬するのである。難有くも難有き結句である。（五月二日夜記）

【追記】 此歌は如何なる場合に詠んだものか、如何なる人に贈つた歌かを明かにしなかつた爲めに如上の解釋をしたのであるが、その後西郡久吾氏の良寛全傳を讀んで此歌は貞心尼との問答歌である事を知つた。貞心尼が始めて良寛に遇つたのは良寛七十歳貞心尼二十九歳の時である。良寛は七十五歳で死んでゐる。（貞心尼遺書蓮の露に七十四歳とあるのは誤である）此歌は病氣になつてからの歌である。蓮の露に『其後は兎角御心地さわやぎ玉はず冬になりてただ御庵にのみこもらせ玉ひて人にたいめもむづかしとて内より戸ざしかためてものし玉へる由人の語りければ、せうそこ奉るとて、そのまゝになほたへしのべ今更にしばしの夢をいとふなよ君、と申し遣しければ其後玉はりけることばはなくて』とあつて良寛の此歌が書いてある。つまり、『會たきものを』と云つた人は、男では無くて未だ若い淨い女人であつたのである。『此歌の心は我等ならば戀しさに堪へ兼ねて戀しい女人にでも告ふべき歌の心である』と前言したが、實に良寛は詠歌に際して自

らを欺かなかつた。死に近き老法師の良寛が若い女人の貞心尼に對した心は眞に純無礙であつた。予は此世に於ける性（セックス）の分別の尊さを今更に思ふ。（八月十五日）

○

（四五）逢坂の關の此方にあらねども往來のひとにあこがれにけり

良寛の歌でも、部分部分の句法などは古歌から影響を受けたり其儘踏襲したりしたものが中々ある。なかには全くの模倣や古歌の繰返しに過ぎないものさへある。それ故に精細に良寛の歌を研究しようとすれば、自然古歌から檢べてかからねばならない。併し予の私鈔は其程まで立入つては居ない。古歌を知つて居なくも味ひ得る良寛の歌ならば、單に良寛の歌だけを頭に置いて味つて來た。然し此逢坂の關云々の歌だけは古歌に流れてゐる一種の心の型を知つてから味ふのが至當である樣に思はれる。昔未だ交通の盛でない時分は逢坂

の關を境界として向うの國と此方の國とは別國のやうな氣がしたものらしい。東國から云へば京都は關の彼方である。京都から云へば東國は關の彼方である。東國から云へば東國自身は關の此方である。熊谷直好の『ふく風の音羽の山ぞひびくなる關の此方に秋や立つらむ』や、古今集の『音羽山音に聞きつつ逢坂の關のこなたに年をふるかな』の關の此方は京都方面を指すのである。次に逢坂の關の歌には時々戀歌がある。古今集の此歌もさうである。後拾遺集の『逢坂の關の彼方もまだ見ねば東の事も知られざりけり』や後撰集の『ありとだに聞くべきものを逢坂の關の彼方ぞ遙けかりける』や續古今集の『今日はなほ都も近し逢坂の關のあなたに知る人もがな』など皆一種憧憬の情を抒べたものである。

良寛の歌の意は、今己が山里の草庵に住んで居れば古へ人が逢坂の關を越えて東へ旅し都戀しくて種々と道ゆく人に話など聞いた樣な一種さびしい憧憬の

情が湧いて來る。古人が歌つて逢坂の關の此方ではないけれども、今己の心は何となく道ゆく人に憧れてゐるといふ意である。『あこがれにけり』といふ結句は堪らなく好い。甘く豐かに柔で溶け行く樣な句である。前の歌の結句といひ此歌の結句といひ予の心を溶かす力がある。萬葉集の戀歌、特に萬葉女歌人の戀歌などを除いて良寛の是等の歌に比すべき戀歌は恐らくは古歌にはあるまいと思ふ。『あこがれにけり』といふのは何となく憧れる心で、往來の人から種種娑婆の事を尋ねたいなどの心では無い。この歌と一寸似た歌で『君なくて寂しかりけり此頃は往來の人のさはにあれども』といふのがある。

○

（四六）いにしへに有りけむ人の持てりとふおほみづがめのうた

『みづがめのうた』といふ題がある。『おほみづがめは』は水甕の事であらうか。

いかにも俗氣のない、平淡々の裏に一種透明の味の漂うて居る歌である、我は持ちたりと云つて嬉しがり得意でゐる心持も分かる。これは三首連作中の一首で、ほかの『今よりは塵をも据ゑじ朝な夕な我見はやさむ甚くな詫びそ』などの歌を見ても、誇張では無く餘程愛し嬉しがり得意で居た事が分かる。【追記】水瓶は神代祝瓶にて形水筒に似たるものなる由。（良寛全傳）（五月二日夜）

○

(四七) ひとの子の遊ぶを見れば行潦（にはたつみ）ながるるな
みだとどめかねつも

(四八) この暮のうら悲しきに草枕たびのいほり
に果てし君はも

(四七)の歌は『子供のみまかりたる親の心に代りて』と詞書のある四首中の一首である。『にはたづみ』は俄雨などが降つて地上に池の様に水が溜るのをいふ。

それが『流』の枕詞として用ゐられる事がある。萬葉卷二の『み立たしし島を見る時行潦ながるる涙とどめ兼ねつる』とあるので知られる。良寛の歌の句法は萬葉の此歌からの影響がある。四首中の他の作には『唐ごろもたちても居てもすべぞなき蜑のかる藻の思ひ亂れて』といふのもある。哀傷歌として難（なん）なき歌である。

(四八)の歌は良寛が幼少の時分から懇意にしてゐた友が越後の國を去つて東國に行つてゐた。長い間音信も絶えて居たのに消息を得て見れば其人は死んだといふ事である。其人を悲しんで作つた歌が此歌である。『旅のいほりに果てし君はも』の句は實に悲しい句である。稍形式的の表はし方であるが、眞實の心の凝つて成つた處がゐるゆゑに尊いと思ふ。

○

(四九) ももなかのいささ群竹いささめにいささ

か殘すみづくきの跡

『ももなか』の意味は予には分からない。爲方が無いから『百中』と解して、『多くの中のいささか』と言掛けたものだと見る。而して古く『百小竹の』といふ枕詞があるから其から思ひついたものだらうと想像してゐる。『いささ群竹』は小さい竹が群れて生へてゐる意。『いささめに』は假初に、しばしなどの意である。音調が主になつてゐる歌だから意味が不明でも爲方が無いと諦めて居る。又『ももなかの』といふのは寫字の誤であるかも知れないし、又作者が此語の意味を知らずに使つたとも考へられる。要するに曖昧な語である。此歌は折に觸れて自分の帳面のはじめあたりに書きつけて置いたものの樣に思はれる。調子になかなか佳い處がある。（五月三日）

○

（五〇）ひさかたの雨も降らなむ足引の山田の苗

のかくるるまでに

【別説】

（五一）ひさかたの雲の際涯をうち見つつ昨日も今日も暮らしつるかも

『降らなむ』は降つて呉れればよいの意。『雲のはたて』は雲の涯、空の涯、いづれの意味もある。ここは空の涯と樣に廣く意味を取つた方がいい。空の極まる所に雲が出てゐる所でもよい。兎に角雲が天に廣がつては居ない光景である。二つ共に雨を欲する心の歌である。傑作ではないが雨乞の歌としてはよい方であらうと思ふ。『山田の苗の隱るる迄に』は調子が強くて可い。なほ此二首の他に、『わが心雲の上まで通ひなばいたらせ給へ天津かみろぎ』『我さへも心ともなし小山田の山田の苗のしをるる見れば』などいふ雨乞の歌もある。

○

（五二）あしびきのやまべに住めば術をなみ樒つ

みつつ今日も暮しつ

(三)乙宮の森の木下に我れ居れば鐸ゆらぐもよ人來るらし

共に生活の狀を一般的でなく個々の實地に己を沒して歌つたものである。かういふ詠み方は眼が開いて來さへすれば非常に樂な詠み方である。併し眼を開くまでには幾多の苦勞を經て來なければならぬ。良寛の歌は總じて平淡單純であるから、左程にも思はない鑑賞者が多いと思ふが、其の境地といひ調子といひ、なかなか手に入つたものである。流俗の歌の氣取とはしやぎの域を脫して澁味と底光と落著がある。それから一般の心を暗指するに實驗の境を描いてゐる點も注意しなければならぬ。(五月四日夜)

【附記】 乙宮は國上山の麓、乙子祠畔の新庵のことで、良寛が六十一歲のとき、五合庵から移つたところである。『鐸』は大鈴であつて、僧家の訪問には鐸

鈴を鳴すのが禮儀であるといふことである。

○

(五四)山かげの岩間をつたふ苔みづのかすかに我は住みわたるかも

ゆつたりとして居て然も少しも遲緩して居ない。良寛の生活全體を表現した歌で、彼の天台止觀の永絕人蹤誰相惱亂姿意禪觀念々在道の心である。全體を表はしてゐる歌であるが、『山かげの岩間を傳ふ苔水の』と云つて漠然とでなく、きちんと天然の呼吸に自己の呼吸を觸れしめて歌つてある。『苔水の』の『の』は『の如く』又は『に通ふ心』の意である。從來の說では如是句法を序歌として說明して來たのであるが、予の考では是が卽ち象徵であると謂ひたいのである。象徵などいふ事もさう面倒臭い不思議な表はし方ばかりに限局せしめなくも可いといふのは予の說である。次に此歌で注意すべきは、『テニヲハ』の使ひ

方が非常に利いて居るといふ事である。『の』や『を』や『に』や『は』の續け具合は非常に利いて居る歌である。此歌は良寛そのものを表現したもので、良寛歌集中の秀歌である。

【附記】 伊藤左千夫先生が、『予の所藏中より抄出』したと云つてこの歌を論じた時（明治四十年）第二句を『いしまをつたふ』と訓んで居られる。良寛が自筆で『いしま』と書いたのかとも思ふが明かでない。しばらく『いはま』と訓んでおく。なほ此歌は良寛が晩年五合庵にゐたときの吟であることが分かつた。此歌に類似の歌で、『山かげの岩根もりくる苦水の有るか無きかに世をわたるかも（かな）』といふのがある。これも恐らく一方は自ら直したものであらうと思ふ。後の歌は西行法師あたりの歌の影響がある。少しの加減であるけれども、前者の方が優れて居る。また良寛の詩に、『寒爐深撥灰、孤燈更不明、寂寞過半夜、唯聞遠溪聲』といふのがある。

○

（五五）高砂の尾上の鐘のこゑきけば今日のひと日は暮れにけるかも

（五六）旅ごろも野山を越えて足たゆく今日のひと日も暮れかかるかな　一本「暮れにけるかな」

夕ぐれのうら悲しい心持を歌つたものである。われわれでも旅行などをして日が暮れかかると、一種の寂しい心が湧いて來る。其が法師の身の、特に徒歩で旅した不便な時代にあつては、緊々と寂しい心が湧いたに相違ない。この樣な苦心しない樣な平淡な歌でも、『今日の一日は暮れにけるかも』『今日の一日も暮れにけるかな』など、おのづからにして巧妙な處がある。『足たゆく』の句なども利いて居る。句法などを檢べるのは現在の予に一番興味がある。それから調子の點を云へば此二首の如きは柔かで力が殆ど無い樣であるが決してさう

で無い。『足たゆく』などと云つて居ても、其の疲勞の心持が矢張り緊密に表はれてゐるからいゝのである。

○

(五七)ありそ海のうへに朝ごとたつ市のいよいよ行けばいよいよ消にけり　幻達婆城

(五八)泡雪のなかにたちたる三千大千世界また其の中に泡雪ぞ降る

經典所載の事柄や氣持を題材として詠んだ歌は僧侶の歌集を詠むと澤山ある。ところが其等は大概はまづいものばかりである。普通の月雪花の歌であれば前人の歌から暗指を得て相當の歌も作り得るが佛典の語などを詠み込むとなると自分で自分の表現法を創造しなければならぬ。そこで佛典の語に親しんでゐる僧侶ですら中々佳い歌は作り得ない。縱ひ一首でも自分の表現法を創造する事

の困難が分かる。其を思へば漫然として其を踏襲し模倣する事は大惡業である。良寛の此二首は確かに成功したものである。其ほかの此種の歌は良寛でも失敗してゐる。幻達婆城は蜃氣樓の事と思ふが委細は他の參考書に讓る。(五月五日朝)

○

(五九)いついつと待ちにし人は來たり來たり今はあひ見て何か思はむ　第三句來たりたり來たりけり

良寛病牀にあり貞心尼の訪問を喜んで詠んだ歌である。蓮の露に『かくて師走の末つ方俄に重らせ玉ふよし人の許より知らせたりければ打ち驚きて急ぎまうでて見奉るにさのみ惱ましき御けしきにもあらず床の上に坐しゐ玉へるが己がまゐりしをうれしとやおぼしけん』といふ文章があつてこの歌が書いてある。蓮の露には第三句は『來たりけり』になつてゐるが、今は大宮氏の良寛和歌集の『來たり來たり』に從ふ。貞心尼の訪問に際して『來たり來たり』といふのは

いかにも自然であり、又予の好きで好きでならないところであるからである。

その時良寛はなほ『むさしのの草葉のつゆのながらへてながらへ果つる身にしあらねば』といふ歌を詠んでゐる。この歌の『ながらへて』は『長らへて』と『流らへて』の両方の意味がある。是等の歌を詠んでから間も無く良寛は歿したのである。蓮の露の『かかれば晝夜御片はらに在りて御有樣見奉りぬるにただ日にそひてよわり玉ひぬればいかにせんとてもかくても遠からずかくれさせ玉ふらめと思ふにいと悲しくて』といふ文を見ても分かる。是等の歌は『梓弓春になりなば草の庵をとく訪ひてませわひたきものを』の歌の出來てから間も無く出來た歌である。

なほ(五九)の歌と似た歌で『新たまの年の内より待ち待ちて今はあひ見て何か思はむ』といふ歌もある。なほ『さす竹の君と相見てかたらへばこの世に何か思ひのこさむ』といふ歌もある。此最後の歌は天保元年冬良寛病褥にある時愛

弟由之の訪問看護をうけ喜びの餘り詠んだものである。

○

(六〇)ふるさとへ行く人あらば言づてむ今日近江路をわれ越えにきと

京都から中山道に出で歸國の途に上らうとした時の作である(良寛全傳)。この歌平凡であるが、よく歌の體を得てゐる。歌の體の事などを今ごろ云々する事は今人の心に共鳴しないとも思ふが、予自身にとつては中々大切である。然し此歌は第三句切である事と結句のすわりの惡いのは缺點である。なほ旅行中の吟にて『くさ枕たび寢しすればぬば玉の夜半の嵐のうたて寒きに』といふ歌もある。

○

(六一)里べには笛や太鼓の音すなりみ山はさは

に松の音しつ

淡々と言ひ放つてゐて然かも微妙な歌である。平氣で第三句切にしてゐる。第三句までは平語調である。その點が一面この歌を特殊ならしめた點でもある。平語調で居ながら何處かに堅い重厚なところがあるから、具合がよいのである かも知れない。それよりも此歌で注意すべき點は、『さはに松の音しつ』といふ句に存する。新古今流にいへば『松の音ばかりして』などと云ふところである。此句は甚だ簡潔であつて然かも無量の心を藏してゐる。歌を考ふるには一首全體について考ふべきは勿論であるが、死活の點に對して特に重要な句や語に就いて注意を拂ふ事は決して間違では無い。予は常に短歌制作の實行に就いて苦しんでゐるが、一見平淡な樣でゐて然かも無量の心を表はし得る句法はなかなか生み難い事を知つてゐる。

○

(六三)足引の山田の翁が日めもすにい往き還ら
へ松はこぶ見ゆ

『ひめもす』は『ひねもす』と同じく『終日』の意である。調が古拙でどつしりとしてゐて、艶ぽく無いところに妙がある。此種の調の歌は良寛晩年の作に屬するものであると思ふ。ちなみに云ふ、此歌は『久方の雲のはたてを打見つつ昨日もけふもくらしつるかも』などの歌と同時に出來たもの、樣に一本（良寛全傳）に記してゐる。而して『松はこぶ見ゆ』は『みづはこぶ見ゆ』となつてゐる。『松はこぶ』といふ寫生の句が面白いゆゑ此儘にして置くが、參考のために一本の歌をも書きつけて置く。（九月四日記）

○

(六四)さす竹の君がすゝむるうま酒にわれゑひにけりそのうまさけに

(六四)さすたの君がすゝむるうま酒をさらにや
のまんそのたち酒を

定珍と一處に酒をのんだ時の作である。この時定珍の詠んだ歌もあるがまづいから此處には書かない。良寛は可なり酒が好きであつたかも知れない。上出の『いざ歌へわれたち舞はむ』の歌でも、『よしあしのなにはの事はさもあらばあれともにつくさむ一つきの酒』や『うま酒に肴もて來よいつもいつも草のいはりに宿は借さまし』などの歌でも醉中の作である事を示してゐると思ふ。『山かげの石間を傳ふ苔みづの』などの歌をのこした良寛が酒のんで無邪氣に元氣づいて來てゐるのは興味がある。其他良寛の作に『露おきぬ山路は寒し立ち酒を食して歸らむ蓋しいかゞあらむ』といふのにもある如く、『たち酒』は『立ち乍ら飲む酒』の事であらう。【追記】　良寛は酒を好んだけれども酒量多からず、三盃を越えなかつたと良寛全傳にある。

○

(六五)伊彌彦の杉のかげ道ふみ分けて我ぞ來にけるそのかげ道を

前の歌と同樣に句を繰返してゐる。この種の句法は記紀萬葉時代から多く始まつて幾多の歌人によつて繰返され、句法としては陳腐なものであるが、何時まで經つても飽かない句法である。かういふ句法は短歌の場合に最も巧妙に用ゐられてゐるやうである。俳句になるともう面白くない。佛足石の歌の體は又別種の味あつて面白いが、後世の人は其を流行には爲ずに仕舞つた。併し必ず復活するに相違ないと思ふ。ヴントの民族心理學に原始歌謠の句法は幾つも繰返すのが特徴だと云ふ樣な事があつた樣に記憶するが、我國の後世の歌謠も句を繰返してゐるのがなかなか多い。其等を比較すると面白いと思ふ。

○

(六六)浮ぐさのおふる水際に月かげの有りとは
こゝに誰か知るらむ

良寛の歌は一般に平順素朴であるが、この歌の樣なのも可なりある。心の感じ方が複雑になると大凡の表はし方では表はし切れない。それでいろいろの事をする。多くの場合單純化の淨火を潛らせる事が出來ない。さういふのは短歌として價値の少ないものである。この歌は佳い方の歌であるが、『誰か知るらむ』などと云はないで月影を見つけてはつとした刹那の心をその儘表はした方が却て尊いと思ふ。もつとも此種の句法の歌は長い間の型であるから、短歌史を檢べるのに有益な作である。

○

(六七)もゝづたふいかにしてまし旅のやど草の
庵に會ひし子らはも

『もゝつたふ』は『い』の音に續けた枕詞である。この歌は今までいろいろの處で會つたいろいろな人の事を追想して偲んだ歌らしい。何となくうら悲しい調子で人を牽付ける歌である。『いかにしてまし』は『どうして居るだらう』といふ意よりも、『どうしよう』といふ程の意味で可なり切實な心を示してゐる。『子ら』といふのは若い娘などの事で若しあれば、却つて哀ふかく切實な歌になつて來る。詞書が無いゆゑ瞭然とはしないが、予が秘かに『子ら』を若い女人といふやうに解して獨りで味つてゐる。その方が哀ふかい故である。かつて貞心尼が『山がらす里にい行かば子鴉もいざなへて行け羽よわくとも』といつた事がある。良寛答へて『いざなへて行かば行かめど人の見てあやしめ見らばいかにしてまし』といつた事がある。『いかにしてまし』といふ句は(六七)の歌の句と同じ意味である。

○

(六八)鉢の子を我が忘るれど人とらず取る人は
無しあはれ鉢の子

(六九)鉢の子をわが忘るれど取る人は無し取る
人は無し哀れ鉢の子

『鉢の子』は托鉢にゆく時手に持ちあるく鉢の事で、『はち』とも訓む。米の喜捨を乞ひ、發してこれを受ける鉢のことである。瓦鉢、鐵鉢があるが、こゝのは木鉢であるかも知れない。長歌にも『鉢の子は愛しきものかも』とあるごとく、愛して鉢の子と云つたものであらうと思はれる。これは實地にあつた事に相違ない。其を非常に面白く感じた事が分かる。鉢の子の事は長歌にも詠んでゐる。又『路のべに菫つみつゝ鉢の子を我が忘るれど取る人は無し』といふ歌もある。鉢の子の歌五首は越後國三島郡七日町山田權左衞門氏の下婢室の煤んだ障子に良寛が書いた相である。それが現在も存つて居るさうである。(良寛全傳に據る)(九月五日記)

○

(七〇)くれなゐの七のたからを兩手もておし戴
きぬ人のたまもの

(七一)缺きて食べつみ裂きて食べ割りて食べさ
てその後は口を放たず

新津桂氏より柘榴七つ贈りたる返禮として詠まれた三首中の二首である。贈物の返禮として歌を詠むなどいふ事は幾分遊びの分子も交つてゐる。從つて歌に一種の洒落のあるのは普通である。良寛の是等の二首は、優秀な點に於て普通の返禮歌などと趣を異にして居る。言語もなかなか凝つたものである。又良寛僧の面目もなかなかよく現はれて居る。『おし戴きぬ』といひ『口を放たず』と云つてゐるところ堪らなくよい。予は予の先蹤に斯くの如き句を放つ者が居

たと思ふと嬉しくて堪らない。これは予の氣稟の然らしめる所である。從つて予は斯ういふ作から眞に影響を受ける。

○

(十三)良寛僧が今朝の朝葉菜もて逃ぐる御すがた後の世まで遺らむ

木村氏邸内に居られた時の歌である。ある秋の朝、朝餉を作らうと近隣の民家の畑から菜葉を盗んで逃ぐるが如く禪室にかけ込んだ時作つた歌である（良寛全傳に據る）『良寛僧が』といつたり『御すがた』などと自ら嘲り自ら戯れてゐるのであるが、どうも垢穢で無い。何となく一人の『ほとけ』が動いて居るやうな氣がする。佛者の歌のうちに、經典中の文句を短歌に飜案したり一種の悟りを概念的に短歌にしようとした類のものは殆ど皆面白くないが、日常生活のありのままを詠んだものに俗人とは全く違つて面白いのがある。

○

(十四)この頃は戀しきものは濱べなるさざえの殼のふたにぞありける

良寛全傳に、『榮螺の殼の蓋は何の料にか、蓋し「はじき」の玩具とせられしにや、はた貝覆の用とせられしにや』とある。多分『はじき』の料にし度いといふのであらう。嘗て良寛は遊女どもの『はじき』する中に交つて一所に遊んだ事がある。その時弟の由之が良寛に『すみ染の衣きながら浮かれ女と浮々あそぶ君が心は』といふ一首を贈つた。良寛答へて『うかうかと浮世を渡る身にしあればよしやいふとも人は浮世女』と詠んだ事がある。【追記】 良寛が家を出るときの注意書に、第一、受用具として、『頭巾、手拭、鼻紙、扇子、錢、手毬、ハヂキ』などと書いたのがある。さうしてしまひに『右出立の砌可讀之、於不然至不自由者也』などと書いてゐる。このハヂキの事であるかも知れない。

こんなことを參考して見ると、いよいよ面白くなつて來る。

○

(七四)つきて見よひふみよいむなここのとを十
とをさめて又始まるを
(七五)いざさらば我はかへらむ君はここにい安
く寢(いね)よ早明日(はやあす)にせん

第一の歌は、貞心尼が自ら作つた手毬を良寛に贈つたその返禮の歌である。これも他の歌と一寸變つてゐる。單に語呂(ごろ)の連續の面白味ばかりの樣であるが、どうしてなかなか味がある。初句に『つきて見よ』といつたのなども凡手では無い。結句の『また始まるを』なども實際自分が制作する積りになつて味ふと、なかなか興味ふかい。第二の歌は貞心尼と秋の長夜の更けるのも知らず染々と物語つた時の作である。『君はここにい安く寢(いね)よ』は一首の主眼である。良寛

と貞心尼との問答歌を見ると、どうも良寛の心が何時も清(すが)々しく響いて來る。予は良寛を好む。

○

(七六)いざともに山べに行かむ菫見に明日さへ
散らば如何にとかせむ

良寛全傳に『此歌は文政十一年夏、島崎木村元右衞門が同地隆泉寺に一切經七千餘卷を寄進し經堂を建立したる時經堂額面の裏にかかれたるものにて禪師七十三歳の時の作なりとす』とある。此歌は特別に其經堂建立と關係ある歌では無い。その前に折に觸れて詠んだものと思はれる。『菫見に』といふ句は面白い。菫の花は萬葉集の『野をなつかしみ一夜寢にける』の歌にある如く、我國人はなかなか愛好してゐる花である。いちめんに咲續いた菫の野べを見ると實際に愛好するに適切な花であると思ふ。此歌の『菫見に』はいちめんに咲いた

菫の野べの心持である。

○

(七七)他力とは野中に立てし竹なれや寄り觸ら
ぬを他力とはいふ

(七八)法の塵にけがれぬ人はありと聞けどまさ
目に一目見し事あらず

二つとも貞心尼に與へた歌である。佛敎の眞諦や煩悶苦悶の心を詠まうとした歌は良寛の歌集中には可なり多い。けれども歌として左程優秀なものでは無いと思ふからさういふのは誰かに任せる。この二つは矢張りよい。『法の塵にけがる』などいふ事も强味がある。第二の歌は一首の調も張つて居り良寛の信念を吐露して餘りある歌である。第一の歌は卽ち譬喩の歌、悟りの歌である。譬喩の歌としても悟りの歌としても眞實性に富んだ種類の歌であるが、それでも

何となし徹底してゐない。譬喩の歌悟りの歌のむづかしい所以は此處に存する。

○

(七九)君がやど我宿わかつ鹽のりの坂を鍬もて
こぼたましものを

弟の由之に贈つた歌である。良寛全傳に『鹽入の坂を隔てて禪師は西島崎にあり、由之は東與板にあり。羊腸たる坂路のため往復自由ならず。壯者猶且此坂路に艱む況や古稀耳順の兩翁をや。此詠ある宜なりといふべし』とある。昔より『山の端逃げて入れずもあらなむ』とか『燒亡ぼさむ天の火もがも』とか『靡けその山』などの歌がある。鍬もてこぼたましものをは慾が人間らしくて可哀らしい。【附記】 鹽入山は與坂から島崎方面へ通ふ峻坂であつたので此吟があるのであるが、良寛の長歌に『鹽入峠のこしらへたるをよろこびて』といふのがあるのは誰ががが開鑿したのである。それでもなほ難道であることが分

かるのである。

○

(八〇)乙宮の森の下やのしづけさにしばしとて
我が杖うつしけり

良寛全傳に『禪師六十一歳の老齢に躋られ五合庵の禪定薪水に不便にして且近年二豎の惱す所となりたるを以て里人の好みにまかせて乙子詞畔の新庵に移られしなり』とあるに依て此歌の境地が分かる。文化十四年、良寛が六十一歳の時ここに移住して、文政九年、良寛七十歳のをり、島崎村の木村氏別邸に移るまでゐた所である。なほ此歌は、『おと宮の宮の神杉しめゆひていつきまつらむをちなけれども』の歌と一處に出來たものであるらしい。『をちなし』は『弱く力なし』の意である。

○

良寛和歌集私鈔は批評よりも選鈔が目的である。その選鈔短歌の部も殘り少なになつた。此等の歌は特別に註を必要としないものが多いから、其儘書く。

(八一)新玉の長き年月をいかにして明し暮らさむ麻布小衾　麻布小衾は薄き布團の事

(八二)かしましと面伏にはいひしかど此頃見ねばさびしかりけり　小供等を思ふ歌である

(八三)飯乞ふとわが來て見れば萩の花みぎりしみみに咲きにけらしも　定珍の元にて

(八四)飯乞ふと我が來しかども春の野に菫つみつつ時を經にけり

(八五)しぐれの雨まなくし降れば我が宿は風の木の葉に埋もれぬらむ

(八六)我が園に咲きみだれたる萩のはな朝な夕なに散りそめにけり

(八七)山かげの木の下いほに宿かりて語りはてねば夜ぞふけにける

(八八)秋もやゝうらさびしくぞなりにける小笹に雨のそそぐを聞けば (二六参照)

(八九)白妙の衣手さむし秋のよの月なかぞらに澄みわたるかも

(九〇)秋のぬに草葉おしなみ來しわれを人な咎めそ香には染むとも

(九一)松の尾の松の間を思ふどち歩きしことは今も忘れず

(九二)山かげの有磯の浪のたちかへり見れども飽かぬ一つ松かも

(九三)詫びぬれど我が庵なれば歸るなり心安きを思出にして

(九四)わさもよし君が心の眞實ゆも經はみ寺に歸るなりけり 盜まれし經卷復び歸る

(九五)ゆふぐれに國上の山を越え來れば衣手寒し木葉散りつつ (二四)参照

(九六)朝菜つむ賤が門田の田の面に千鳥なくなり春にはなりぬ

(九七)この園の柳の下に圓居して遊ぶ春日は樂しきを經め

○

(九八)君や忘る道や隱るるこのごろは待てど暮せど音信の無き

(九九)み山べのみ雪解くれば谷川に淀める水はあらじとぞ思ふ

(一〇〇)心もよ言葉も遠く達かねばはしなく御名を唱へこそすれ

(一〇一)現身の現ごころの止まぬかも生れぬ先に腸に染みしを

(一〇二)小鴉の塒に宿る聲ならで月みる友もあらぬ山住

(一〇三)わが庵に人の來るこそ煩けれとは云ふ

もののお前では無し

(一〇四)事しあれば事しあるとて君は來ず事なきときは音信もなし

(一〇五)今よりは古里人の音もあらじ峯にも尾にも積もる白雪

(一〇六)雨はれに裳の裾ぬれて來し君を一夜こにと云はば如何あらむ

(一〇七)霞たつ長き春日に鶯の啼く聲きけば心は和ぎぬ

(一〇八)霞たつ長き春日をこの宿に梅の花見て暮しつるかも

(一〇九)聲たてて啼けや鶯わが宿の梅のさかり

は常ならなくに

(二一〇) 薪こりこの山かげに斧とりて幾たびか
聞くうぐひすの聲

(二一一) この園の梅の盛となりにけり我が老ら
くの時にあたりて

(二一二) 春の野に若菜つみきて雉子のこゑ聞け
ば昔の思ほゆらくに

(二一三) 草の庵に足さしのべて小山田の山田の
蛙聞くが樂しさ

(二一四) 群肝のこころ樂しも春の日に鳥の群が
り遊ぶを見れば

(二一五) 足引の片山かげの夕月夜ほのかに見ゆ

る山梨の花

(二一六) 足引の國上の山の山吹の花の盛に訪ひ
し君はも

(二一七) 足引の山田の田居に啼く蛙こゑの遙け
きこの夕かも

(二一八) 春雨の降りし夕は小山田に蛙なくなり
聲めづらしも

(二一九) あしびきの山田のはらに蛙なく獨り寢
る夜のいねられなくに

(二二〇) 石室の田中の松を今日みれば時雨の雨
に濡れつつ立てり

(二二一) 手ををりて昔の友をかぞふればなきは

おほくぞなりにけるかな

(二三) 足乳根の母のかたみと朝夕に佐渡の島根をうち見つるかな

○

古來我國の詩體の一つに旋頭歌がある。これは又短歌とは別樣の面白味のあるものである。旋頭歌の體は五七七五七七であつて短歌の體よりも長い。長いから短歌よりも調子が張つて居なければならない。又單純で句法の反覆といふ事も自づからなる約束になつて居る。良寛は旋頭歌を約十首詠んだのみであるが、皆すぐれてゐる。一般に良寛の短歌よりも面白い位である。

(一) 山笹に霰たばしる音はさらさら。さらりさらりさらさらとせし心こそよけれ

(二) 秋のぬの千草おしなみ行くは誰が子ぞ。

白露の赤裳の裾の濡れまくも惜し。

(三) 白ゆきはいく重も積れ積らねばとて、玉桙の道踏み分けて君は來なくに

(四) 山かげのまきの板やに雨も降り來ね。さす竹の君が暫しと立ちとまるべく

(五) 山たづのむかひの岡にさを鹿立てり。神無月時雨の雨にぬれつつ立てり

(六) 足引の西の山べに關もあらぬかも。ぬば玉の今夜の月をとどめてあらむ

(七) 墨染の我が衣手の廣くありせば。世の中の貧しき人をおほはましもの

(八) この里に行き交ふ人はさはにあれども。

さす竹の君しまさねばさびしかりけり

(九)ときは木のときはかきはに君が祝ぎつる。
豐酒にその豐酒に我れ醉ひにけり

(一〇)あづさゆみ春野に出でて若菜つめども。
さす竹の君しなければ樂しくもなし

(一一)春されば木々のこずゑに花は咲けども。
紅葉の過ぎにし子等は歸り來なくに

秀松軒編、元祿十六年版『松の葉』琉球組に、『み山おろしの小笹の霰の、さらりさらさらとしたる心こそよけれ。險しき山のつづら折の、かなたへまはり此方へまはり。くるりくるくるしたる心は面白や』といふのがあると古泉千樫君が云つて呉れた。良寛の山笹に霰たばしるの歌は其から採つたのである。良寛は萬葉集を崇拜したが、女郎とおはじきをして遊ぶ事まで辭せなかつた。

又三味線の歌まで注意してゐた。

○

良寛は五十首あまりの長歌を詠んでゐる。みな面白いものばかりである。『私鈔』は短歌が主であるけれども、此等の長歌を割愛する事がいかにも殘念であるから、ところどころに註を加へ、假字ちがひを訂正し(考證が主でないからである)假字を漢字に直して讀み易いやうにし、若干首を鈔しようとおもふ。

○

由之へ(弟の由之が皮の數物を贈つた禮に詠し歌なり)

(一)敷島の大和の國は。古ゆ言擧せぬ國。然れども我は言あげす。
(一言のべて置くの意)過ぎし夏弟のたまひしつくり皮。(なめし皮の意)いや遠白く栲の穂にありにし(つまり白いと云ふ事である)皮や。我が家の寶と思ひ。行く時は負ひて持らし。寢る時は衾となして。束の間も我が身を去らず持たりせ

ど。奇しき驗も著く有らざりければ。此の度は深く考へ。殊更に夜の衣の上にして。床に引き延へ其がうへに。我が肌つけて臥しぬれば。夜はすがらに安眠して。ほのりほのりと深冬月。春日に向ふ心地こそすれ。

反歌

何をもて答へてよけむ玉きはる命にむかふこれのたまもの

しかりとも默に堪へねば言擧す勝ちさびをすな（得意がるなの意）わが弟の君

○

由之へ（良寛終焉に近き頃の作ならんと云ふ）

(三) 此の夜らのいつか明けなむ。この夜らの明け放れなば。をみな來て針魚を洗はむ。こいまろび（輾轉反側）明かし兼ねけり。長き此の夜を。

○

哀悼歌（左門泰樹の妻三十五歳にて歿せし時の作ならんといふ）

(三) 形見とて殘すふたりの兒ら見るに心の絆さえて。かにもかくにも言はむ術せむ術知らに隱りゐて。音のみし泣かゆ。朝な夕なに。

○

彌生の末つ方なほ雪の降ければ

(四) 風まぜに雪は降り來ぬ。雪まぜに風は吹き來ぬ。埋火に足さしのべて。つれづれと草の庵に。とぢこもりうち數ふれば。きさらぎも夢の如くに盡きにけらしも。

月よめばすでに彌生になりにけり野べの若菜もつまずありけり

○

(五) 風まじり雪は降り來ぬ。雪まじり雨は降り來ぬ。此の夕おきぬて聞けば。雁も天つみ空をなづみつつ行く。

○

(六) こき走る鱈にも我は似たるかも。朝には上にのぼり。かぎろひの夕さりくれば。下るなり(けり)。

○

(七) 岩むろの田中に立てるひとつ松あはれ。一つ松濡れてを立てり。笠かさましを。一つ松あはれ。

○

(八) 今朝よりは。ひとつ谷より出て來たが。牝猪は霧に隱されて。ひとむら薄わけて尋ねむ。(大雅堂畫贊)

○

(九) 昔も今も虛も眞も晴れやらぬ峰のうす雲立ちさりて後の光と思はずや君。

此歌は眞心尼の「山のはの月はさやかに照らせどもまだはれやらぬ峰のうす雲」に答へたものゞ。晩年の作である。

○

(一〇) わしびきの野積の山を。ゆくりなく我が越え來れば。をとめらが布さらすかと見るまでに。よを卯の花の(世を憂の花と言掛たり)咲くなべに。山ほととぎす。をちかへり己が時とや。來鳴き響もす。

○

(一一) たそがれに國上の山を越え來れば。高ねには鹿ぞ鳴くなる。麓には紅葉ちりしく。鹿のごと音にこそ鳴かね。紅葉のいやしくしくに。ものぞ悲しき。

○

(一二)あしびきの國上の山に庵して。い往き還らへ。山見れば山も見がほし。里みれば里も豐けし。春べは花咲きをゝり。秋されば。紅葉を手折り。久方の月にかざして。新田實の年の十年も過しつるかも。

○

(一三)國上の大殿(國上寺の本殿を云)の前の。一つ松いく代經ぬらむ。ちはやぶる神さび立てり。朝にはい行き逍遙り。夕べにはそこに出で立ち。立ちて居て見れども飽かず。ひとつ松はや。

○

(一四)鉢の子は愛しきものかも。幾年か我が持てりしを。けふ途に置きてし來れば。立つらくのたづきも知らず。居るらくの術をも知らに。刈菰の思ひ亂れて。夕づつのか行きかく行き。とめ行けば此處にありとて。我が許に人の持て來ぬ。嬉しくも持てくるものか。その鉢の子を。

○

(一五)行く水も堰けば止るを。老いらくの又かへるとは。現身の人も語らず。外國の書にも見えず。古もかくやありけむ。今の世も斯くぞありぬる。後の世も斯くこそあらめ。かにかくに術なきものは。老にぞありける。

ねもごろのものにもあるかな年月は山の奥までとめて來にけり

○

(一六)あしびきの山田の田居に。庵して晝はしみらに。飯乞ふと里に出で立ち。かぎろひの夕さり來れば。山越の風を時じみ。門さして

葦火たきつゝ。古を思へば夢の世にこそありけれ。

○

(一七) わくらはに人と生れるを。うち靡き病の床に。臥しこやし癒ゆとはなしに。いたづきの日にけに増せば。思ふ空(?)安からなくに。嘆く空苦しきものを。赤羅ひく畫はしみに。水鳥の息づき暮らし。ぬば玉の夜はすがらに。人の寢る安寢はいねず。垂乳根の母が在しなば。かい撫でて只在しを。若草の妻がありなば。執りもちて哺まましを。家とへば家も零りぬ。同胞も何地ゆきけむ。連もなく荒れたる宿を。現身のよすがとなせば。一日こそ堪へもしつらめ。二日こそ忍びもすらめ。わら玉の長き月日を。いかにして明し暮さむ。術をなみ音をのみぞ鳴く。ますらをにして。

此長歌は良寛が木村邸に於て老衰に傾き死に近きころの詠歌であつて、これが良寛の絶筆である。

○

(一八) あしびきの國上の山の冬ごもり。日に日に雪の降るなべに。行き來の道の跡も絶え。故里びとの音もなし。浮世をここに門さして。飛彈の匠が打つ繩の。只一すぢの岩清水。そを命にて新玉の今年の今日も暮しつるかも。

さよふけて岩間の瀧瀨音せぬは高ねのみ雪ふりつもるらし

○

(一九) あしびきの國上の山の。山かげの森の下やに。幾年か我が住みにしを。唐衣たちてしくれば。夏草の思ひ萎えて。夕づつのか行きかく行き。その庵の隱るゝまでに。その森の見えずなるまで。玉桙の路の隈ごと。隈も落ちず。顧見ぞするその山のべを。

○

(三〇) 國上の山の麓の乙宮の森の木下に庵して。朝な夕なに岩が根の。こごしき道につま木こり。谷に下りて水をくみ。一日一日に日を送り。送り送りていたづきは。身に積れども。現身の人し知らねば。はひはひて朽ちや死なまし。萩の根元に。

○

(三一) あしびきの山のたをりの紅葉を。わが濡れつゝも。君がみためと。た折り來し我が。

○

(三二) 冬ごもり春さりくれば。飯乞ふと草の庵を。立ち出でて里にい行けば。玉桙の道のちまたに。子供らが今を春べと。手毬つく一二三四五六七。汝がつけば我は歌ひ。我がつけば汝は歌ひ。つきて歌

ひて。霞立つ長き春日を暮しつるかも。

かすみ立つ長き春日を子ども等と手毬つきつつ今日も暮しつ

その放奔にして純眞の氣の漲つてゐる點に於て特徴を有つてゐる。ただ短歌と較べてみると、長歌の方が誇張してゐるところがある。『たどきも知らず』などを少し餘計に使ひ過ぎてゐる。また涙もろ過ぎるやうな所がある。長歌は調子で押してゆくことがあるから自然にさうなるのかも知れない。良寛の長歌は他の專門歌人などの作つた長歌に比して、粗で我儘で、俗謠調のものもあり必ずしも五七、七五調にはなつてゐないのもある。そこが又流動して止まざる所以であるかも知れない。長歌のみならず短歌でもさうであるが、良寛のものは、寒く乾いて固定してゐないで、溫い血が流れてゐるやうなところがある。もつと平たくいへば、情味がいかにも濃く出てゐるところがある。これは興味あるところである。第一の長歌の、『我肌つけて臥しぬれば、夜はすがらに安眠して、

ほのりほのりと深冬月。』などの句は、實に純眞なものである。逸話などの中には問々我儘すぎて厭な處もあるが、かかる歌になるとさういふ態とらしさが少しも無くなつてゐる。

○

良寛は折にふれて俳句も少しは作つた。『春雨や友を尋ぬる思あり』『雨の降る日はあはれなり良寛坊』『雨漏るや又寢る床の寒さかな』『幾連か先に飛び行く秋の葉』『まひるなかまこもがはらのぎやうぎやうし』『柴垣に小鳥あつまる雪の朝』『青みたる中に辛夷の花ざかり』など、寫生から出た平淡な中に妙がある。

良寛は書に於ても漢詩に於ても、其道の上手である事は予の贅言を待つまでもない。大正三年十月十六日ゆふべ。世にも尊き良寛和歌集一卷を、謹みて私鈔しをはりぬ。

『良寛上人』雜記

○

伊藤左千夫先生が良寛上人の歌を論ぜられた時には、まだ上人の一生涯を知るに足るやうな參考書は出來てゐなかつた。(大日本人名辭書、帝國人名辭典、日本佛家人名辭典などがあつたけれども誤謬が多かつた) 然るに今は、西郡久吾氏の『良寛全傳』のやうな精確な書物があつて、上人の一生を殆ど隈なく伺ふことが出來るやうになつた。予は、『私鈔』のをはつた序に、『全傳』より歌を味ふのに必要な文を鈔錄して參考にしたいと思ふ。これは予の覺え帳の樣なものである。それゆゑ委しくは是非『全傳』を讀まなければならぬ。

○

越後國三島郡出雲崎町、名主兼神職、橘屋山本氏新左衞門は明和元甲申十一月歿す。之より先き子女皆夭死す。身は頽齡に傾きしを以て、佐州相川町同族山本庄兵衞の長女秀子卽ち外姪を養女とし、後、與板町割元新木氏第九世與五右衞門富竹の第三男次郎左衞門を養ひて秀子に配す。四男・三女あり。良寛、由之、圓澄、澹齋、高子、村子、三日子之なり。良寛、圓澄は出家し、由之家を嗣ぎ、澹齋は早折し、高子は出雲崎町高島伊八郎に嫁し、村子は寺泊町外山氏に嫁し、三日子は淨玄寺曾根智現に嫁す。皆學德文藻あり。父次郎左衞門名は泰雄、通稱は左門又伊織、隱居後以南と號す。寛政十一己未年高野山にて歿すといふ。年六十四。母秀子天明三癸卯年四月歿す。年四十九。（良寛全傳六八頁參照）

○

○良寛略傳。良寛は寶曆七丁丑年を以て生る。幼字を榮藏といひ、字は曲と稱す。○性、魯直、沈默、恬澹、寡慾、人事を懶しとし唯讀書に耽る。衣襟を正して人に對する能はず。人稱して名主の畫行燈息子といふ。父母これを憂ふ。○成童のころ出して地藏堂町狹川子陽先生の塾に入らしめ和漢の學を兼修す。○安永三甲午年、十八歳にして父母に請うて出家し、尼瀨町曹洞宗光照寺第十二世玄乘破了和尚の徒弟となり、剃度を受け自ら良寛と稱し大愚と號す。○安永七戊戌年五月、備中國玉島圓通寺國仙和尚來越勸化して光照寺に滯錫す。良寛その偉器大德を敬慕して隨行す。時に年二十二なり。善光寺に詣で、江戸に遊び京師を經て玉島に赴き、難行苦行つぶさに傾寫を受く。○居る事七年、母の喪に遭ひ天明五乙巳年を以て歸鄕し追善を營み、再び飄然として玉島に赴き、居る事五年の後、中國九州に行脚し長崎地方に雲水す。蓋し渡清の大志ありしが如し。雄圖果さず、再び玉島に歸り、居る事六年にして父の訃に接し歸國す。途次高野山に上り、伊勢に詣で京師に至り、寛政十一庚申年を以て歸鄕し、再

び故山の人となれり。年四十四。此間二十有三年、到處名山巨刹を訪ひ、碩學善知識の提命を受け、學德圓熟の域に達せり。○文化元甲子年、國上山坂の五合庵、修理成りしを以て之に住す。時に年四十八なり。之より十三年間草庵に住して、讀經座禪して修行し、又江戸再遊の事ありき。道暇歌を詠じ、詩を賦し、臨池す、皆師匠なし。自修して入神の妙あり、蓋天稟といふべし。歌は萬葉集を玩味し、詩は詩經・離騷・十九首及陶淵明・寒山・李白・杜甫集等を愛讀し、書は懷素の自敍帖及道風朝臣のわきはぎ帖等を臨摹して其眞髓を得たり。○文化十三丙子年、老軀多病薪水に便ならざるを以て、五合庵を出でて、乙子祠畔の小庵に移る。時に年六十なり。○在庵十一年、益々老衰の域に入るを以て、庵をいでて島崎村木村元右衞門の別舍に入りて供養を受け、讀經し座禪し托鉢して齋修する事六年、天保元年十一月中旬より老病に罹りて臥床し、翌二年辛卯正月六日、正念にして示寂す。行年七十五歳。隆泉寺境内、木村氏墓地に葬り、其貯金四十兩を以て葬儀を營み、墓碑を建立せり。自謚大愚良寛高首座といふ。○其詩歌文書世間に散落せるもの多し。奇行逸話頗る多し。（良寛全傳自六九頁至七一頁參照）○良寛幼時の性質などに就いても種々の口傳があつて一定してゐないが、ここに錄したのは、西郡氏の精しき考證の結果である。

○

良寛の周圍の主なるものの略傳を鈔しておく。

○橘由之。　橘新左衞門泰儀。以南の第二子、良寛の實弟なり。天明六丙午年、父職を襲ぎて祠官並びに莊官となり、文化八辛未年年五十にして職を長男泰樹に讓り、剃髮出家し、菴室を與板に結び、風月を友として諷詠を事とす。雅髮後、無花果園由之と稱す。國學に長じ、和歌書畫をよくせり。壽七十三にて天保五甲午年正月十三日歿。配、渡邊氏安子。文化七庚午年五月歿。年四十二。（全傳一九七頁參照）

○權大僧都快慶法師。以南の第三男。良寛の實弟。名は圓澄。字は觀山。泊瀬の碩學にして、圓明院第十一世を襲ふ。寛政十二年申年正月五日寂。年三十一。時に良寛三十九歳。（全傳一四頁參照）

○橘中務香。　以南の第四男。澹齋と號す。文章博士高辻家の儒官たり。寛政三年八月二十七日歿。假定年齡二十一。（全傳一四頁及年譜參照）

○橘左門泰樹。　由之長男。通稱右馬之助、壯名を泰濟と稱し、北渚又眺島齋と號す。書を善くし歌道に通ず。天保二辛卯年七月二十三日歿。壽四十三。

○橘新左衞門泰世。　泰樹の長男。父の風を學び歌をよくし書に巧なり。文久三亥年四月十三日歿。壽五十四。（全傳一六頁參照）

○阿部定珍。　西蒲原郡渡部村。通稱は酒造右衞門。家世々庄屋をつとむ。壯にして和歌詩文を好み江戸に遊ぶこと三年諸名家と交る。歸來家職を襲ぎ理民の材を發揮す。公暇風月を友とし吟詠雅懷を敍ぶ。良寛國上在庵の時より施主

たり交遊たりしは其文書によりて明なり。天保九年六月二十日、西國靈場巡拜のため土佐にあつて、瘧病のために死す。（全傳一一九頁參照）

○解良叔問。　西蒲原郡牧が花村。通稱解良喜惣左衞門。豪族にして鄕士たり。良寛と親交あり、良寛の生活費と關係あり。詩もつくり、和歌もつくる。

○鈴木桐軒、文臺。　西蒲原郡粟生村儒者。詩文に關して親交あり。裔孫に豹軒鈴木虎雄氏あり。現在京都文科大學助敎授たり。藥房主人と號し、竹の里人の門に遊び根岸短歌會同人たり。

○貞心尼。　長岡藩士、奥村某の女、幼にして淨業を慕ふ。妙齡に至り北魚沼郡小出鄕の醫師某に嫁し、幾年ならずして不幸所天を喪ひ深く無常を觀じ、遂に柏崎町洞雲寺泰禪和尙に從ひて剃度を受け、後不求庵に住す。是より先良寛禪師の高德を敬慕せしが、文政の末年禪師を島崎村に訪うて和歌を學び且つ道義を受く。師其敏慧にして和歌に堪能なるを愛し、懇切に指導せしと。始めて

値遇せしは、師七十歳貞心二十九歳の時なり。爾來六星霜、花に鳥に月に雪に風に雨に往訪して敬事し、歌を練り道を講じ其傾寫を受け、禪師終焉の際所謂末期の水を呈せしは弟子としては此尼公のみなりきと。又禪師の詩歌の今日に傳はりしも尼公の蒐集せし力多きに居る。又禪師の肖像として後世に遺るもの亦此尼公の描寫せしものなり。肖像に題せる歌に曰く、『うき雲の姿はここにとどむれど心はもとの空にすむらむ』と。明治五年二月十日寂す。壽七十五。辭世の歌に曰く、『來るに似て歸るに似たりおきつ波立ち居は風の吹くに任せて』と。其禪師と贈答の和歌傳記等を手錄せしものを『蓮の露』といひ、……柏崎町中村藤八氏の秘藏にかかる。（全傳一六八頁參照）

○

十五歳にして元服し、莊官の家職をつぎ雙刀を帶んで樂々と暮してゐた榮藏がどうして出家したかといふに、つまりは僧侶になりたかつたからである。その時には俗人よりも僧侶の方が好きになつた爲めである。なぜ好きになつたかといふにそれは本人の內性命が然らしめたのである。盜賊の死刑を見て無常を觀じたとか、妻を迎へたが面白くなかつたとか、代官と漁民の喧嘩の仲に立つて世相を忼慨したとか、性魯放の爲めに世事を處理することが出來なかつたとか、いろいろな言傳はある。然しどれが動機といふ訣ではない。あらゆるものが皆その機緣となり得る可能性を有つてゐるのである。變人の若旦那と目されてゐた榮藏の事であるから、兩親も、成程僧侶などはよからうと承知したのかも知れんが、本人のうちには、もう何か凝結してゐたものがあつたに相違ない。また、多感雋敏で詩人の素質を備へてゐた父の以南が、榮藏の行方を洞見し得ないといふこともないのである。良寛は出家前新婦をむかへて半歳にして遯世したと傳へるものがある。男子と女人は相待に微妙である。合性にして其の境は益々いゝ。良寛、貞心の贈答歌を見るにほのぼのとした心の流露を見る。一

體良寛の妻といふのはどんな女人であつたのであらうか。（附記。山本家譜には榮藏妻帶の事が無い。恐らく訛傳であらう。さうすればかういふ心配は不必要である）

○

西郡氏の『良寛全傳』中には、長歌四十九首、反歌二十八首、旋頭歌十一首、短歌五百七十二首、合計六百六十首を收めてゐる。良寛には自ら書とどめた纒まつた詠草といふものはないさうである。それがどうして集まつたかといふに、貞心尼、林甕雄をはじめ、熱心な幾多の先人が蒐集の賜物である。全傳收歌の本をなしたのは、國上山冬籠詠草。阿部氏・解良氏・原田氏・鈴木氏・木村氏等所藏の數卷であつて、それに西郡氏自身の蒐集したものが加はつてゐる。全傳以前に出版された歌集には、小林氏良寛歌集、大宮氏良寛歌集の二つがある。われ等は深く如上の人々に感謝しなければならない。

○

○伊藤左千夫先生の評語。『私鈔』中の予の言は、一首一首に對する感想であつて、良寛の和歌全般に對する綜合論ではない。一首一首に對する感想といつても、寧ろ、一首中の一句一語などに對する感想と謂つてもよいのがある。さういふ言から綜合論を歸納することも出來るが、それは差當つての予の目的ではない。ここには先師伊藤左千夫先生が嘗て良寛の歌を論ぜられた文（明治四十年日本新聞所載）中より、若干の語を鈔し（部分の訂正、增補、削除をなしたことを斷つておく）て先生の說を伺はうとおもふ。それがやがて、良寛の歌に對する予の綜合論たるべきものであるからである。

（一）良寛禪師は、その人すなはち總て詩なり。その心すなはち詩なり。その詞すなはち詩なり。されば目に見たる物におのづから動ける心を、口に出でくるまゝの詞にて、直ちに歌をなせり。詩の心動いて、詩のしらべ影の物に從ふ如く出で來れるもの卽ち禪師の歌なり。

(二)禪師の歌は、心の響きをさながらに響かせたるものなり。　卽ち良寛上人は隈なくその歌の上に想見せられ得るを見ずや。一首の構成上に、少しだも手拵への痕を見ず、作者其の人の心は、何等の障りにも逢はず、何等の隔てにも逢はず、其思は其まゝに流露せるが故に、意味にも詞にもいささかのとどこほりを見ざるなり。構へたる思想、拵へたる詞のために、いつも本心の響きの障へらるゝものなることを知らざるは眞に憐むべきなり。世上多くの歌人等は、おのれの心を除物にして漫りに筆の先、詞の先に空想を構へ寧ろお伽噺に類する趣向を立つるを以て作家の本領と迷信し居るなり。かくの如き、詩人といはんよりは寧ろ詩細工人たる歌人等に、此禪師の歌を見しめば、必ずや素湯を呑むの思すと云はん。ひねくりこねくりの詩細工人者流いづくんぞ詩を談ずるの資格あらんや。

(三)禪師の歌には、想平凡にして材料の陳腐なるものあり。然かも全體として

平凡ならざる、陳腐ならざる所以のものは、作者の生活卽ち歌なるがゆゑなり。作者の生活卽歌の性命を爲せるがゆゑなり。

(四)禪師はおのれ以外に世に歌作る人のあることを心にとめざりし人なるに似たり。おのれの歌が人の歌に類することあるともあらずとも、それらの事に一切頓著せずして歌を作れるに似たり。或は新し或はふるしなど云ふ事だも念頭に置かざりしものの如し。故に其歌多くは平凡に類するもの多し。然れども禪師の歌は悉く自己の感興の產物なるが故に、平凡にも精神あり、生氣あり。是れ卽多くの歌人と其選を異にせる所、形骸の他に類すると否との如きは、考慮以外に置ける禪師の作意は唯其根本を誤らざるにありしを察すべし。

(五)吾詩は卽我なり。吾詩は吾が思想を敍したるにあらずして直ちにわれ其物を現したるものならざるべからず。故に其歌を見れば直ちに其作者を想見し得るの域に達すを要とす。禪師や果して能く以上の如き自覺ありしや否や、少し

く明瞭を缺くと雖も、其作歌中には能く以上の精神にかなへる佳作あるを認め得るなり。……禪師の作歌中、これは禪師の柄になき歌なりと思ふもの一首もなきは、禪師の高きを敬せざるを得ざるなり。

○

良寛が三十歳の時は丁度天明六年に當つてゐる。賀茂眞淵がすでに歿して、本居宣長および其の門人。加藤千蔭。村田春海。荒木田久老。小澤蘆庵。などの熱心なともがらの圓熟した時代である。良寛四十八歳で五合庵に住し初めは文化元年である。もう小澤蘆庵も本居宣長も歿し、文化二年には荒木田久老が歿し、同五年に加藤千蔭、同八年には村田春海が歿してゐる。文化二年は香川景樹が養家を去つて獨立した年である。それから良寛の寂に至る間は香川景樹の活動時代であつたと見てもよい。いろいろな流派が互に勉强して自流をひろめようとしたと謂つても、良寛の晩年に於ける我國の歌壇は、景樹の勢力の

定まつた時であると看做してもよからうと思ふ。良寛は天保二年に七十五歳で寂し、景樹は天保十四年に七十三歳で歿してゐる。良寛が眞に萬葉ぶりの歌を作つたのは五合庵定住以後にあるらしい。萬葉を尊ぶに至つたのはいはゆる古學派の言說作物から暗指を得たものか、或は全然交渉なくて然かなつたのか、一言で斷ずることが出來ない。しかし縱ひ直接作物の影響がないとしても、言說から幾分の暗指を得たと考へる方が良寛の歌風を解釋するのに便利である。

○

良寛の父以南は俳諧を作つた。俳人曉臺とも交通がある。多感な人であつて、晩年『天眞錄』を書いて幕府の役人からにらまれて、つひに高野に行つて歿した形跡がある。母山本氏秀はおとなしい然もまめまめしい人であつたらしい。良寛が晩年よんだ歌には父の事よりも母の事の方が多い。良寛のほかに、弟の圓澄は早くから出家し、由之もつひに出家し、妹の三日は僧侶に嫁してゐる。

兄弟は大體に於てみな文學が好きである。書もうまく由之などはなかなかうまいものである。由之も三日も相當の和歌を作り得た。

○

良寛は酒は好きであるが大がい三杯ぐらゐより餘計には飲まなかつたさうである。また煙草をのむ事が好きであつたさうである。○人が和歌の作法を問ふと、ただ萬葉集を讀めと云つたさうである。○良寛の三好とは、童男童女、手毬、はじきである。良寛の三嫌とは、料理人の料理、歌よみの歌或は詩人の詩、書家の書である。○良寛禪師戒語といふ貞心尼の書いたもののなかには、ねいりたる人をあわただしくおこす。とはず語。人の物いひきらぬ中に物いふ。ことわりすぎたる。酒にゑひてことわりいふ。腹たてる時ことわりいふ。子供をたらす。口をすぼめて物いふ。ゐなか者の江戸言葉。あくびと共に念佛する。人に物くれぬさきに何々やらうといふ。くれて後にその事を語る。おれがかう

したかうした。はなであしらふ。首を捻ぢつて理窟をいふ。などがある。○歌に『山かげの石間をつたふ苔みづのかすかに我は住みわたるかも』などがある如く、詩にもかういふ心持のがある。一つ二つ書いて置かうと思ふ。『千峰一草堂、終身粗布衣、任生口邊醭、懶掃頭上灰、已無銜花鳥、何有當鏡臺、無心逐流俗、任人呼癡獃』『秋夜々正長、輕寒侵我茵、已近耳順歲、誰憐幽獨身、雨歇滴漸細、蟲啼聲愈頻、覺言不能寢、側枕到淸晨』『國上山下是僧家、麁茶淡飯供此身、終身不遇穿耳客、唯見空林拾葉人』『千峰凍雲合、萬徑人跡絕、毎日唯面壁、時聞灑窻雪』『索々五合庵、實如懸磬然、戸外杉千株、壁上偈數篇、釜中時有塵、甑裡更無烟、唯有東村叟、頻叩月下門』などである。詩はどうも予には分からない。○良寛と貞心尼との因緣は極めて自然である。この事を思ふ毎に予はいゝ氣持になる。良寛は貞心尼に會つて、ますます優秀なる歌を作つた。その歌は寒く乾ききつたものでなく、戀人に對するやうな溫い血の

ながれてゐるものである。人間は生の身であるから、いくら天然を愛したとて、天然は遠慮なく人間に迫つて來る。そこにゐて心細くないなどいふのは虚である。良寛は老境に達してから淨い女の貞心から看護を受けた。本當の意味の看護である。良寛にとつては、こよなきGerokomikの一つであつたであらう。世にも尊き因緣である。

愚庵和尚の歌

愚庵和尚の歌

○

愚庵和尚略傳○弘化元年生。幼名久五郎。奥州磐城平(たひら)の城主、安藤對馬守の家中、甘田平太夫の次男。明治戊辰の役、年十五歳にして、兄善藏と共に平の城に籠る。戰終つて仙臺に落延ぶ。歸郷、父母妹の行方を知らず、兄は占者となつて奥州の隅々を搜す。明治二年磐城政務廳の沙汰として搜索す。その後久五郎は小池詳敬に從ひ中國から九州を搜す。明治七年横田大尉に從ひ臺灣征討に從軍す。鮫島高明桐野利秋と相知る。明治十年北海道より加賀越中越後を廻る。明治十一年大阪に行く。山岡鐵舟の門に入る。天田五郎といふ。鐵舟の世

話にて東海道の俠客次郎長の家に寓す。明治十二年歸國、兄と會談。新聞に父母妹搜索の廣告を出す。淺草の江崎禮二に弟子入し旅廻の寫眞屋となつて豆州から駿遠甲信に入り奥州に至る。明治十五年次郎長の養子になり山本五郎といふ。喀血。復姓。東海遊俠傳の著がある。德光狐の言を信じて遙々山形に下る。明治十七年頃千葉縣下の開墾の監督をなす。大阪內外新報社の幹事となる。○滿二十年間父母妹の行方を尋ねた。その間、足の踏む處、北は北海道奥羽から、西は琉球九州四國、中國又北陸つひに臺灣に及んだ。○明治二十年四月八日、林丘寺に入り、滴水和尙に謁見して髮を剃り鐵眼と稱す。其時の證人は京都の小川ていといふ媼さんで、天田五郎三十四歳の時である。○明治二十五年春、地を淸水產寧坂にトして茅を結び、滴水和尙賜ふ處の喝を扁し愚庵と號す。明治二十六年秋彼岸發錫、西國三十三所觀音巡拜。十二月二十一日歸庵。巡禮日記の著。腎を病む。○明治三十三年八月桃山の廬に移る。○明治三十七年一月

十七日午後零時五分寂。行年五十一。妻も子もない。○以上は『愚庵遺稿』所載の『血寫經』陸羯南氏の『愚庵遺稿の序文及び跋』より鈔したものである。

○

(一)生れては死ぬ理を示すちふ沙羅の木の花
美しきかも

(二)美しき沙羅の木の花朝咲きてその夕には
散りにけるかも

(三)朝咲きて夕には散る沙羅の木の花の盛を
見れば悲しも

沙羅樹は大和本草に『葉ハ榎又柿ニ似テ花白シ朝ニ開キ夕ニシボム花大ナリ夏サク』とある。無常迅速の理を示す花であると昔から言つてゐる。此等の歌は愚庵晩年の作に屬し、庭前の沙羅樹に見入つての作で空想の作ではない。い

かにも單純に素樸に詠み棄てて尙ほひしひしと讀者の心に迫るものがある。愚庵が佛門に歸した來歷を心に持つて閉目して此等の歌を讀味へると、成程と腑に落つるところがある。

○

(四)ちちのみの父に似たりと人が云ひし我が眉の毛も白くなりにき

(五)かぞふれば我も老いたりははそはの母の年より四年老いたり

『癸卯述懷』といふ題のある歌である。癸卯は明治三十六年であつて、愚庵の死ぬ前年である。當時愚庵は五十歲であつて、既に腎を病んで居た。二十年間父母妹を尋ねたがもう生死の程も分らない。山岡鐵舟から『今は早や外に向つて其跡を尋ねんよりは內に反つて其人を見るに若かざるべし』(血實經による)といはれて遂に佛門に歸してからもう十六年を經、その身病んで死に近づいた時の作である。明治戊辰に行方不明になつた時、愚庵の父甘田平大夫は六十五歲で隱居して平遊と稱へて居た。愚庵の母なみは四十七歲で、妹のぶは十一歲であつた。(父母を尋ぬるための新聞廣告による)愚庵の眉毛は特別に濃く太く異色を放つて居たと云ふ事である。(陸實氏による)愚庵の歌には親を憶ふ歌で優れた歌のあるのは無理もない事である。明治二十六年秋彼岸、父母菩提の爲め衆生結緣の爲め西國順禮した時の巡禮日記(愚庵遺稿にこれを收む)から數首拔く。

(六)ま幸くて在せ父母み佛の惠の末に會はざらめやも　近江石山寺にて

(七)おなじくは老蘇の森の下かげに宿りて行かな親おもふがに　老蘇森にて

(八)三十あまり三の御山のみ佛に仕へまつら

く父母のために衆生のために　巡禮日記の終りに

(九)三十あまり二の相ふだらくの光あまねく
度し給はな濟ひたまはな　おなじく

『三十餘三の御山』は西國三十三所の札所を指す。『三十餘二の相』は三十二相圓滿具足の觀音菩薩を指す。『ま幸くて』の歌は石山寺での作であるが、如意輪觀世音を本尊とせる第十三番石山寺の開山は良辨僧正である。良辨二歳の時鷲にさらはれ、奈良の二月堂の杉枝に懸つたのを、義淵僧正に育まれて、三十餘年の後生の母に再會したとある。又辨の僧正は棄子になつたが、生育の後、生母が石山の觀音に祈願して再會したと傳へられてゐる。そこで愚庵も『我父母も世におはさば如何に戀しと思ふらん。あはれ昔の因緣にあやかり、何時か我にも廻り會はしめ給へ』と祈念し納經して此歌を詠んだのである。

(一〇)わが袖も濡れこそ增され足乳根を戀ひ渡

す子が櫂の雫に

巡禮日記に『高野山の奥の院にて見たる芭蕉の句に。父母の頻に戀し雉子の聲。とありしを、昨日は左迄心に染みても思はざりしが、今思へば誠に名句なり。此上に丹生七社の詞あり、參詣して下り三度紀の川を北へ渡る。渡守年はやうやう十六七歳、何事か打案じたる體なりしが、頓て袂より柑子の稍色づきたるを二つ取り出し、跪きて我に供養せんとす。其樣の殊勝さ賤しき者の子とも覺えず、親ありやと問へば、今日は母なるものの命日にこそと、差しうつむく。あな不便、我れ讀經して得さすべしと云へば手を合せて打拜む。大悲呪、開甘露門等の回向す、嗚呼芭蕉の句は彌々名句なり、芭蕉はいよいよ名人なりけり』とあつて、此歌が書いてある。

(一一)愛子われ巡り逢へりと父母のその手をとれば夢は覺めにき

(一二)夢ならば繼ぎて見ましと我思へど音のみ
泣かれて寢がてぬかも　以上二首
(一三)世になしと思へる親を寢る夜落ちず相見
つるかも夢のたらちに
(一四)夢はしも奇しき物かも老の身も幼き時に
立ちかへり見つ　夢四首中二首
(一五)うたかたの泡と此世を知ればこそ彌戀ま
され亡人のあと　人への返歌二首
(一六)經もあり佛もあれば我もあり心の奥に亡
き人もあり

愚庵の抒情歌の基調が一種あはれ深く切實であるのがあるのは、全く親を憶ふ心の切なるが爲であると思ふ。ただ芭蕉の句に流るる律のやうに、もつと深

く滲み込む性のものでありたいと思ふ。愚庵の抒情歌は未だ大ざつぱ粗笨の譏を免れ難い所がある。

○

(一七)打日さす京のうちを事繁み伏見の里に我
は來にけり　桃山結廬の歌十九首の中
(一八)いめひとの伏水の里を美くしみ東山を住
み棄てて來つ　「いめひと」は「夢人」
(一九)三吉野の吉野の若杉丸木杉はしらに切り
て作る此庵
(二〇)斧とりて急げ工人ら久方の雨ふらぬ間に
つくれ此庵
(二一)甍には黄金をふきし桃山の高城の跡に庵

す我は

(三三)桃山の高城の跡の礎の千引の石を庭石と
せり

(三三)我庵は奇しき庵かも五月雨の梅雨に作れ
ど雨にさやらず

(三四)桃山の小松が下の茅刈りて昨日苫葺き今
日雨のふる

(三五)我が庵は誰が來て作る西濱の江崎の子等
が來てぞ作れる

(三六)我がために江崎の子等が月を經て作れる
庵は住み良けんかも

(三七)かがなへて作れる庵を作り果て今日を吉
き日と住居そめつも

(三八)遠山は葛城の山志賀の山生駒のやまの頂
も見ゆ

(三九)青丹よし奈良の都の春日野の春日の山も
霞みてぞ見ゆ

明治三十三年八月に清水の庵を棄てて、桃山の南麓、皆月の杜の處の谷間の上手に庵を建てた。その時の歌である。愚庵すでに腎を病み體も弱り清水邊は人通が多くて喧しいと思つたからである。愚庵は淡々と連作の歌を作つた。そして如何にも樂に一氣呵成に數十首の連作の歌を作つた。中には隨分平凡な俗人らしい歌も交つてゐるが、是等の歌は蒼古勁健の調をなして些かも浮華の氣が無い。一體愚庵は一面は才華の人である、一面は感傷の人である。それゆゑ是等の歌を見てもその才華を覗ふ事が出來る。明治三十年頃以降からこの才華

を包むに寂を以てし、歌に厭味が無くなり、平淡に然かも清新に澁味のある尊い歌を遺すに至つた。かういふ天然直寫のうちに自己の命を表はした歌は愚庵の歌の主な特徴を成してゐる。明治三十年頃は明治和歌革新の運動の勃興した時であるが、今から見れば未だ未だ幼稚である。明治三十三年頃でも未だ斑らで純の境には至らなかつた。竹の里人の歌でも明治三十四年頃からが純の萬葉風の歌になつたのである。愚庵の歌を見るには時代の背景を考に置かねばならない。愚庵の連作は曙覽や竹の里人の歌から暗指を得たとも考へられる。『鳴門觀濤歌十四首』といふのがある。左に數首抄錄する。

(三〇)淡路島三原松原朝ゆけば衣は濡れぬ松のしづくに

(三一)時つ風福良の浦ゆ船出して鳴門渦潮我は見に來し

(三二)遠人雁の飛島刈藻島鳴戸の瀨戸の烏帽子島見ゆ

(三三)渦潮は早し恐し檝とりて急げ舟人おほろかにすな

(三四)音にのみ聞きし鳴門の渦潮の渦まく瀨をも漕ぎ渡り見つ

(三五)漕ぐ舟を呼ぶは誰が子ぞ鳴門崎苅藻の島の海人少女かも

(三六)早瀨をい行き憚り海人小舟撫養の水門に榜ぎ果つる見ゆ

無論萬葉集の影響もあり、固有名詞の連續で作り上げた歌のやうに見えるが、此程まで一首が緊張するやうには、なかなか詠み難い。ただ愚庵の歌は良寛の

歌に比して、少し躁急であり粗笨である。又聖き稚さが無い。又しみじみとした妙境が無い。しかし強く急に推して行く所は愚庵の歌に多く見當る。『吉野山五十首吟』がある。吉野山の歌などは古來から已に陳腐極まるものになつてゐる。併し愚庵の吉野山の歌は寫生によつて活かして居るのは多としなければならない。それでも佳作は櫻花と關係ない歌の方にある。

(三七)吉野川川瀨を清み川のぼり蛙聞きつつ一夜寢にけり

(三八)三吉野はかしこき山ぞ那智熊野大峰つづき道の通へる

(三九)吉野川水音たかく落ちたぎち三船の山の峰にとどろく

(四〇)川上の丹生の祝が振る鈴の音の幽けく聞こえつるかも

(四一)川上の岩屋の奥の瀧つ瀨は松の火かげに照らしてぞ見る

(四二)岩屋には千々の佛のなりなりて自からなる姿をぞ見る

○

愚庵は俗にある時、已にいろいろの事をした。酸いも甘いも嚙みしめて居る。あらゆる階級の人に交り相識つて居る。人のさげすむ所謂『中年坊主』ではあるが、その苦行の有樣に至つては確かに滴水和尙も許す程の難有い所があつたに相違ない。愚庵の歌には題詠の歌が無い。盡く實地に觸れての歌ばかりであるのは當時にあつて珍としなければならない。周圍の生悟の僧どもから『新參の癖に修行も無くて』と陰言を言はれた程の尊い體であるから、世の僧侶の歌

の様に佛語の直譯の歌などは一首も作らなかつた。これも珍としなければならない。現世の高級の人とも相識り、嘗ては世の政治も論じ水滸傳の文を眞似て次郎長の周圍を物語つた『東海遊俠傳』を書いた程あつて、愚庵は時事慷慨の心を『童謠』の名で縱横に歌つてゐる。而して日露戰爭の大の主唱者であつた。

『いさぎよく年は代れりいざ大臣汝もなどでか早かはらざる』『久米の子よ命惜しくば大刀を解け黃金欲しくば商人となれ』『吁吁しやを未だかも吁吁いまだかもしやを吁吁今しかも』（しやたは詈る感動詞）などと歌つて居る。其他『臺灣童謠』『苗代問答』『西京童謠』『東京童謠』『戊戌七月童謠』『戊戌九月童謠』『十月童謠』などがあつて、時事を洗練された大和言葉で思切つて諷して居る。惜しいけれども今は錄する事を止める。それから回向院の相撲の歌などもある『堅庭を泡雪のごと向股に蹶ゑはらかす雄猛のよさ』などと歌つて居る。一部の人は愚庵の悟道は怪しいと云ふかも知れない。然し歌を味ふ上に於ては何等關するところが無い。現世執着の念は予等には却て興味がある。

○

（四三）霜鴉なきこそ渡れ三室戸の山下陰は未だ暗きに　三室戸の通夜に

（四四）大空は明け初めぬらし百鳥の塒をいづる聲のさやけさ　高野山にて

（四五）秋風の吹き初めしより草の庵に蟋蟀來啼き寢心のよき　秋のはじめに

（四六）澳つ鳥浮べる見れば波の上に我も住まゝく思ほゆるかも　須磨浦にて

（四七）獨り見れど飽かぬ月夜をさす竹の君と二人し見らくはよけむ　同、實へ

(四八)見まくほり我がする君は鳥が鳴く東を立
ちて明日か來まさむ　同

(四九)君來むと聞きにし日よりかがなへて今日
は十日となりにけらずや　同

(五〇)佐保川の名をなつかしみ我が來れば千鳥
は啼かず時早みかも　佐保川にて

かういふ歌は比較的愚庵の晩年の作に屬するものである。艶が少なく、又如何にも平凡のやうである。又單に萬葉集の歌の繰返のやうでもある。然し予には縱し繰返であつてもいゝ。愚庵の歌も最初から斯ういふ寂びた底光のある歌であつたのでは無い。愚庵は弱い心を有つて居たが一面は才華の人である。行く所として可ならざる人である。愚庵の書いた書を見ても一時は山岡鐵舟そつくりの字を書いて居る。普通の禪僧であつたら矢張り其流の字に達磨の一つも

描いて一生を終へたかも知れない。ところが愚庵の晩年の書は枯れ澄んで來て色氣の多い予等をして到底及ばないと感心せしめる字を書いて居る。歌も始は古今集流の綺麗な歌を詠んで居た。佛門に歸した時の歌は大分骨を折つたらしいが『鶯の聲ばかりして山寺の春はしづけさものにぞありける』といふのである。此歌は棄て難い歌だが前出の歌よりも劣つて居る。是等の變遷の理を考へて見ると予自身の爲めになる。尙數首かく。

(五一)白雲の夕居る山のその巖の苔むすしたに
我は棲まむぞ　歸雲巖

(五二)青梧の翠すずしき閼伽のみづ親の御ため
と朝な朝な汲む　碧梧井

(五三)我庵の苔の細道誰待つと棗は落ちし玉敷
くがごと　棗子逕

(五四)御佛に手向くる菊を白妙の衣の使待つと
思ふな　采菊籬

○

愚庵は鳥獸の歌を詠んで居る。その時には如何にも涙もろくなつて居て、前の歌などと比して別人の作品の觀があるのがある。父母の憶ふ心が迫つて來て涙もろくなるのであらう。その爲めに歌は割合に下手である。又純抒情の歌になると才氣が勝ち過ぎたり、主觀が輪廓ばかりで透徹しなかつたりして終つて居るのが多いやうである。愚庵の歌は未だ未だ進歩する餘地のあつた事を暗指してゐる。

(五五)雉子なく小松が下の稚草は人な摘みそね
雛の食むがに　春の歌の中に

(五六)命全く長く垂らさまく天地に祈れもろも

ろ摩訶般若波羅蜜　延壽祈禱二首の中

(五七)此蘭の香を聞く時は現身のこの世に逢へ
りと我思はなくに　一莖九花蘭十首の中

(五八)靈屋には魂はまさめどその人の目にし見
えねば悲しかりけり　悼自特庵

(五九)あだし野の露と消えても今更に空しき人
と我思はなくに　我山禪師の津送に

(六〇)八重椿咲きたる山に今日もかも來鳴とよ
もすひえ鳥の聲　春歌より三首

(六一)花曇り春の日永をひえ鳥の聲きく時は眠
けくもあらず

(六二)久方の雨は降るとも縱しゑやし笠著て行

かん梅の花見に

(六三)勝野浦ゆ漕ぎ出で見れば朝霧たてり饗庭野のならしの岡に朝霧たてり　壬寅中秋

(六四)饗庭野の晴れゆく空に雷のなる物部のならしの砲の音にしあるらし

(六五)近江の海竹生島には佛住みたり我ゆくや望の今宵を月も澄みたり

(六六)たくつぬの白髭の浦ぞ月見よろしき佛ます竹生島根は猶ぞよろしき

(六七)いさな鳥近江の海は誰が寶ぞも久方の月夜に見れば黄金満ちたり

○

桃山に於ける愚庵の晩年は多くは病身であつた。ただ若い時相識つた人々が大概出世して居たし、又京阪地方の紳士は云ふ迄もなく、方々の國々に散在してゐる、裁判官辯護士學者醫者富農豪商などとも知己になつて居た。それ等の人々に厚い世話になつたらしいが、遁世の心は飽く迄も貫徹して貧寒幽寂の生活を遂げて居た。嵯山和尚を助けて天龍寺本堂再建の業を成さしめた。陸實氏は『峨山は僧侶の修行に於ては鐵眼を小僧同樣に思つて居つたらうが、然し俗事の相談に就ては先づ鐵眼より外になかつたのだ』と云つて居る。

(六八)珠數の緒の玉のあな玉左手の手首にまけば音のさらさら　珠數二首

(六九)百あまり八の障を玉に貫きて手ならす我に障りあらめやも

(七〇)にはたづみ麻手小衾踏みはぎて夜べの暑

さに風ひきつ我は　臥床四首

(七二)世を棄てし我にはあれど病む時は猶ほ父
母ぞ戀ひしかりける

(七三)若草の孀もあらねば門邊栖む媼わがため
今朝も炊ぎつ

(七三)我が爲めに炊がば炊げさざれ石よなけて
炊げ齒に障るがに

(七四)天地にひとりの母を鳥邊野の今朝の烟と
立てて來らしも　濱舍の母の葬に

(七五)ららと照れる春日を鶯の鳥の玉水か
つぎ遊ぶよろしも　鶯の歌二首

(七六)鶯の鳥を我が美しみ今日もかも池の邊去
らず見つつ暮しつ

(七七)大和田に島もあらなくに梶緒絶え漂ふ船
の行方知らずも　辭世

愚庵は幼少から文事の嗜があつた。維新の亂後仙臺で和漢の學を勉强し、九州に居た時には丸山作樂の門に入つた。山岡鐵舟の處に居て學問と禪の修行もした。滴水峨山の薫陶を受くるに及んでその文筆が又特殊の色を放つに至つたのである。愚庵には宗教上の述作が無い。自分では爲ようともしなかつたらしい。ただ此事を以て直ちに僧侶として愚庵を評價してはならない。和歌に關しては特別に師事した人は無く晩年には專ら萬葉集を師とした。

○

愚庵の性質に就ては陸羯南氏の談がある。『愚庵の性質を一寸云はうが、前にも云うた通り、容貌は鼻隆く眉濃くして眼光人を射ると云ふ樣であるから、何

やら怖しいやうに見え、其の履歴も十五にして籠城したと云ふ位の事もあるので、知らぬ人は怖い人だと思つて居たらしいが、段々附合つて見ると、誠に深切で愛敬があつて而して如何にも情深い。持前の性質としては強く威張る者が嫌ひで弱い者を大變面倒見てやる。強い者を挫いて弱い者を助けると云ふのは殆ど持前になつて居た。其弊は惡を憎む事の甚しいと云ふ樣な事もある。一遍惡い事があれば何處迄も惡いとして側にも寄せ附けぬと云ふ位の傾があつたが、けれども陰險と云ふ樣な性質は少もなかつた。それから性來頗る潔癖で其の潔癖は自分の身廻りや家や庭などを奇麗にする事は勿論であるが、精神上の潔癖も頗る多かつた。何か人に疑はれるとか嫌がられるとか云ふ事があればそれを甚く氣にしたものである。世の所謂神經家といふ位で、能く知らぬ人は無頓着の樣に思ふが、可なり頓着した方の性質である。併し流石に佛門に入つて滴水や峨山の薫陶を受けたから、幾分か自分の癖を直すやうに努めたやうである。』

以上の愚庵の性質の一面は愚庵の歌を味ふ上に於て確かに興味深い物である。今回は愚庵和尙の歌の批評といふよりも紹介といふ程のものに留めて置く。

○

愚庵を知るに大切な參考書は、『愚庵遺稿』（明治三十七年七月五日東京本郷三丁目文求堂書店定價金壹圓）である。本書には愚庵詩稿、愚庵詠草、巡禮日記、東海遊俠傳が收載してある。陸羯南氏の序及び跋は甚だ親切な文である。附錄として、愚庵の傳記を物語風に書いた、血寫經がある。その他愚庵逸事、愚庵十二勝唱和等がある。巡禮日記の文は莊重簡潔で間に挿んである歌に佳いのがある。日記の序の一に大須賀筠軒翁の文もある。翁は大須賀乙字氏の父君である。（大正三年十二月一日記）

巻末小言

○

實朝の歌の「久かたのあま雲あへりかつらぎや高間の山はみ雪ふるらし」の「あまぐもあへり」の解釋が、どうも未だ徹底してゐなかつたやうであるが、上田秋成の歌に「こちかぜのけぬるき空に雲あひて木の芽春雨いまぞふりくる」といふのがある。秋成の此歌を見ると、矢張り雲が空にひろがつた趣であるから、實朝の歌の場合も、雲が重り合つてひろがつた意味に解釋すべきであるらしい。（五二頁參照）

○

實朝は建仁三年に年十二で征夷大將軍になつた。兄の頼家が重病で、家督相續の事でごたごたして、つひに出家せしめられた年である。翌元久元年に結婚したのであるが、最初足利義兼の女（むすめ）が選ばれたのを實朝は

否（いや）だといつて、前權大納言信清の女を迎へたのださうである。（吾妻鏡）その時、夫婦とも年十三であつた。實朝は眞に自ら信清の女を迎へようと云ひ出したか、どうかが瞭然とはしないが、三浦（周行）博士なども此事を全くは否定してゐない。實朝の歌風から考へても、まんざらの嘘とは言ひ難い。つまり實朝の一面には、早熟で、我儘で、豪華で、なかなか聽かないところがあつたのである。彼が勝手に萬葉ぶりの歌を作つたのなども、一面は此我儘な豪華な氣象に本づいてゐるとおもふ。いづれにしても此結婚のさまが面白い。なほ、十三歳でまさに夫婦の道を保ち、威張つてゐたところなども面白いのである。交情も佳であつたらしい。「ある人都の方へのぼり待りしにたよりにつけてよみてつかはす」といふ六首の連作（源實朝雜記參照）の「ある人」といふのは、夫人ではあるまいかと想像してもよからうと思ふ。承久元年正月二十七日實朝が公曉のために殺され、翌二十八日遺骸を勝長壽院に葬つた時、夫人は出家した。夫人との間には子がなかつた。

○

「短歌私鈔」を校正しながら一とほり讀むと、實朝の性質やら境遇やら政治上の爲事、日常生活の有樣などに就いて、もつと參考書から拾つて書いて置く方がよいやうな氣がした。しかし考へて見るとそれは僭越な事である。ただ後鳥羽上皇に奉つた三首についてだけ一寸增補したいと思ふ。私鈔で三首に就いて言つた時は、上皇と實朝との關係は誰でも知つてゐるやうな事を言つたが、あれだけでは分からない。上皇の詠歌に堪能であらせられたことは言ふまでもない。さうして實朝の詠歌に執心である事をきこし給うて、建保三年に旨を信濟の子忠信に傳へて、仙洞歌合の謄本を賜はつた事などもある。吾妻鏡に、是依二内々勅定一也とある。又實朝の官途累進についてはいつも御聽許になられた。つまり實朝を御にくみにはなられなかつた事は明かである。さういふやうな關係より實朝もしんから上皇に誠敬の念を捧げ奉つたのである。或る折にふれて、その心を歌つたのが彼の三首である。政事上のことに就いて何か

の默契ありしやうに說くのは、彼の三首以外の事に屬してゐるかと思ふ。それゆゑ「大君の勅をかしこみ」といつても、その「勅」は政事上に關する具體的なものではないかも知れない。これは三浦博士の書を參考しての說である。それから、仙洞歌合一卷をたまはつた建保三年七月六日は實朝二十四歲の時であつて、萬葉集を定家から贈られて、重寶何物過レ之乎といつたのは建保元年十一月で實朝二十二歲の時であるから、彼の三首は二十四歲あたりよりももつと後の作であらうと思はれる。

○

「短歌私鈔」で論じた、三人の歌人は、三人ともいはゆる專門家ではない。さうして三人とも勝手に萬葉集を尊重した人である。さうして周圍の歌壇などにはほとんど顧慮せずに、きはめて我儘に歌をよんだ人である。歌の技方には三人とも平氣に無頓著に古語などを使つた人である。それでゐて矢張り、何となく各時代のおもかげの存してゐるとおもはれる處がある。天然を詠んだ歌でゐてさうである。三人のうち、良寛のに一

番自然に詠まれてゐるのがある。年齢のせゐもあらう。

○

校正の筆をおいて一息つくと、相當の疲れをおぼえる。それでも爲事が一先づ片づいたと思ふと、嬉しくない事はない。こんな果敢ない爲事でも嬉しいのであるから、大きな學問上の爲事を爲とげた人の心などは、大分嬉いだらうと思つて居る。下の室では女どもが、明日は彼岸の中日だといふので何か話してゐる。墓地へんに歩兵が演習をしてゐる樣子で鐵砲の音がきこえる。夜は未だ淺いか、予はこれから一ぷく吸つて寢るのである。大正五年三月二十日よる。

短歌私鈔終

大正五年四月五日印刷
大正五年四月十日發行

短歌私鈔

不許複製

著者　齋藤茂吉　東京府豐多摩郡大久保町西大久保二百一番地

發行者　前田洋三　東京市芝區愛宕町三丁目二番地

印刷者　笠間音次

發行所　東京市外西大久保二〇一　白日社出版部（振替東京二六一六三）

東洋印刷株式會社印行